



平成 19 年度文部科学省「グローバル COE プログラム」研究拠点形成費補助金

(京都大学 機関番号 14301 拠点番号 D-07)

幸福感国際比較研究報告書

A cross-national study on happiness

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

2012 年 3 月

March, 2012

目 次

はじめに	1
1. 幸福感の国際比較研究: 13 カ国のデータ (子安増生・楠見孝・Moises Kirk de Carvalho Filho・橋本京子・藤田和生・鈴木晶子・大山泰宏・Carl Becker・内田由紀子・David Dalsky・Ruprecht Mattig・櫻井里穂・小島隆次)	4
2. 日本語調査票: 人生観意識調査	37
3. 英語調査票: Survey on personal views of life	44
4. 何が人を幸福にし何が人を不幸にするか – 国際比較調査の自由記述分析 – (大山泰宏)	51
5. Economics, psychology, and happiness (Masuo Koyasu)	78

註 1. 1～4はその一部が『心理学評論』(2012年6月刊)に掲載予定。

註 2. 5は『京都大学大学院教育学研究科紀要』(2012年4月刊)掲載論文の校正。

はじめに

グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」(拠点番号 D-07)は、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための拠点を形成することを目的として、平成 19 年度から 23 年度までの 5 年間にわたって教育・研究活動を展開してきた。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し、あるいは実践していくかについて、教育学研究科(教育科学専攻、臨床教育学専攻)、高等教育研究開発推進センター(第一部門)、文学研究科(行動文化学専攻)、人間・環境学研究科(共生人間学専攻)、こころの未来研究センター、霊長類研究所、野生動物研究センターに所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D) 以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価、という 4 つの研究ユニットを形成し、高度な水準のユニークな研究を進めてきた。

本報告書は、この中の「幸福感の国際比較研究」の成果を報告するものである。日本、大韓民国、中華人民共和国、南アフリカ共和国、オーストラリア連邦、ニュージーランド、カナダ、アメリカ合衆国、英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）、ドイツ連邦共和国、スペイン、メキシコ合衆国、ブラジル連邦共和国の13カ国を対象に、日本語、韓国語、中国語、英語、ドイツ語、スペイン語（本国版、中南米版）、ポルトガル語の7言語により「幸福感の国際比較調査」をインターネット調査として実施し、その有効回答者数は8,122人にのぼった。

データ分析の主要な結果は本報告書に収録したが、分析や検討をし尽くしたとは言えない。そこで、今後この原資料をデータアーカイブ化して、分析に供するために広く一般に公開する予定である。さまざまな場面で本書と本データが活用されることを願うものである。

本研究を進める途中経過において、アメリカ・ヴァージニア大学の大石繁宏准教授、カナダ・アルバータ大学の増田貴彦准教授には、データ検討会において基調講演を行っていただき、本研究に対して貴重なコメントをちょうだいした。ここに厚く御礼を申し上げたい。また、データ収集に際して、(株)クロス・マーケティングの協力を得たことにも謝意を表したい。

2012年3月7日

拠点リーダー・子安 増生

「幸福感の国際比較調査」研究チーム

子安増生（教育学研究科・教授）：拠点リーダー

楠見 孝（教育学研究科・教授）

鈴木晶子（教育学研究科・教授）

大山泰宏（教育学研究科・准教授）

Moises Kirk de Carvalho Filho（元教育学研究科助教；現京都外国語大学准教授）

藤田和生（文学研究科・教授）

Carl Bradley Becker（こころの未来研究センター・教授）

内田由紀子（こころの未来研究センター・准教授）

David Jerome Dalsky（高等教育研究開発推進センター・准教授）

櫻井里穂（元グローバル COE 助教；現広島大学准教授）

Ruprecht Mattig（グローバル COE 助教）

小島隆次（元グローバル COE 助教；現滋賀医科大学准教授）

データ分析協力

橋本京子（教育学研究科・研修員）

※所属・職階は 2012 年 3 月時点

幸福感の国際比較研究：13 カ国のデータ

¹ 子安増生・¹ 楠見孝・² Moises Kirk de Carvalho Filho・¹ 橋本京子・³ 藤田和生・¹ 鈴木晶子・¹ 大山泰宏・⁴ Carl Becker・⁴ 内田由紀子・⁵ David Dalsky・⁶ Ruprecht Mattig・⁷ 櫻井里穂・⁸ 小島隆次

(¹ 京都大学大学院教育学研究科、² 京都外国語大学外国語学部、³ 京都大学大学院文学研究科、⁴ 京都大学こころの未来研究センター、⁵ 京都大学高等教育研究開発推進センター、⁶ 京都大学グローバル COE、⁷ 広島大学教育開発国際協力研究センター、⁸ 滋賀医科大学医学部)

問 題

「幸福」は、個人にとっても、社会にとっても、人類にとっても、究極の達成目標とあってよいであろう。しかし、「幸福とは何か」、「幸福はどうすれば達成できるか」、「幸福な人とは誰か」といった問いに答えることは、決して容易ではない。ベルギーの劇作家でノーベル文学賞受賞者のモーリス・メーテルリンク (Maurice Maeterlinck, 1862-1949) は、「幸福とは、身近にありながら、捕まえようと思ってもすぐに逃げて行ってしまうものである」ということを、有名な戯曲『青い鳥 (L'Oiseau bleu)』において、寓話として示した。

とらえどころのない「幸福」が、学術研究の対象として、正面から検討されるようになったのは、比較的最近のことであると言ってよいだろう。ある研究テーマが学術研究の対象として公的に認められていることの有力な証拠の一つは、その研究テーマを中心的に取り扱う学術専門誌が刊行されていることである。幸福研究の成果を刊行する *The Journal of Happiness Studies* が社会学者 Ruut Veenhoven、心理学者 Ed Diener、哲学者 Alex Michalos の 3 人を中心にして創刊されたのは 2000 年のことであるから、この意味での「幸福」の学術研究は、まだ 10 年余の歴史しかないことになる。

もちろん、2000 年以前に幸福の学術研究が全くなかったというわけではない。たとえば、経済的豊かさと国民の幸福感の比例関係は、一国の中では成り立っても国際比較では成り立たないこと、国民一人あたりの富が年々増えて行っても、それに比例して幸福感が高まるわけではないことは、既に 1974 年に公刊された論文 (Easterlin, 1974) で示されており、今日ではその著者の名前を冠して「イースタリン・パラドックス」として知られている。また、Kahneman, Diener, and Schwarz (1999) の *Well-being: The foundations of hedonic psychology* は 2000 年以前の幸福研究の成果の一つの集大成である。

しかし、2000 年以後、様々な関連領域において幸福研究が活発になってきたこと

も確かな事実である。たとえば、過去5年間に、哲学(2010; Bortolotti, 2009; Bradley, Sissela Bok, 2009)、法学(Bok, 2010)、経済学(Fry, 2008; Graham, 2009; 大竹・白石・筒井, 2010)、社会学(大橋照枝, 2011)、心理学(Diener & Biswas-Diener, 2008; 大石, 2009)などの分野において、幸福研究に関する重要な著作が公刊されている。これらの著作の特徴の一つは、個別の学問領域にとらわれず、広く幸福の問題を考察しようとするスコープの広さにあるとみることができよう。たとえば、Derek Bokは、ハーバード大学の学長を20年にわたって務めた高名な法学者だが、*The politics of happiness* (Bok, 2010)は、哲学、政治学、経済学、心理学などの多様な観点から、幸福研究の新しい知見を示している。彼の妻の哲学者 Sissela Bok (2010)の *Exploring happiness: From Aristotle to Brain Science* も、その副題が示すように、哲学から脳科学までの広範な視点から論じたものである。

このように、幸福研究は、総合学術としての重要なトピックになっているのであるが、幸福研究の基本概念は、実はその定義がかなり曖昧なままである(大坊・堀毛・相川・安藤・大竹, 2009)。英語では welfare、(subjective) well-being、happiness、life satisfaction、日本語では福祉、幸福、幸福感、満足感、充足感などの言葉が、それぞれかなり入り乱れて用いられている。

状態としての「幸福」は、客観的に計量可能な「幸福度」(welfare, well-being)と主観的に体験される「幸福感」(subjective well-being, happiness)に大別することができる。

幸福度の代表的指標としては、国際連合開発計画(United Nations Development Programme; UNDP)の人間開発指数(Human Development Index; HDI)がある(国連開発計画, 2011)。HDIは、①出生時平均余命、②成人識字率(15歳以上)と初・中・高等教育総就学率の合成変数、③購買力平価で計算した一人当たりGDP(USドル換算)の3要因から構成される二次的合成変数である。2010年のHDI指数のベストテンは、1. ノルウェー(0.938)、2. オーストラリア(0.937)、3. ニュージーランド(0.907)、4. アメリカ(0.902)、5. アイルランド(0.895)、6. リヒテンシュタイン(0.891)、7. オランダ(0.890)、8. カナダ(0.888)、9. スウェーデン(0.885)、10. ドイツ(0.885)であり、西欧、オセアニア、北米のいずれかの国々である。日本はそれに次ぐ11位(0.884)であったが、これは十分高い数値・順位であると受け止めるべきであり、問題は高い幸福度が高い幸福感につながっているかどうかという点にある。ちなみに、韓国(0.877)も近年急速に順位を上げてきており、13. スイス(0.874)と14. フランス(0.872)を抜いて、12位になった。

他方、幸福感の指標として、Diener, Emmons, Larsen, and Griffin (1985)の人生満足感(life satisfaction, satisfaction with life)の測定尺度5項目は、この分野の定番ともなっており、本研究でもこの尺度を比較基準として使用するが、人生満足感は幸福感の一部を構成するものではあるものの、両者は必ずしも同一ではない(大石, 2009)。本研究では、幸福感の指標について改めて検討し、尺度を構成するとともに、それをを用いて13カ国のデータを取得して幸福感の国際比較を行うものである。

本研究の目標

本研究は、平成 19 年度～23 年度に実施された京都大学人文科学系グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」(拠点リーダー：子安増生、英文名称：Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds) のメンバーが幸福感の国際比較研究チームを構成し、日本、大韓民国、中華人民共和国、南アフリカ共和国、オーストラリア連邦、ニュージーランド、カナダ、アメリカ合衆国、英国 (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)、ドイツ連邦共和国、スペイン、メキシコ合衆国、ブラジル連邦共和国の 13 カ国を対象に、日本語、韓国語、中国語、英語、ドイツ語、スペイン語 (本国版、中南米版)、ポルトガル語の 7 言語により「幸福感の国際比較調査」を実施し、普遍的な幸福感と文化固有の幸福感の関係を明らかにするものである。調査は、有能感、生命感、達成感、幸福感等の関連性が明らかになるような尺度構成を行い、構造方程式モデリングによる分析を行うものである。

本研究では、図 1 の概念図に示したように、「心が活きる」ということを以下に示す有能感、生命感、達成感の 3 軸でとらえ、その合力としての幸福感を考えている。

有能感：人間は、さまざまな活動を通じて、知識と技能を獲得していく。知識とは「知る」ことや「分かる」ことであり、技能とは動作などが「できる」ことや道具などが「使える」ことである。人間はさまざまな知識や技能を獲得するによって、自分自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得る。知能や学力など自己のコンピテンスへの意識は、効力感、優越感、統制感、満足感、あるいは自尊心 (self-esteem) といった心理的プロセスとつながっていく (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995; Rosenberg, 1965; White, 1959)。反対に、「知らない」、「分からない」、「できない」、「使えない」といったことは、しばしば無能感、劣等感、不満感、挫折感といった感情を引き起こしやすい (Coplan, Findlay, & Nelson, 2004)。

生命感：人間は、一人の個人として存在するだけでなく、家族、社会、自然、あるいは宇宙などと「つながる」ことによって、この世界に生きているという感覚を持つことがある。このような感覚は、親和動機、関係性、社会性、自然観、宇宙観などと関わるが、ここではそれを総称して「生命感」と呼ぶことにする。Maslow (1954) の欲求階層説では、①生理的欲求 (physiological need)、②安全の欲求 (safety need)、③所属と愛 (love and belonging)、④承認 (esteem)、⑤自己実現 (self actualization) の 5 段階が区別されるが、生命感は「所属と愛の欲求」及び「承認」に関わるものである。逆に、こういった「つながり」が感じられないことを孤独感や孤立感という。古来「鰥寡孤独」という言葉があり、それぞれの漢字は「妻を失った男」、「夫を失った女」、「みなしご」、「老いて子のない者」を表している (『広辞苑』)。これらの言葉は、「つながり」の基本形が家族関係にあることを示唆しているが、それを社会、自然、宇宙などとのつながりにも拡大していくことができる。

達成感：人間が一定の目標に向けて共同作業などを行うとき、目標に向かう努力を積み重ねることによって「有能感」と「生命感」という 2 つの感覚を発展させ、その

行き着く先に、何ごとかをなしえた「達成感」というものを得ることがある。このように、達成感には、体験の繰り返し、ならびにそれに伴う時間の要因が入ってくる。Maslow (1954) の欲求階層説では、自己実現の段階に対応すると考えられる。反対に、多くの努力量を投入したにもかかわらず達成感が得られない場合には、徒労感、消耗感、無力感などにつながる。

幸福感：本研究において、幸福感は、有能感、生命感、達成感の3つのベクトルの合力として規定される。すなわち、幸福感を得るためにはこの3つすべてが必要であり、有能感、生命感、達成感のうち、そのどれが欠けても、十分な幸福感が得られないか、むしろ不全感が生ずる。ある行為の結果やその結果から生まれる状態は、本来それが良いはずのものであっても、有能感がなければ自分の力で獲得したものでないという疎遠な感じがつきまとい、生命感がなければ寂しさの感情が避けられず、達成感がなければ満足も生じない。もちろん、このどれか2つ、あるいは3つすべてが欠けていれば、不全感が一層生じやすくなることは言うまでもない。

図1の概念図が生まれたのは、以下のような経緯による。かつては科学的研究の対象とみなされなかった幸福感の研究が近年大変活発に行われるようになっており、そこにどのような新しい視点やデータを付け加えるべきかということを経験的に研究チーム12人の間で議論した(第4著者のみ、データ分析から参加)。そのメンバーには心理学以外の分野(教育学、哲学、人類学)の研究者が加わっており、討議の結果得られた図1は、心理学的な理論の裏付けのある仮説図というよりも、多角的な視点からまとめた概念図であり、その意味では曖昧な部分も多々含まれている。

特に、左下の「児童虐待、ドメスティック・ヴァイオレンス、いじめ、不登校、校内暴力、非行、犯罪、モラル・ハザード、地域紛争、戦争、環境破壊…」といった幾多のネガティブな現象は、心が生きていない状態と密接に関連するものであるが、このような問題はグローバルCOEプログラムの拠点の研究全体の中で取り扱うものであり、本研究が直接的に取り扱うものではない。

本研究で扱うのは、幸福感を有能感、生命感、達成感の3軸でとらえ、その合力としてのあらかずことの妥当性と、教育に対する意識が幸福感をどのように向上させるかについての部分であり、そのことを様々な文化的背景を持つ13カ国の人々のデータから検討するものである。

方 法

質問紙の構成

本研究で用いた質問紙は、次のような尺度等から構成されている(全97項目とデモグラフィック変数9項目)。

(1) デモグラフィック変数9項目(国籍、年齢、学歴、教育年数、両親の学歴、既婚未婚、子どもの数、居住形態、信仰)。これは質問紙の末尾の位置に置いた。

(2) 幸福感に関わる既存尺度：Diener et al. の人生満足尺度5項目、Uchida,

Kitayama, Mesquita, Reyes, and Morling (2008)の人並み幸福感尺度 9 項目、Rosenberg (1965) の自尊心尺度 10 項目。

(3) 幸福感の新たな尺度項目 (有能感 5 項目、生命感 9 項目、達成感 4 項目)。

(4) 幸福感に関わる新たな尺度項目 (メタ認知 9 項目、教育と幸福 6 項目)

(5) その他の尺度 (後悔、maximizer、locomotion-assessment、Huebner の多次元学生生活満足度の項目の一部、NHK 放送文化研究所の人生目標尺度ほか) : 今回は分析対象に含めていない。

(6) 文章完成法 : 「私は_____ときに幸せを感じる。」 「私は_____ときに不幸だと感じる。」 「私にとって幸福とは_____」 の 3 項目であり、この結果については、別掲の大山泰宏論文「何が人を幸福にし何が人を不幸にするか — 国際比較調査の自由記述分析 —」を参照されたい。

調査項目は、全員 (データ分析のみにかかわった第 4 著者を除く) の討議により、まず日本語版を作成し、日本人を対象にデータを取って分析を行い、各尺度の因子的妥当性と信頼性を確認したのち、英語、ドイツ語、スペイン語 (本国版、中南米版)、ポルトガル語、韓国語、中国語各国の言語に翻訳して実施した。翻訳は、その言語のネイティブ・スピーカーであり、かつ高度な日本語話者でもある心理学・教育学の研究者が行った。そのため、特にバックトランスレーションによる照合手続きは取っていない。

本章の末尾に付録として、今回用いた調査票の日本語版「人生観意識調査」と英語版 “Survey on personal views of life” を掲載する。

調査対象

インターネット調査会社クロスマーケティング社 (及びその海外協力会社) に登録しているモニターの中から、条件 (国籍、男女別、年齢範囲) を指定してサンプリングを行い、条件に該当する回答者のみが参加者ペースでインターネットを通して回答を行った。サンプリングの具体的な指定条件は、3 年齢群 (18~25 歳、40~49 歳、60 歳以上) の男女各同数に設定した。国別、男女別、年齢群別の回答者数は、表 1 に示したとおりである。

日本人対象の調査は、2009 年 10 月上旬に実施し、1,313 人から回答を得たが、① 回答時間 3 分以内の超短時間回答者、② 10 の尺度のうち 3 つ以上で同一評定値が連続した回答者、③ 文章完成法で回答しなかったり、いいかげんな回答をしたりした回答者のいずれかの条件に当てはまる 92 人を除外し、最終的に 1,221 人を分析の対象とした。

同様にして、国際調査を二次にわたって実施した。二次に分けたのは、質問紙の翻訳の準備と研究予算上の理由による。第一次国際調査は、2010 年 3 月にドイツ、英国、スペイン、メキシコ、ニュージーランドを対象に、日本人データの約半数となる各国 600 人を目標に実施した。第二次国際調査は、2011 年 3 月に韓国、中国、南アフリカ、米国、カナダ、ブラジル、オーストラリアを対象に、同様に各国 600 人を目

標に実施した。しかし、南アフリカの調査では、60代以上の回答者があまり多くは得られなかったため、全体の回答者も474人とどまった（表1）。

結 果

分析の手順

本研究では、2009年に取得した日本のデータについて、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、使用する尺度項目を決定した。次に、第二次国際調査の終了後、13カ国のデータについて、国別及び13カ国全体の各尺度の信頼性係数（Cronbachの α ）の算出、尺度値（項目の合計点の平均値）の算出、尺度値の国別、男女別、年齢群別の比較を行った。

国別分析の補完として、人生満足度、有能感、生命感、達成感、人並み幸福感、教育と幸福、幸福メタ認知、自尊心の8尺度得点について、国ごとに調査対象者全員の平均値を算出し、クラスター分析（最近隣法、Ward法、グループ間平均連結法）を実施した。

分析の最後に、図1の概念図を実証的に検討するために、共分散構造分析によるモデル化を試みた。「デモグラフィックな要因」→「メタ認知・自尊感情」→「幸福感の3要素（有能感、生命感、達成感）・人生満足度・人並み幸福感」という影響関係を仮定したモデルを構成した。

デモグラフィックな要因

学 歴 国別の回答者の学歴として、短大／大学卒業と大学院修了の割合を表2に示す。インターネット調査のため、インターネットに個人的にアクセスできることが調査協力の条件であり、国によってはこのことが調査参加の大きな制約条件となる。各国の大学進学率は、経済協力開発機構（OECD）加盟国については『図表でみる教育 OECD インディケータ』（経済協力開発機構，2011）などによって調べることができるが、表2の中国（77.38%）、メキシコ（54.83%）、南アフリカ（39.87%）などは、明らかに国民全体の平均からはかけ離れた短大／大学卒業者率の数字であり、本データの解釈に際して常に注意すべき点である。

居住形態 表3は、家族と同居か、一人住まいか、それ以外かを尋ねた結果である。「一人住まい」に焦点を当てると、ドイツ（30.18%）、カナダ（28.66%）、日本（21.29%）の独居率が高く、メキシコ（5.28%）とスペイン（8.61%）が低い。メキシコとスペインは、スペイン語圏でカトリック信者が多いという共通点を持っているが、家族主義の強い国柄として知られており、そのことがこの結果に表れている可能性がある。

信 仰 表4は、個人として信仰心（religious faith）を持っているかどうかを尋ねた設問の回答結果を示している。信仰心を持っている人の割合の少なさでは、日本（12.61%）と中国（24.02%）が際立っている。本調査では、信仰の有無のみを尋ねていて、信仰心がある場合の進行している宗派については特に尋ねていない。

因子分析の結果

前述のように、因子分析は日本人のデータ（1,221人）のみについて行ったものである。表5から表12にその結果を示している。各尺度の信頼性係数（Cronbachの α ）は、各国別と13カ国全体について算出したが、表には日本のデータについての α 係数を示し、以下の本文の説明では13カ国全体の α 係数を示すこととする。なお、今回の分析から除外した尺度は、 α 係数の低さが除外の主な理由である。

表5から、人生満足度尺度（Diener et al, 1985）の人生満足感（life satisfaction, satisfaction with life）の測定尺度5項目は、一因子構造であることが示された。なお、13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.849$ であった。

表6は、「有能感」の因子分析結果であり、1因子構造であることが示された。因子負荷量が -0.213 と低い「いつもまわりの誰かが助けてくれる」は、後の分析から除外した。また、因子負荷量がマイナスの項目は、合計点算出に際して数値を反転させた（以下同）。13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.696$ である。

表7は、「生命感」の因子分析結果であり、1因子構造であることが示された。13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.813$ である。

表8は、「達成感」の因子分析結果であり、1因子構造であることが示された。13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.740$ である。

表9は、「人並み幸福感」の因子分析結果であり、1因子構造であることが示された。13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.836$ である。

表10は、「教育と幸福」の因子分析結果の因子分析結果であり、2因子構造であることが示された。しかし、因子間相関が -0.030 と低いため、第一因子の「教育による幸福」のみを分析に用いた。なお、13カ国全体の信頼性係数は、「教育による幸福」が $\alpha = 0.817$ 、「教育なしの幸福」が $\alpha = 0.840$ である。

表11は、「幸福メタ認知」の因子分析結果であり、3因子構造であることが示された。因子名と13カ国全体の信頼性係数は、「幸福メタ認知：感情」 $\alpha = 0.589$ 、「幸福メタ認知：判断基準」 $\alpha = 0.503$ 、「幸福メタ認知：統制」 $\alpha = 0.777$ である。因子間の相関が比較的高いので、3下位尺度の合計点を分析に用いた。

表12は、Rosenberg（1965）の「自尊心」尺度10項目の因子分析結果を示している。この尺度の13カ国全体の信頼性係数は、 $\alpha = 0.868$ である。

国別・男女別の結果

主な尺度について、国別・男女別の結果をまとめたものを図2～図9に示す。国の並び順は、図の左からアジア（日本、韓国、中国）、アフリカ（南アフリカ）、オセアニア（オーストラリア、ニュージーランド）、ヨーロッパ（英国、ドイツ、スペイン）、北アメリカ（カナダ、アメリカ）、中央アメリカ（メキシコ）、南アメリカ（ブラジル）とした。メキシコは、アメリカ大陸の区分法によって、北米／南米の場合は北米に、北米／中米／南米の場合は中米に、北米／中南米の場合は中南米に入れられる。

図2は、人生満足度尺度の国別・男女別の結果であり、幸福感の尺度平均値が比較

的低い「日本と韓国」、中程度の「中国・欧米圏」9カ国、幸福感の尺度値が比較的高い「メキシコとブラジル」の3グループに分かれることが読み取れる。中国と南アフリカは、欧米圏に近い値である。なお、南アフリカは、英語で回答することを前提としているので、西欧系の白人が主に回答している可能性が考えられる。

図3は、有能感尺度の国別・男女別の結果である。ブラジルが欧米圏に近いほかは、有能感の尺度平均値が比較的低い日本と韓国（特に女性）、中程度の「中国・欧米圏」10カ国、有能感の尺度値が比較的高いメキシコの3グループに分かれることが読み取れる。

図4は、生命感尺度の国別・男女別の結果を示している。グラフの様子は人生満足度尺度のパターンに似ており、生命感の尺度平均値が比較的低い日本と韓国、中程度の「中国・欧米圏」9カ国、生命感の尺度値が比較的高いメキシコとブラジルの3グループに分かれることが読み取れる。

図5は、達成感尺度の国別・男女別の結果である。尺度平均値が比較的低い日本と韓国、中程度の「中国・欧米圏」9カ国、幸福感の尺度値が比較的高いメキシコとブラジルの3グループに分かれることがここでも読み取れる。

図6は、「人並み幸福感」尺度の国別・男女別の結果を示すものであるが、全体的に国別の差は小さく、比較的フラットなデータとなっている。

図7は、「教育と幸福」の第1因子「教育による幸福」の合計点の国別・男女別の結果である。尺度平均値が一番低い日本とやや低めの韓国、中程度の「中国・欧米圏」9カ国、比較的高いメキシコとブラジルの3グループに分かれるが読み取れないことはない。

図8は、幸福メタ認知尺度の3因子の合計点の国別・男女別の結果を示している。日本が最も低く、中国・ブラジルが高いという他の尺度の結果とは少し違ったパターンが見られる。

図9は、自尊心尺度の国別・男女別の結果を示している。有能感尺度（図3）の結果と似たパターンであり、ブラジルが欧米圏に近く、尺度平均値が比較的低い日本と韓国、中程度の中国・欧米圏10カ国、尺度平均値が男女とも高いメキシコの3グループに分かれることが読み取れる。

年齢別・男女別の結果

図10～図17は、「18～25歳」、「40～49歳」、「60歳以上」の3年齢群について比較したものであり、全般的に見れば、加齢にともない幸福感関連の尺度と自尊心の尺度上昇が見られた。ただし、いずれも横断的データであり、高齢者でインターネットにアクセスしているという条件がサンプリングの偏りを生じさせている可能性が大きい。

図10は、人生満足度尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、40～49歳が最も低く、18～25歳<60歳以上というパターンが見られる。

図11は、有能感尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、

18～25歳<40～49歳<60歳以上というパターンが見られる。

図 12 は、生命感尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、18～25歳<40～49歳<60歳以上というパターンが見られる。

図 13 は、達成感尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、18～25歳<40～49歳=60歳以上というパターンが見られる。

図 14 は、「人並み幸福感」尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、18～25歳=40～49歳<60歳以上というパターンが見られる。

図 15 は、「教育による幸福」尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、40～49歳が最も低く、18～25歳=60歳以上というパターンが見られる。

図 16 は、幸福メタ認知尺度の3因子の合計点の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、18～25歳=40～49歳=60歳以上と言ってもよさそうなパターンが見られる。

図 17 は、自尊心尺度の年齢群別・男女別の結果を示すものである。年齢群別では、18～25歳<40～49歳<60歳以上という明瞭なパターンが見られる。

これまでの諸外国における調査では、年齢と幸福の間にU字型の関係があるとの結果が示されているが (Graham, 2009)、人生満足度 (図 10) 以外はそのパターンではない。むしろ、自尊心 (図 17) のように年齢と共に向上するパターンが見られている。このデータの解釈あたっては、高齢者の場合、インターネットを使う調査に参加するという自体にバイアスがかかっていることを考慮する必要がある。

クラスター分析の結果

人生満足度、有能感、生命感、達成感、人並み幸福感の5尺度の得点について、国ごとに調査対象者全員の平均値を算出し、クラスター分析 (最近隣法、Ward法、グループ間平均連結法) を実施した。クラスター分析の手法によるグループの別れ方の違いは少なく、図 18 は、その代表として Ward法の結果を示すものである。この結果は、「オーストラリア、カナダ、中国、スペイン」(G1)、「ニュージーランド、英国、アメリカ、ドイツ、南アフリカ」(G2)、「メキシコ、ブラジル」(G3)、「日本、韓国」(G4) という4グループに大別されることを示している。

さらに、各グループの特徴を明らかにするために、5尺度それぞれにおいて4グループの間の差 (表 13 参照) に関して分散分析をおこなったところ、主効果はいずれも有意であった。TukeyのHSDでグループ間の平均値差 ($p<.05$ に設定) を検討した結果、人生満足度と生命観 ($G3>G2=G1>G4$)、有能感と達成感 ($G3>G2>G1>G4$)、人並み幸福感 ($G3=G2=G1>G4$) であった。日韓 (G4) はどの指標においても評定値が低く、一方、メキシコとブラジル (G3) は評定値が高い。「ニュージーランド、英国、アメリカ、ドイツ、南アフリカ (G2)」と「オーストラリア、カナダ、中国、スペイン (G1)」の評定値は中間にあるが、前者の方が有能感と達成感において高く、グループを分ける根拠がある。

共分散構造分析の結果

表 13 は、性別、年齢、学歴のデモグラフィックな変数とその他の尺度との相関を示している。尺度間には、かなり高い相関も見られている。

図 19 は、Amos 16.0 を用いて行った共分散構造分析の結果を示すものである。この分析に際しては、13 カ国全体で行った結果（最上段）と、図 18 のクラスター分析によって分かれた G1～G4 のグループを基礎とする多母集団同時分析を行った結果（下の 4 段）を示している。図 19 によると、4 グループ間の差は小さく、教育が幸福をもたらすとする態度は、自尊心と幸福メタ認知を高め、そのことが有能感・生命感・達成感から構成される幸福感を高めることを示しており、図 1 の概念図の妥当性を支持するものである。ただし、学歴から教育に至るパスは、有意であるとはいえ比較的影響力が小さい。さらに、有能感・生命感・達成感から構成される幸福感は、人並み幸福ならびに人生満足度に影響を及ぼすことも図 19 が示している。

考 察

幸福感の構造

本研究は、グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」をベースとして、図 1 のような概念図を出発点とし、教育学（教育哲学、教育史、比較教育学など）と心理学（認知心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学など）が協同して研究を進めてきた。

図 19 の共分散構造分析の結果から、有能感・生命感・達成感からなる幸福感に対して、教育が幸福をもたらすという態度が自尊心を媒介として影響を及ぼすことが実証されたことは意義深い。教育は、児童生徒の自尊心を高めるものでなければならぬのである。もちろん、今回実証できたのは、図 1 の概念図の骨格部分であり、今後さらに具体的な肉付けを行っていく必要がある。

幸福感が低い国：日本と韓国

本研究では、日本と韓国の幸福感が特に低いという結果が得られた。このことは、人生満足度などの調査では夙に知られてきたことである（Diener, Diener, & Diener, 1995）。しかし、重要なことは、問題部分で見たように、幸福度の指標である人間開発指数（HDI）の 2010 年版において、日本は 11 位という好位置であり、韓国もこの年に一気に 8 位アップの 12 位という高い位置に上ったのにもかかわらず、両国民の幸福感は低いという点である。

日本で生まれ育ち、韓国人女性と結婚してアメリカのヴァージニア大学に勤務する大石（2009）は、日韓両国が一流大学・企業を目指すエリート主義の社会であること、上下関係や世間の目を意識して生きなければならない窮屈な社会であること、強い向上心が自分にも厳しく当たる社会的性格を持っていること、都市部に人口が集中し、住宅と通勤の環境が悪いことなどを幸福感の低さの共通要素として挙げている。

また、片茂永（ピョン・ムヨン）編（2010）の『韓国の社会と文化』は、日本の大学で教えている韓国人研究者が中心となって執筆した韓国の社会と文化を日本人に紹介する本であるが、韓国では自動車と半導体産業が盛んになり、経済が急速に発展する一方で、非正規労働者が 50 パーセントを越え、世界一とも言われる受験競争と、常に隣国（朝鮮民主主義人民共和国）との戦争の危機を抱える中での徴兵制（男子）が若者に暗い影を落としていることが示唆されている。

幸福感が高い国：メキシコとブラジル

他方、多くの尺度においてメキシコとブラジルの幸福感が特に高いという結果が得られた。両国は、メキシコがスペイン語圏、ブラジルがポルトガル語圏に属するいわゆるラテン系であり、家族のつながりが強いとされるカトリック系国民の多い国でもある。そのことが居住形態の結果にも表れ、表 3 では、ドイツ（30.18%）、カナダ（28.66%）、日本（21.29%）の独居率が高いのに対して、メキシコ（5.28%）とスペイン（8.61%）は低い。

幸福感が最も高い国であるという結果が示されたメキシコは、どんな国であろうか。外務省情報（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html>）によれば、メキシコは、立憲民主制による連邦共和国であり、日本の約 5 倍の国土面積 196 万平方キロメートルの土地に、日本に次いで世界 11 位の人口となる 1 億 863 万人（2010 年）が住んでいる。民族構成は、欧州系と先住民の混血 60%、先住民 30%、欧州系（スペイン系等）9%、その他 1% であり、言語はスペイン語、宗教は国民の約 9 割がカトリックとされる。メキシコの経済は、1982 年の債務危機と 1994 年の通貨危機（メキシコ・ペソの暴落）により国民は急激なインフレと大量失業の苦しみを味わったが、その後は回復し 2010 年の GDP は 1 兆 40 億ドル、世界第 14 位である。国民一人当たり GDP では、メキシコは 61 位（9,566 ドル）であるが、経済発展が著しい「BRICs」と呼ばれる 4 か国のうちのブラジル（53 位、10,816 ドル）およびロシア（56 位、10,437 ドル）とそう大差はない。2010 年の HDI 指数（人間開発指数）は 56 位であり、国民一人当たり GDP に見合った順位である。

メキシコは、石油など豊かな天然資源を有し、産業化と都市化が進行し、経済も順調に発展しているが、他方では北の隣国アメリカとの経済関係、麻薬戦争と犯罪組織の問題、環境汚染の問題、アメリカに次ぐ肥満率の高さ、家族関係の変容など多くの社会問題を抱えているとされる（国本，2012）。国が豊かになっているから幸福感が高いのか、多くの社会問題があるにもかかわらず楽天的なのか、今後の検討を要する問題である。

自殺率

質問紙調査では、尺度平均値の差の結果は明瞭に現れていても、その解釈は一義的には行かない。たとえば、先に触れた独居率の高さや宗教心の薄さは、日本人の幸福感の低さに影響している可能性が考えられるが、13 カ国の比較を行った時には、独

居率の高さや宗教心の薄さだけを幸福感の低さの決定因と断言することは難しい。デモグラフィックな要因を含む複雑な要因をどのように取り上げていくかが求められている。

また、心理的な要因として、幸福感や自尊心の低さが声高に物事を主張しない「抑制的反応」のあらわれであるとする考え方もあるだろうが、その説明では、幸福感は高くても低くても問題がないということになり、そもそも幸福感を測定する意味がなくなってしまう。低い幸福感は、それなりにその原因を探して、可能なものは除去する必要がある。

今回の調査結果と密接に関連する現象に自殺率（10万人当たりの自殺者数）がある。表14にまとめたOECD加盟国35カ国の自殺率の統計（OECD Factbook 2011；<http://stats.oecd.org/Index.aspx>）によれば、日本と韓国は男女を合わせた「全体」の自殺率がOECD平均よりもはるかに高く、この表では韓国が1位、日本が4位である。逆に、10万人当たりの自殺率が最も低いのはメキシコである。ブラジルはOECD加盟国でないので表14にはないが、自殺率は低いことで知られている。中国と南アフリカを除く残り7カ国の自殺率は、メキシコより高いが、OECD平均よりも低い。以上の結果は、幸福感の結果と整合するものであり、抑制的反応説では説明がつかない。

もちろん、自殺者数は実際にはむしろ小さな数字であり、不幸であればすぐに時察するわけではなく、不幸が自殺に至るまでには、数多くの要因が関与する。たとえば、幸福感に男女差がなくても、自殺率には明確な男女差があり、表14のすべての国で男性の自殺率の方が圧倒的に高い。

自殺は、不幸の原因でなく結果であるから、自殺を防ぐには不幸を緩和するような個人的・社会的な手立てが重要である。しかし、おそらくその要因は一つではないので、さらにいろんな角度から検討していく必要がある。

【謝辞】

本研究の韓国語版と中国語版の作成に際して、教育学研究科の趙卿我（Jo Gyeonga）助教ならびに大学院生の銭龍虎（Qian Longhu）氏の協力を得た。記して感謝申し上げたい。また、本研究の途中経過において、アメリカ合衆国・ヴァージニア大学の大石繁宏准教授、カナダ・アルバータ大学の増田貴彦准教授には、本研究のデータ検討会における基調講演を行っていただき、本研究に貴重なコメントをちょうだいした。厚く御礼を申し上げる。

文 献

- Bok, D. (2010). *The politics of happiness: What government can learn from the new research on well-being*. Princeton, NJ: Princeton University Press. デレック・ボック (著)、土屋直樹・茶野努・宮川修子 (訳)、『幸福の研究 — ハーバード元学長が教える幸福な社会』、東洋経済新報社、2011年。
- Bok, S. (2010). *Exploring happiness: From Aristotle to Brain Science*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Bortolotti, L. (2009). *Philosophy and happiness*. London: Palgrave & Macmillan.
- Bradley, B. (2009). *Well-being and death*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 大坊郁夫・堀毛一也・相川充・安藤清志・大竹恵子 (2009). Well-being を目指す社会心理学の役割と課題. 対人社会心理学研究, 9, 1-32
- Coplan, R. J., Findlay, L. C., & Nelson, L. J. (2004). Characteristics of preschoolers with lower perceived competence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32, 399-408.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- Diener, E., & Biswas-Diener, R. (2008). *Happiness: Unlocking the mysteries of psychological wealth*. Oxford, UK: Blackwell Publishing.
- Diener, E., Diener, M., & Diener, C. (1995). Factors predicting the subjective well-being of nations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 851-864.
- Easterlin, R. A. (1974). Does economic growth improve the human lot? In P. A. David and M. W. Reder (Eds.), *Nations and households in economic growth: Essays in honor of Moses Abramovitz*. New York: Academic Press.
- Frey, B. (2008). *Happiness: A revolution in economics*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Graham, C. (2009). *Happiness around the world: The paradox of happy peasants and miserable millionaires*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Kahneman, D., Diener, E., & Schwarz, N. (1999). *Well-being: The foundations of hedonic psychology*. New York: Russell Sage Foundation.
- 経済協力開発機構編著 (2011) 図表でみる教育 OECDインディケータ (2011年版). 明石書店.
- 国連開発計画／横田洋三・秋月弘子・二宮正人 (監修) (2011). 人間開発計画 2010 (20周年記念版): 国家の真の豊かさ—人間開発への道筋. 阪急コミュニケーションズ.
- 国本伊代 (編著) (2011). 現代メキシコを知るための 60 章. 明石書店.
- Maslow, A. (1954). *Motivation and personality*. New York: Harper.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る. 教育心理学研究, 43, 306-314.

- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎（編著）（2010）. 日本の幸福度—格差・労働・家族. 日本評論社.
- 大橋照枝（2011）. 幸せの尺度—「サステナブル日本 3.0」をめざして. 麗澤大学出版会
- 大石繁宏（2009）. 幸せを科学する—心理学から分かったこと. 新曜社.
- 片茂永（編）（2010）. 韓国の社会と文化. 岩田書院.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **34**, 741-754.
- White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.

A cross-national study on happiness: Data from thirteen countries

Masuo Koyasu, Takashi Kusumi, Moises Kirk de Carvalho Filho, Kyoko Hashimoto, Kazuo Fujita, Shoko Suzuki, Yasuhiro Oyama, Carl Becker, Yukiko Uchida, David Dalsky, Ruprecht Mattig, Riho Sakurai, and Takatsugu Kojima

We conducted a cross-national study on the sense of happiness by collecting data from thirteen countries (Japan, South Korea, China, Australia, New Zealand, South Africa, United Kingdom, Germany, Spain, Canada, U.S.A., Mexico, and Brazil) with the use of an online survey method. The participants from each country comprised approximately 600 people (1,212 people for the Japanese data), with nearly the same number of males and females, and ranging in age from adolescence to maturity (18-25 years, 40-49 years, and above 60 years). Ninety-seven items were included in the questionnaire. A structural equation modeling revealed that happiness is composed of a sense of capability, a vital sense of life, and a sense of achievement. The results also showed that Japanese and Korean people are most unhappy, while Mexican and Brazilian people are most happy, with the other nine countries located in-between. The same pattern of results, unhappiness and low self-esteem for Japanese and Korean versus happiness and high self-esteem for Mexican and Brazilian, was consistently found in the other items or scales of this research. In general, the older generation is happier than the younger generation. Potential reasons for these findings are discussed.

表1 国別・男女別・年齢別の回答者数

国	男性				女性				合 計
	年齢			合 計	年齢			合 計	
	18-25	40-49	60以上		18-25	40-49	60以上		
日 本	181	195	220	596	205	204	216	625	1221
韓 国	126	132	50	308	128	127	50	305	613
中 国	137	149	33	319	146	142	34	322	641
南アフリカ	105	94	32	231	106	106	31	243	474
オーストラリア	100	105	108	313	101	106	106	313	626
ニュージーランド	85	100	104	289	103	90	100	293	582
英 国	91	90	95	276	91	91	94	276	552
ドイツ	93	90	92	275	93	90	92	275	550
スペイン	92	90	90	272	92	91	91	274	546
カナダ	102	102	103	307	102	102	103	307	614
アメリカ	90	89	90	269	90	92	91	273	542
メキシコ	92	94	90	276	96	128	49	273	549
ブラジル	150	101	52	303	151	105	53	309	612
合 計	1444	1431	1159	4034	1504	1474	1110	4088	8122

註1：南アフリカは、60歳以上の回答者を中心に、全体として回答者が得にくかった。

註2：メキシコは60歳以上の回答者が少ないので、50-59歳の回答者も含めた。

表2 回答者の最終学歴が短大／大学卒、大学院修了の比率

国	総人数	短大／大学卒業	大学院修了
日 本	1,221	745 (61.02%)	31 (2.53%)
韓 国	613	263 (42.90%)	39 (6.36%)
中 国	641	496 (77.38%)	27 (4.21%)
南アフリカ	474	189 (39.87%)	20 (4.22%)
オーストラリア	626	185 (29.55%)	28 (4.47%)
ニュージーランド	582	183 (31.44%)	43 (7.39%)
英 国	552	266 (48.19%)	31 (5.62%)
ドイツ	550	92 (16.73%)	5 (0.91%)
スペイン	546	168 (30.77%)	21 (3.85%)
カナダ	614	227 (36.97%)	28 (4.56%)
アメリカ	542	148 (27.31%)	43 (7.93%)
メキシコ	549	301 (54.83%)	65 (11.84%)
ブラジル	612	182 (29.74%)	62 (10.13%)
合 計	6,901	2,700 (39.12%)	412 (5.97%)

表3 回答者の居住形態

国	一人住まい		家族と同居		その他		合 計
日 本	260	(21.29%)	949	(77.72%)	12	(0.98%)	1221
韓 国	76	(12.40%)	520	(84.83%)	17	(2.77%)	613
中 国	85	(13.26%)	428	(66.77%)	128	(19.97%)	641
南アフリカ	52	(10.97%)	362	(76.37%)	60	(12.66%)	474
オーストラリア	120	(19.17%)	416	(66.45%)	90	(14.38%)	626
ニュージーランド	88	(15.12%)	375	(64.43%)	119	(20.45%)	582
英 国	86	(15.58%)	351	(63.59%)	115	(20.83%)	552
ドイツ	166	(30.18%)	309	(56.18%)	75	(13.64%)	550
スペイン	47	(8.61%)	461	(84.43%)	38	(6.96%)	546
カナダ	176	(28.66%)	354	(57.65%)	84	(13.68%)	614
アメリカ	106	(19.56%)	355	(65.50%)	81	(14.94%)	542
メキシコ	29	(5.28%)	498	(90.71%)	22	(4.01%)	549
ブラジル	76	(12.42%)	503	(82.19%)	33	(5.39%)	612
合 計	1367	(16.83%)	5881	(72.41%)	874	(10.76%)	8122

表4 回答者の信仰の有無

国	あり		なし		わからない/ 答えない		合 計
日 本	154	(12.61%)	1017	(83.29%)	50	(4.10%)	1221
韓 国	290	(47.31%)	293	(47.80%)	30	(4.89%)	613
中 国	154	(24.02%)	458	(71.45%)	29	(4.52%)	641
南アフリカ	390	(82.28%)	69	(14.56%)	15	(3.16%)	474
オーストラリア	321	(51.28%)	233	(37.22%)	72	(11.50%)	626
ニュージーランド	266	(45.70%)	257	(44.16%)	59	(10.14%)	582
英 国	247	(44.75%)	251	(45.47%)	54	(9.78%)	552
ドイツ	277	(50.36%)	228	(41.45%)	45	(8.18%)	550
スペイン	316	(57.88%)	175	(32.05%)	55	(10.07%)	546
カナダ	352	(57.33%)	203	(33.06%)	59	(9.61%)	614
アメリカ	411	(75.83%)	99	(18.27%)	32	(5.90%)	542
メキシコ	462	(84.15%)	70	(12.75%)	17	(3.10%)	549
ブラジル	478	(78.10%)	80	(13.07%)	54	(8.82%)	612
合 計	4118	(50.70%)	3433	(42.27%)	571	(7.03%)	8122

表5 「人生満足度」の因子分析結果

項目	F1	共通性
第1因子「人生満足度」 $\alpha=.824$		
3 大体において、私の人生は理想に近いものである。	.806	.650
1 私は自分の人生に満足している。	.798	.636
2 私の生活環境は素晴らしいものである。	.655	.429
5 これまで私は望んだものは手に入れてきた。	.655	.428
4 もう一度人生をやり直すとしても、私には変えたいと思うところはほとんどない。	.572	.327
寄与	2.471	
寄与率 (%)	49.419	
適合度検定 $\chi^2(5)=45.88$ ($p<.001$)		

表6 「有能感」の因子分析結果

項目	F1	共通性
第1因子「有能感」 $\alpha=.669$		
6 最後はきっと失敗に終わるという不安がある。	.745	.556
3 自分の力が及ばない。	.583	.340
5 最後はきっと報われる時が来る。	-.517	.267
2 自分一人で苦しむしかない。	.462	.213
1 自分の力で切り抜けられる。	-.428	.183
4 いつもまわりの誰かが助けてくれる。	-.213	.046
寄与	1.604	
寄与率 (%)	26.733	
適合度検定 $\chi^2(9)=42.74$ ($p<.001$)		

表7 「生命感」の因子分析結果

項目	F1	共通性
第1因子「生命感」 $\alpha=.803$		
1 私は世の中に貢献している。	.710	.504
5 私はこれまで自分がしてきたことに満足している。	.616	.379
8 私は周囲の生き物と調和して生きている。	.593	.351
4 私はみんなとうまくやっている。	.583	.340
7 私はこの地球のために何かすることができる。	.557	.310
9 私はこれまで生き物を幸せにしてきた。	.554	.306
3 私はこれまでこれといって生産的なことをしてこなかった。	-.510	.261
6 私がない方が世の中はうまく回る。	-.479	.229
2 私がいなくても、この世界は変わらない。	-.471	.222
寄与	2.902	
寄与率 (%)	32.343	
適合度検定 $\chi^2(27)=429.15$ ($p<.001$)		

表8 「達成感」の因子分析結果

項目	F1	共通性
第1因子「達成感」 $\alpha=.558$		
2 社会の中で自分は何か役に立っている。	.551	.303
1 説明してもらえれば、どんなことでもたいてい理解できる。	.515	.265
3 社会を変えていこうという気持ちがあれば、社会を変えることができる。	.479	.230
4 自分の力で何かを成し遂げると、幸せな気持ちになる。	.422	.178
寄与	0.976	
寄与率 (%)	24.399	
適合度検定 $\chi^2(2)=22.25 (p<.001)$		

表9 「人並み幸福感」の因子分析結果

項目	F1	共通性
第1因子「人並み幸福感」 $\alpha=.911$		
2 身近な人たち並みの幸せを手にはしていると思う。	.845	.714
1 まわりの人たちと同じくらい幸せだと思う。	.824	.679
3 まわりの人たちと同じくらい、それなりにうまくいっている。	.809	.655
9 まわりの人並みの生活は手に入れている自信がある。	.792	.627
6 平凡だが安定した日々を過ごしている。	.754	.569
4 家族や友達とのんびり過ごせている。	.674	.454
8 まわりの標準から外れて、一人不幸である。	-.668	.446
5 大切な人を幸せにしていると思う。	.623	.388
7 大きな悩み事はない。	.613	.375
寄与	4.908	
寄与率 (%)	54.529	
適合度検定 $\chi^2(27)=204.93 (p<.001)$		

表10 「教育と幸福」の因子分析結果

項目	F1	F2	共通性
第1因子「教育による幸福」 $\alpha=.833$			
8 私が受けてきた教育は、私を幸福にしてくれている。	.867	-.025	.753
6 私が受けてきた教育は、私の能力を高めてくれている。	.762	.007	.580
7 私が受けてきた教育は、私の人間関係を豊かにしてくれている。	.747	.022	.558
第2因子「教育なしの幸福」 $\alpha=.819$			
5 教育の力がなくても豊かな人間関係を作ることができる。	.006	.801	.641
9 教育の力がなくても人間のできることはたくさんある。	.030	.770	.592
10 教育の力がなくても人は幸せになれる。	-.033	.758	.577
因子間相関	-.030		
適合度検定 $\chi^2(4)=9.72 (p<.05)$			

表 11 「幸福メタ認知」の因子分析結果

項 目	F1	F2	F3	共通性
第 1 因子「幸福メタ認知：感情」 $\alpha=.637$				
8 私はたびたび、自分の今の感情について考える。	.810	.007	-.118	.625
3 私はたびたび、自分が今思っているよりも幸せに感じるべきかどうかを考える。	.558	-.091	.059	.295
9 自分が不幸を感じているときには、自分の振る舞いをからそれと分かる。	.466	.069	-.011	.245
5 不幸な気分するとき、その原因について客観的に考えるようにしている。	.349	.080	.260	.280
6 自分にとって、「不幸」「悲しみ」「悲嘆」などの言葉は、明らかに違う意味を持っている。	.225	-.019	.101	.068
第 2 因子「幸福メタ認知：判断基準」 $\alpha=.641$				
4 私は周りの人を幸せにすると、自分も幸せな気分になる。	-.006	.841	-.074	.662
7 もし、自分の周りの人々が幸せを感じているならば、それは自分も幸せに感じるべき良い兆候である。	-.023	.574	.080	.360
1 幸福と思うかどうかは自分の思い次第だ。	.005	.444	.031	.211
第 3 因子「幸福メタ認知：統制」 $\alpha=.727$				
10 私は自分を元気づけるにはどうすれば良いかを正確に分かっている。	-.007	.023	.829	.699
2 私は自分がどうすれば幸せを感じることができるか正確に分かっている。	.024	-.008	.680	.466
因子間相関				
	F1			
	F2	.398		
	F3	.253	.380	

適合度検定 $\chi^2(18)=38.93$ ($p<.01$)

表 12 「自尊心」の因子分析結果

項 目	F1	共通性
第 1 因子「自尊心」 $\alpha=.865$		
7 私は自分のことを無用の人間だと時々感じる。	.732	.536
4 私にはあまり誇れるものがない気がする。	.703	.494
3 大体において、私は自分を人生の落伍者だと思いがちである。	.700	.489
9 時々私は全くのろくでなしだと思ふことがある。	.684	.468
8 全体的に私は自分自身に満足している。	-.674	.455
10 私は自分を価値ある人間、少なくとも他人と同程度価値がある人間だと思う。	-.633	.401
1 私は自分が多くの長所を持ち合わせていると思う。	-.610	.372
5 私は自分自身に対して肯定的な態度をとっている。	-.538	.289
2 私は他のほとんどの人たちと同じくらいのことが出来る。	-.515	.265
6 私はもっと自尊心がもてればいいのになと思う。	.448	.201
寄 与	3.97	
寄与率 (%)	39.703	

適合度検定 $\chi^2(35)=702.95$ ($p<.001$)

表 13 各尺度間および各尺度とデモグラフィック変数との相関

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
1. 性別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2. 年齢範囲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3. 学歴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(1:小学校, 2:中学校,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3:高等学校	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4:専門学校等,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5:短期大学/大学,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6:大学院)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4. 自尊心	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5. 教育による幸福	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6. 幸福メタ認知	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
M(SD)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1. 性別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2. 年齢範囲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3. 学歴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(1:小学校, 2:中学校,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3:高等学校	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4:専門学校等,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5:短期大学/大学,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6:大学院)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4. 自尊心	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5. 教育による幸福	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6. 幸福メタ認知	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
M(SD)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1. 性別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2. 年齢範囲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3. 学歴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(1:小学校, 2:中学校,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3:高等学校	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4:専門学校等,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5:短期大学/大学,	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6:大学院)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4. 自尊心	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5. 教育による幸福	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6. 幸福メタ認知	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

全体 (13 か国: $n=8,122$)
 グループ 1 (中国, オーストラリア, スペイン, カナダ: $n=2,427$)
 グループ 2 (南アフリカ, ニュージーランド, 英国, ドイツ, アメリカ: $n=2,700$)
 グループ 3 (メキシコ, ブラジル: $n=1,161$)
 グループ 4 (日本, 韓国: $n=1,834$)

7. 有能感	3.63 (0.69)	.034**	.114***	.026*	.731***	.396***	.205***	—
	3.58 (0.68)	.043*	.137***	.035 ⁺	.716***	.363***	.180**	—
	3.75 (0.65)	.066*	.099**	.047*	.733***	.346**	.147***	—
	3.91 (0.74)	.103***	.216***	.125***	.713***	.362***	.079*	—
	3.34 (0.63)	-.068*	.094**	-.008	.652**	.362**	.345**	—
8. 生命感	3.64 (0.63)	.043***	.133***	.056***	.730***	.530***	.346***	.674***
	3.69 (0.58)	.079**	.194***	.098***	.714***	.503**	.371**	—
	3.73 (0.55)	.198**	.114**	.090**	.674**	.418**	.263***	—
	4.02 (0.63)	.066*	.245**	.111**	.719***	.569**	.250**	—
	3.22 (0.57)	-.073*	.136**	.022	.718**	.499**	.404**	—
9. 達成感	4.03 (0.63)	.028*	.063***	.049***	.526***	.602***	.434***	.633***
	4.04 (0.61)	.069**	.162***	.087***	.453**	.594**	.466**	—
	4.15 (0.50)	.031	-.019	.044*	.433**	.458**	.352***	—
	4.41 (0.68)	.085**	.177**	.048	.496**	.760**	.403**	—
	3.60 (0.56)	-.056*	.045*	.126**	.506**	.551**	.474**	—
10. 人並み幸福感	3.16 (0.85)	.043***	.097***	.038**	.547***	.428***	.293***	.384***
	3.23 (0.84)	.053**	.130***	.029	.554**	.495**	.381**	—
	3.23 (0.81)	.052**	.114**	.028	.604**	.349**	.158**	—
	3.56 (0.88)	-.015	.110**	.102**	.455**	.446**	.316**	—
	2.72 (0.71)	.062**	.034	.042*	.570**	.456**	.303**	—
11. 人生満足度	3.16 (0.85)	.046***	.017***	.015	.518***	.438***	.232***	.384***
	3.23 (0.84)	.054**	.078***	.004	.450**	.431**	.245**	—
	3.23 (0.81)	.068**	.005	.032	.528**	.348**	.092**	—
	3.56 (0.88)	.004	.042	.073*	.435**	.426**	.264**	—
	2.72 (0.71)	.048*	-.009	.028	.465**	.381**	.254**	—
								.455***
								.314**
								.583**
								.685**
								.669**
								.639**
								.583**

注：数字は上から，全体 ($n=8,122$)，グループ1 (中国，オーストラリア，スペイン，カナダ： $n=2,427$)，グループ2 (南アフリカ，ニュージージーランド，英国，ドイツ，アメリカ： $n=2,700$)，グループ3 (メキシコ，ブラジル： $n=1,161$)，グループ4 (日本，韓国： $n=1,834$)

*** $p < .001$ ，** $p < .01$ ，* $p < .05$ ，⁺ $p < .10$

表 14 OECD 加盟国の自殺率統計(10 万人当たり人数)

順位	国	全体	男性	女性
1	韓国	28.4	39.3	19.7
2	ロシア	26.5	49.4	7.9
3	ハンガリー	19.8	33.8	8.0
4	日本	19.7	29.2	10.5
5	フィンランド	17.3	26.0	8.9
6	スロベニア	17.2	28.2	6.7
7	エストニア	16.8	31.2	4.8
8	ベルギー	16.2	24.6	8.4
9	スイス	14.3	20.6	8.7
10	フランス	13.8	21.6	6.8
11	ポーランド	12.9	23.2	3.5
12	オーストリア	12.0	19.7	5.2
13	チェコ	11.4	20.1	3.4
14	OECD 平均	11.3	18.1	5.1
15	アイルランド	11.3	18.0	4.6
16	ニュージーランド	11.2	17.8	5.0
17	スウェーデン	11.0	16.1	6.0
18	チリ	11.0	18.5	4.1
19	ノルウェー	10.9	15.7	6.2
20	アメリカ	10.5	17.1	4.3
21	アイスランド	10.3	16.6	3.9
22	カナダ	10.2	15.7	4.9
23	デンマーク	9.9	15.0	5.3
24	スロバキア	9.3	17.9	1.7
25	ドイツ	9.1	14.5	4.3
26	オランダ	7.8	11.2	4.6
27	ルクセンブルグ	7.8	13.3	2.7
28	オーストラリア	7.5	11.9	3.3
29	ポルトガル	7.3	12.5	2.9
30	英国	6.2	9.8	2.6
31	スペイン	6.0	9.7	2.6
32	イスラエル	5.0	8.8	1.6
33	イタリア	4.9	8.0	2.1
34	メキシコ	4.4	7.5	1.5
35	ギリシア	2.8	4.8	0.8

註：太字は、本研究の調査対象国（OECD 加盟国）

教育の力！

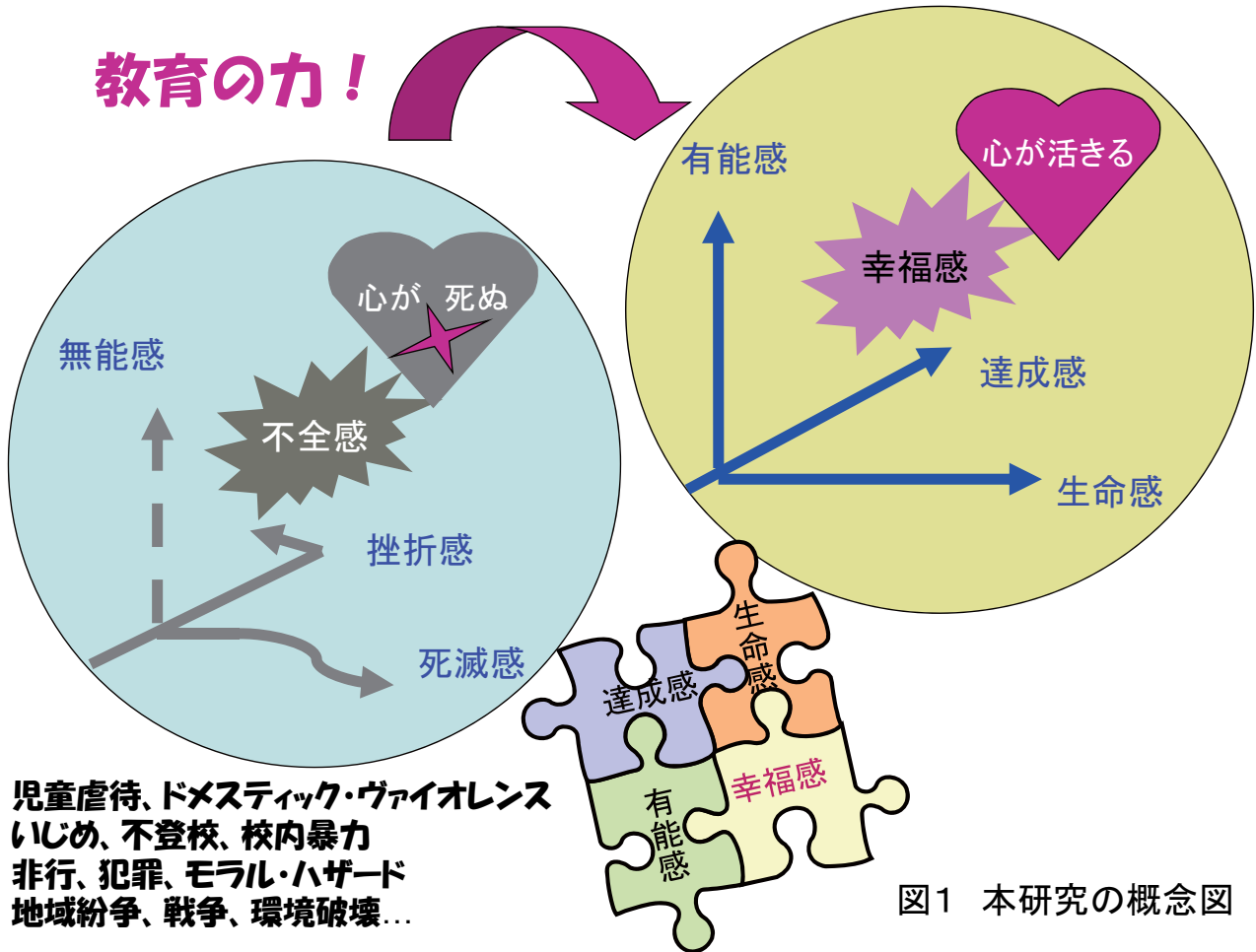


図1 本研究の概念図

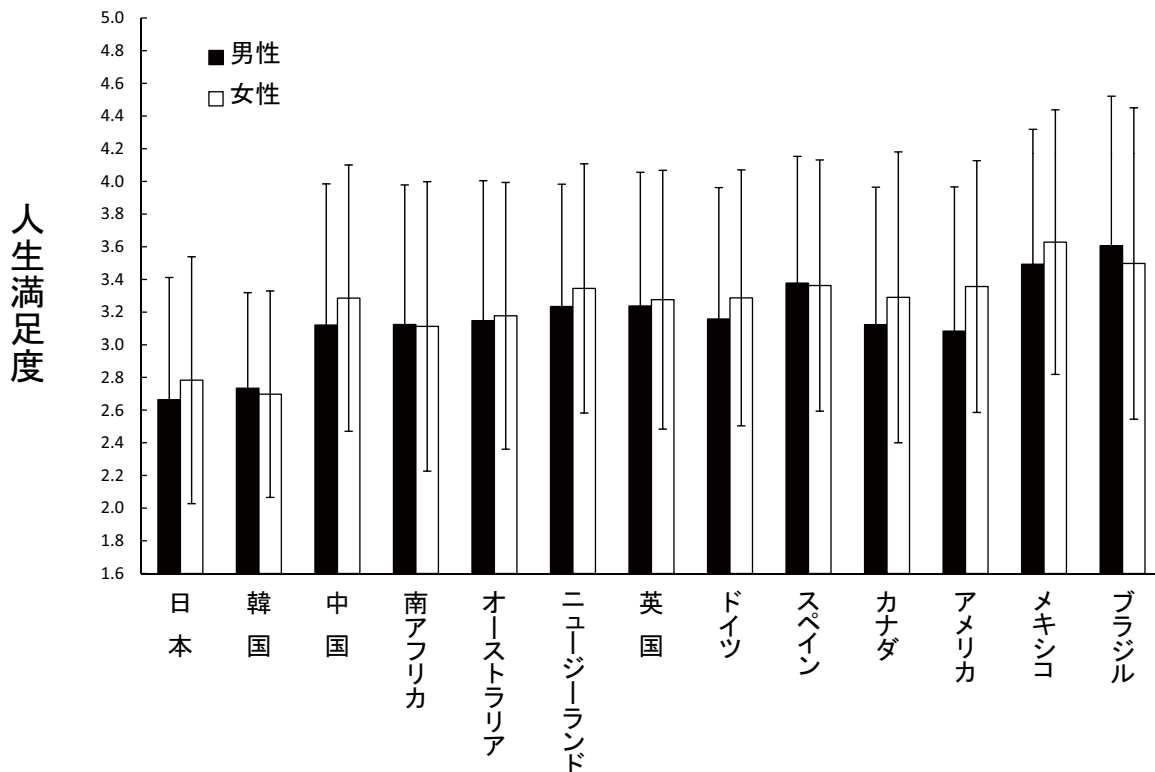


図2 人生満足度尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

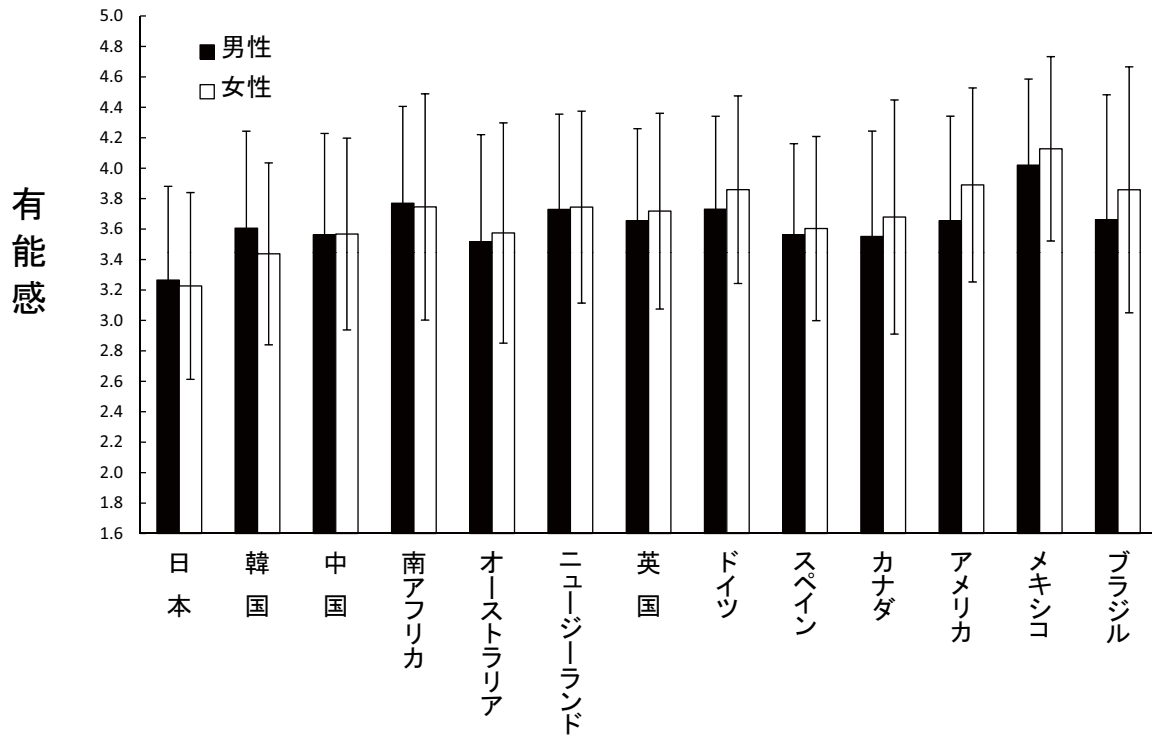


図3 有能感尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

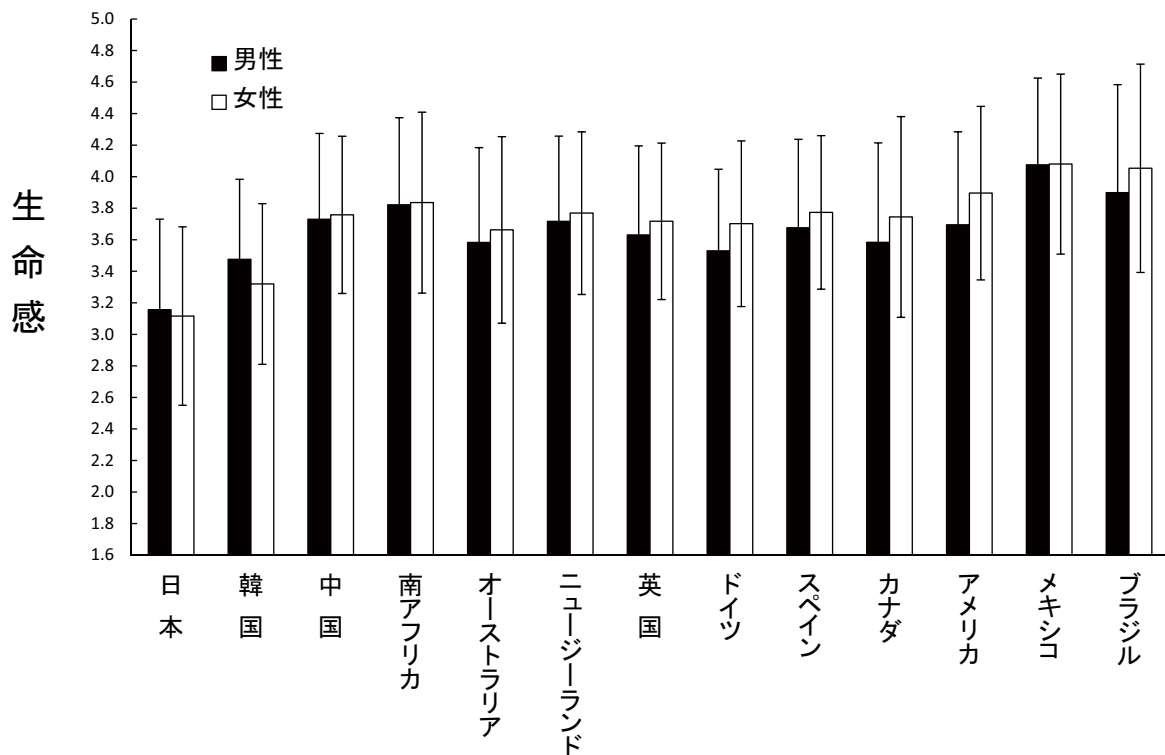


図4 生命感尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

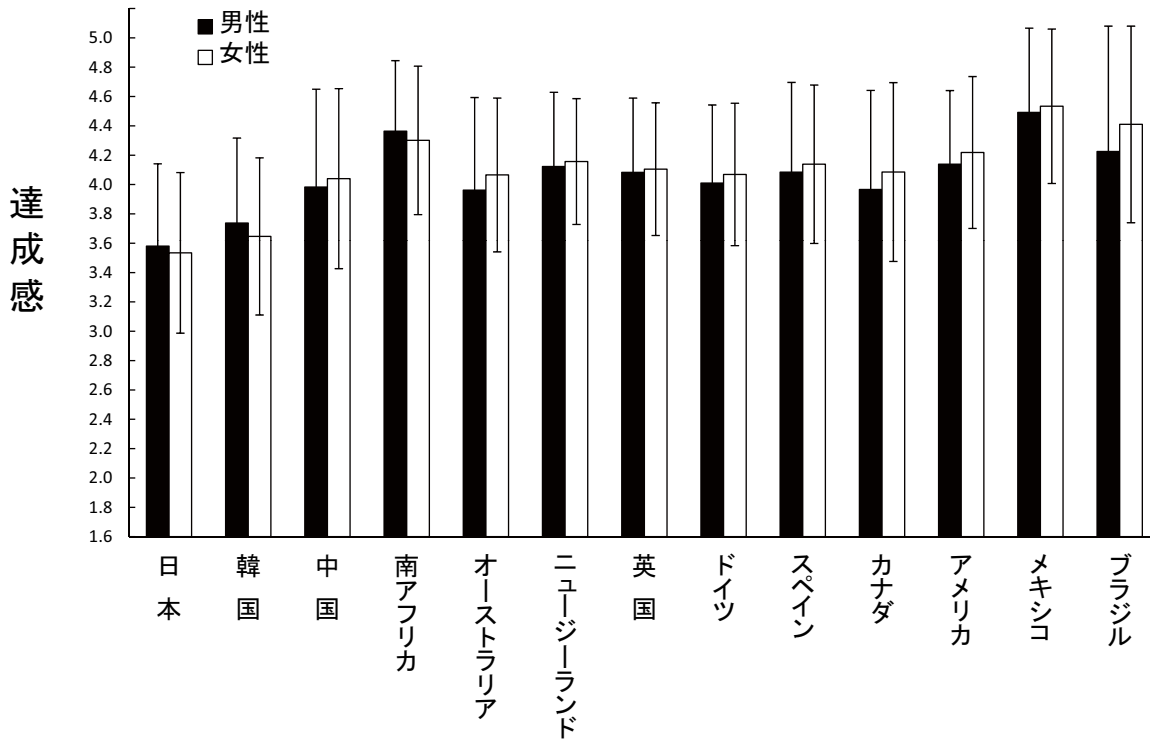


図5 達成感尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

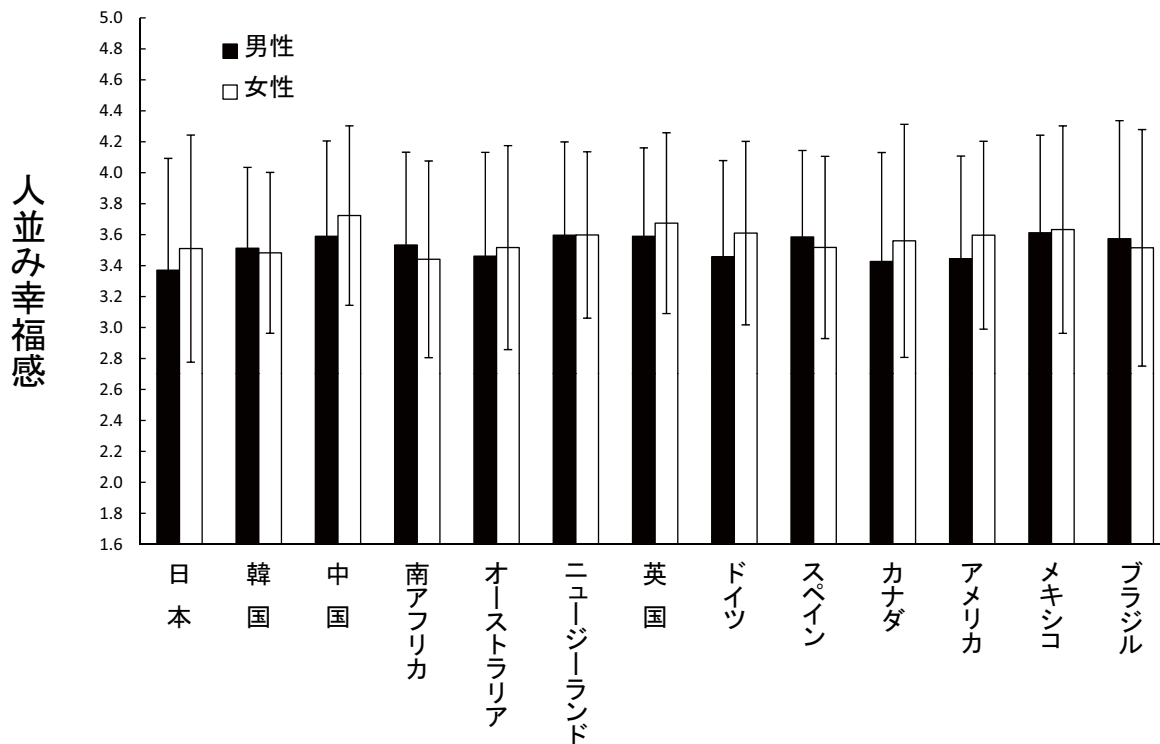


図6 人並み幸福感尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

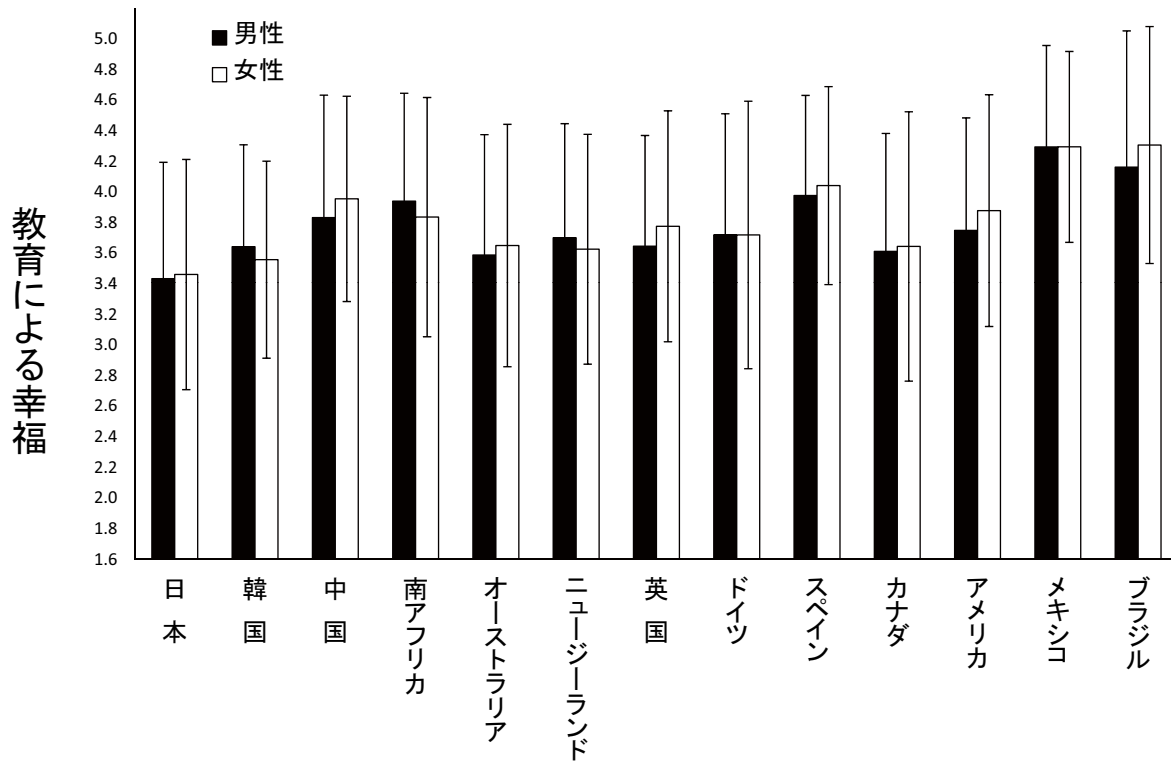


図7 教育による幸福尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

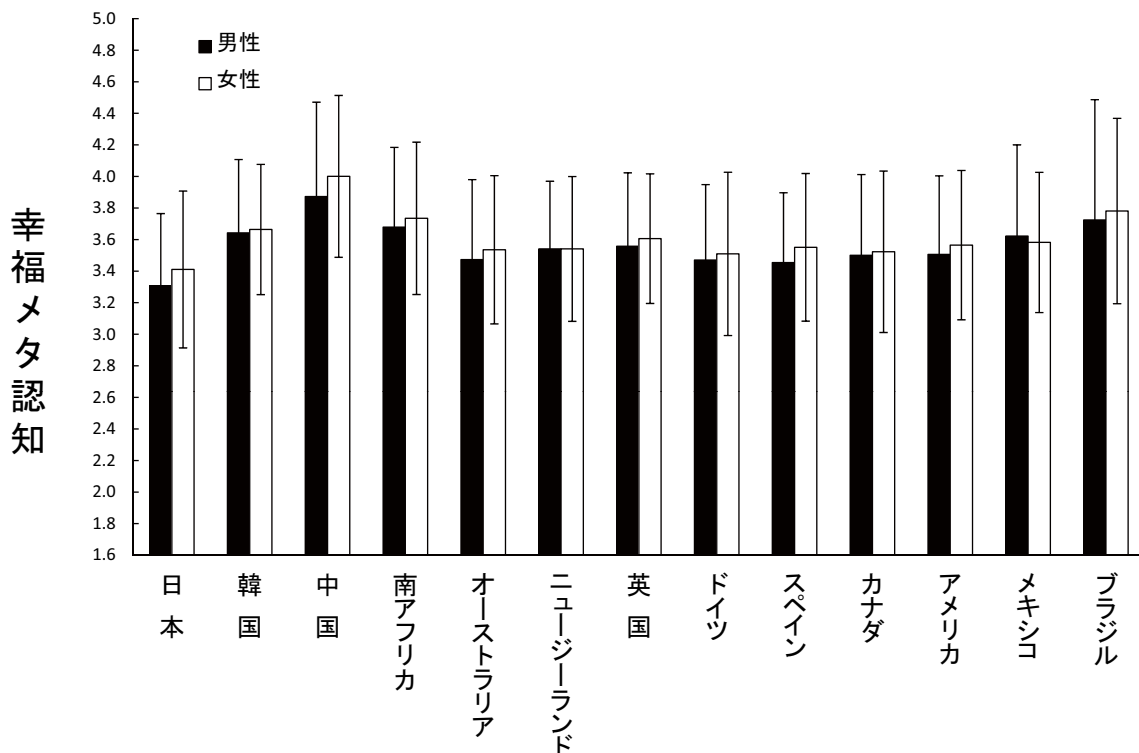


図8 幸福メタ認知尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

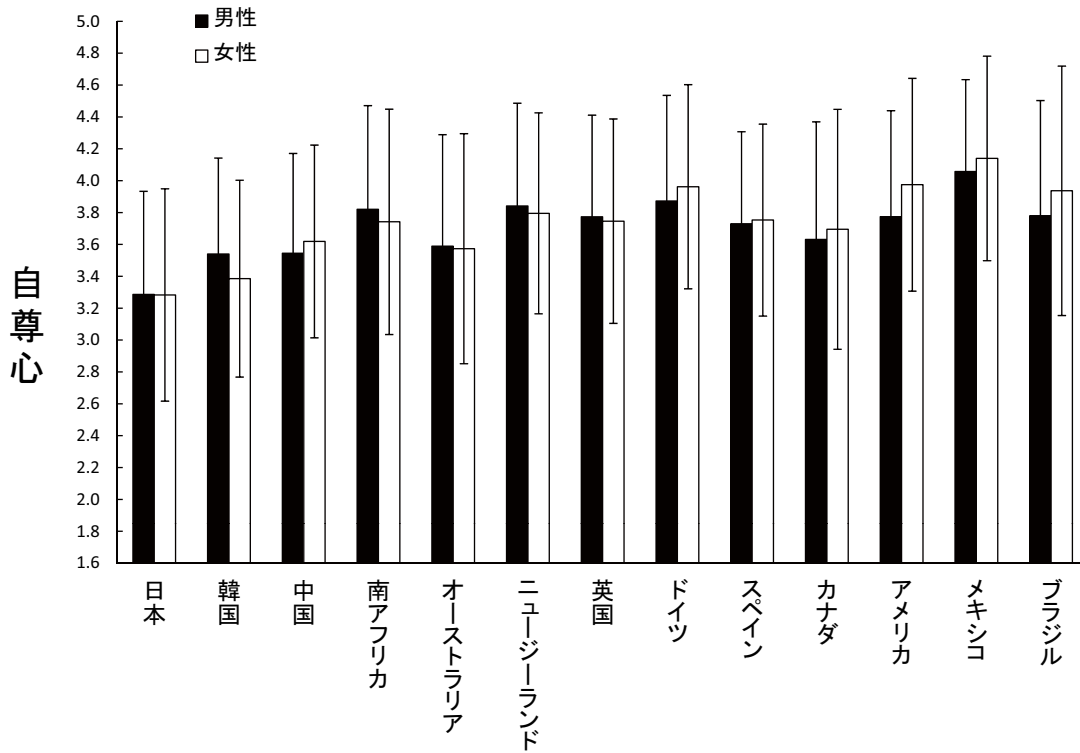


図9 自尊心尺度の国別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

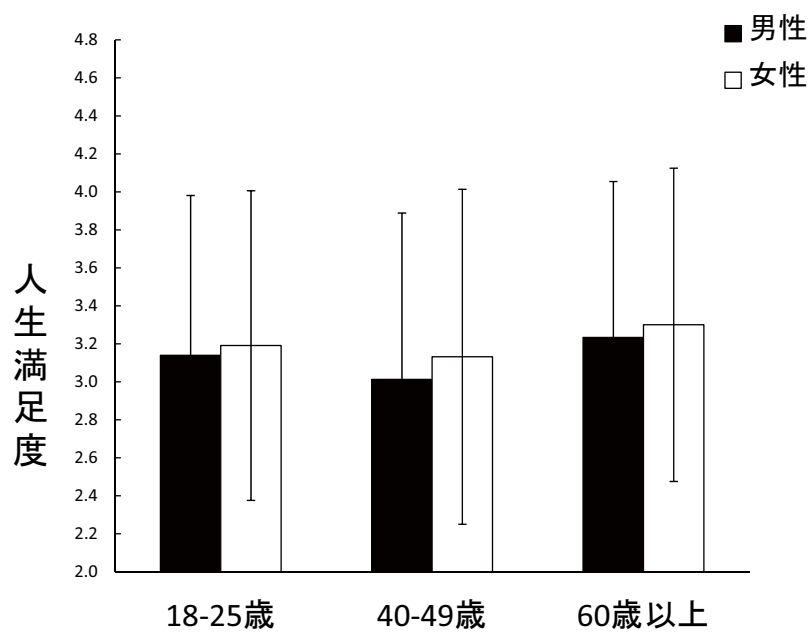


図10 人生満足度尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

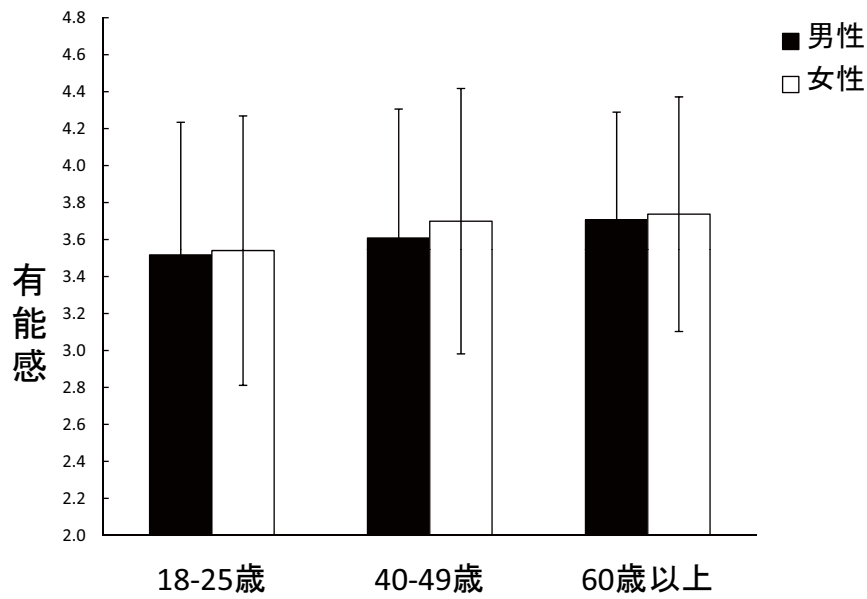


図11 有能感尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

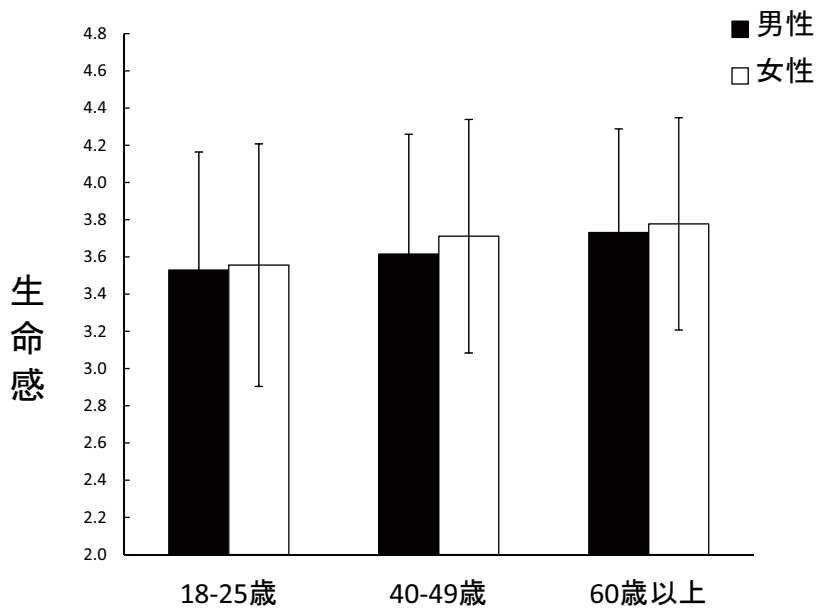


図12 生命感尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

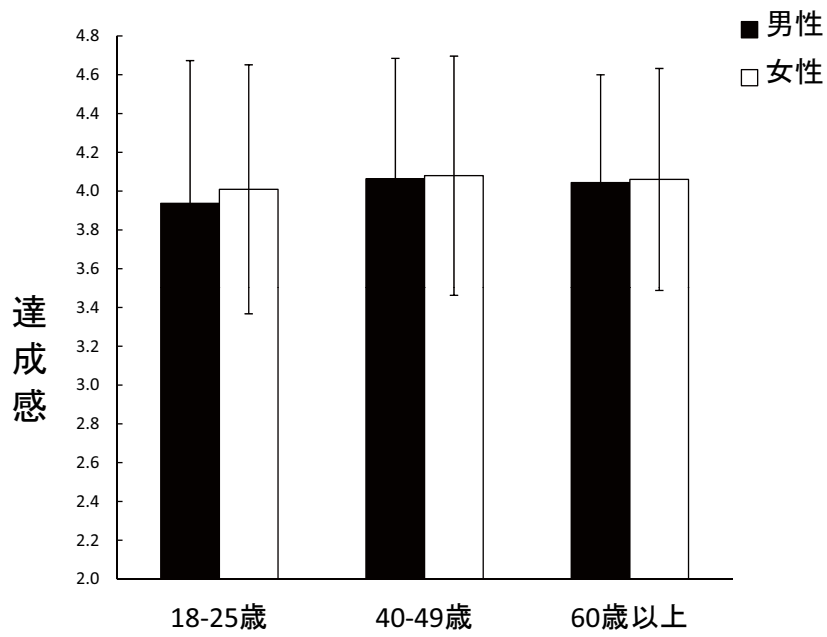


図13 達成感尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

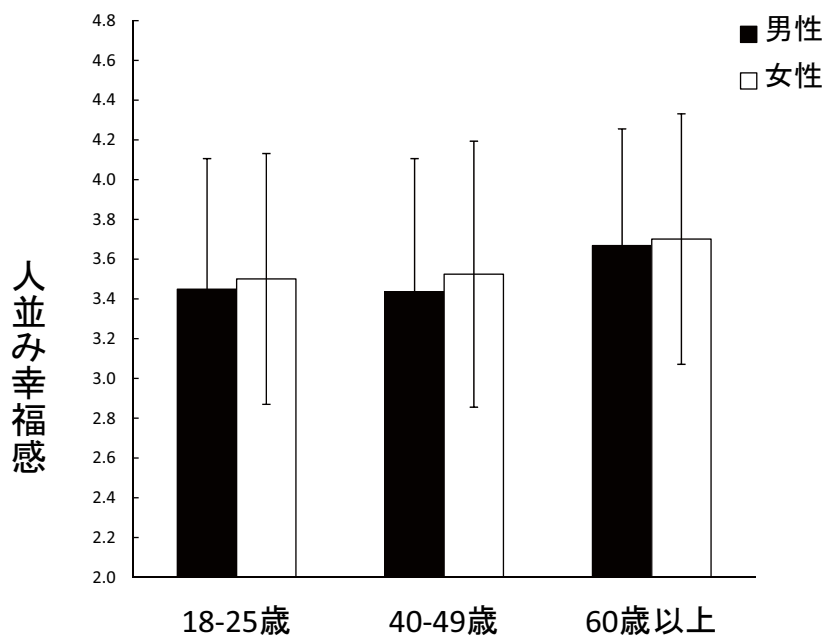


図14 人並み幸福感尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

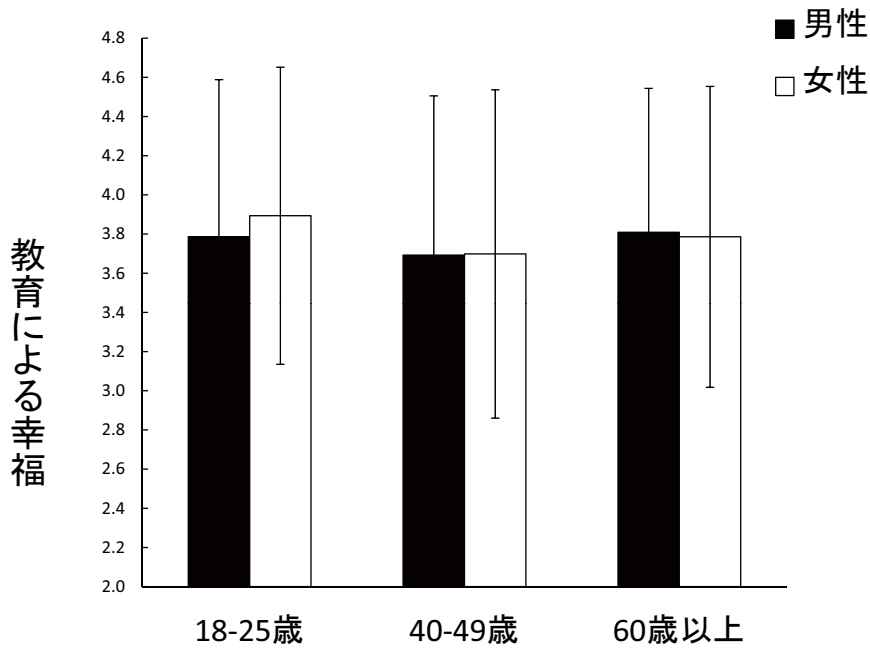


図15 教育による幸福尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

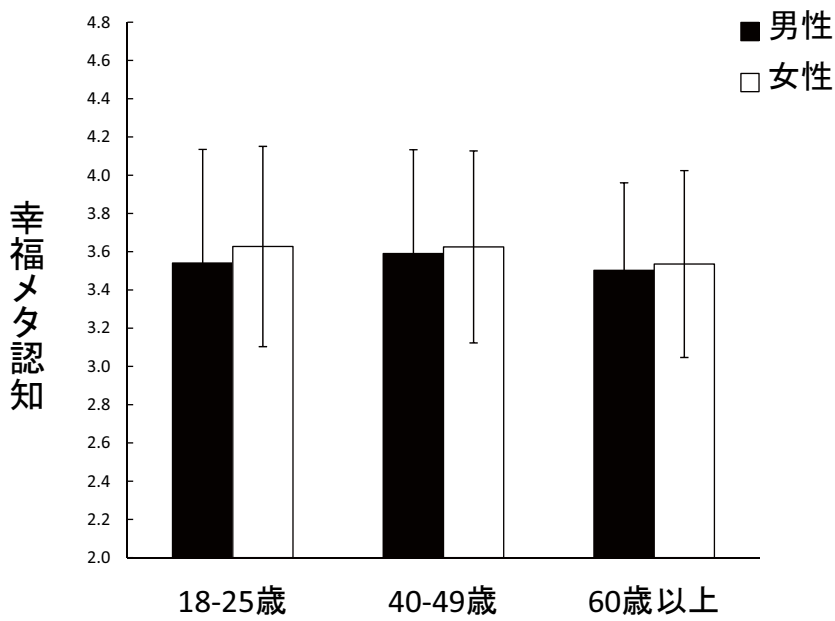


図16 幸福メタ認知尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

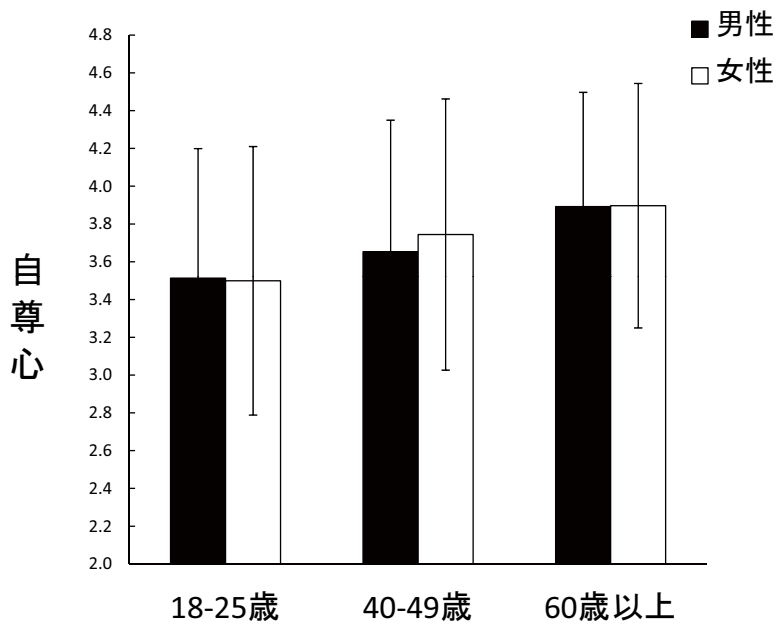


図17 自尊心尺度の年齢別・男女別の結果(平均値と標準偏差)

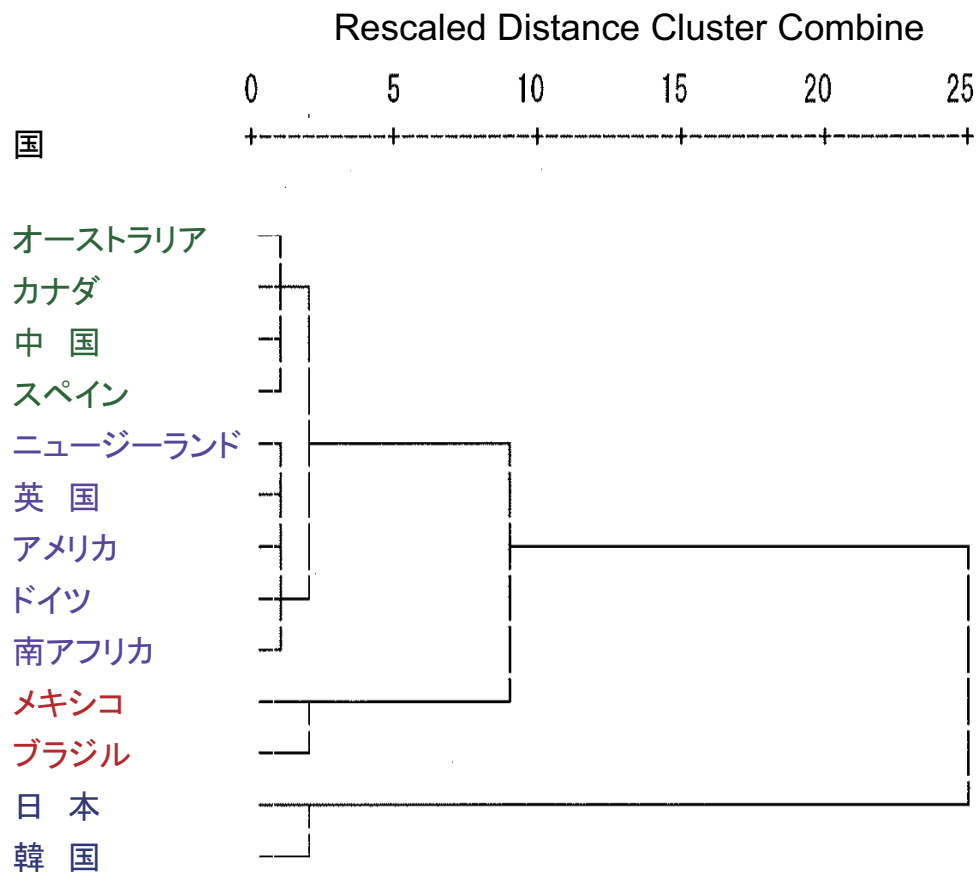


図18 クラスタ分析(Ward法・平方ユークリッド距離)の結果

デモグラフィック
変数

媒介変数

幸福感

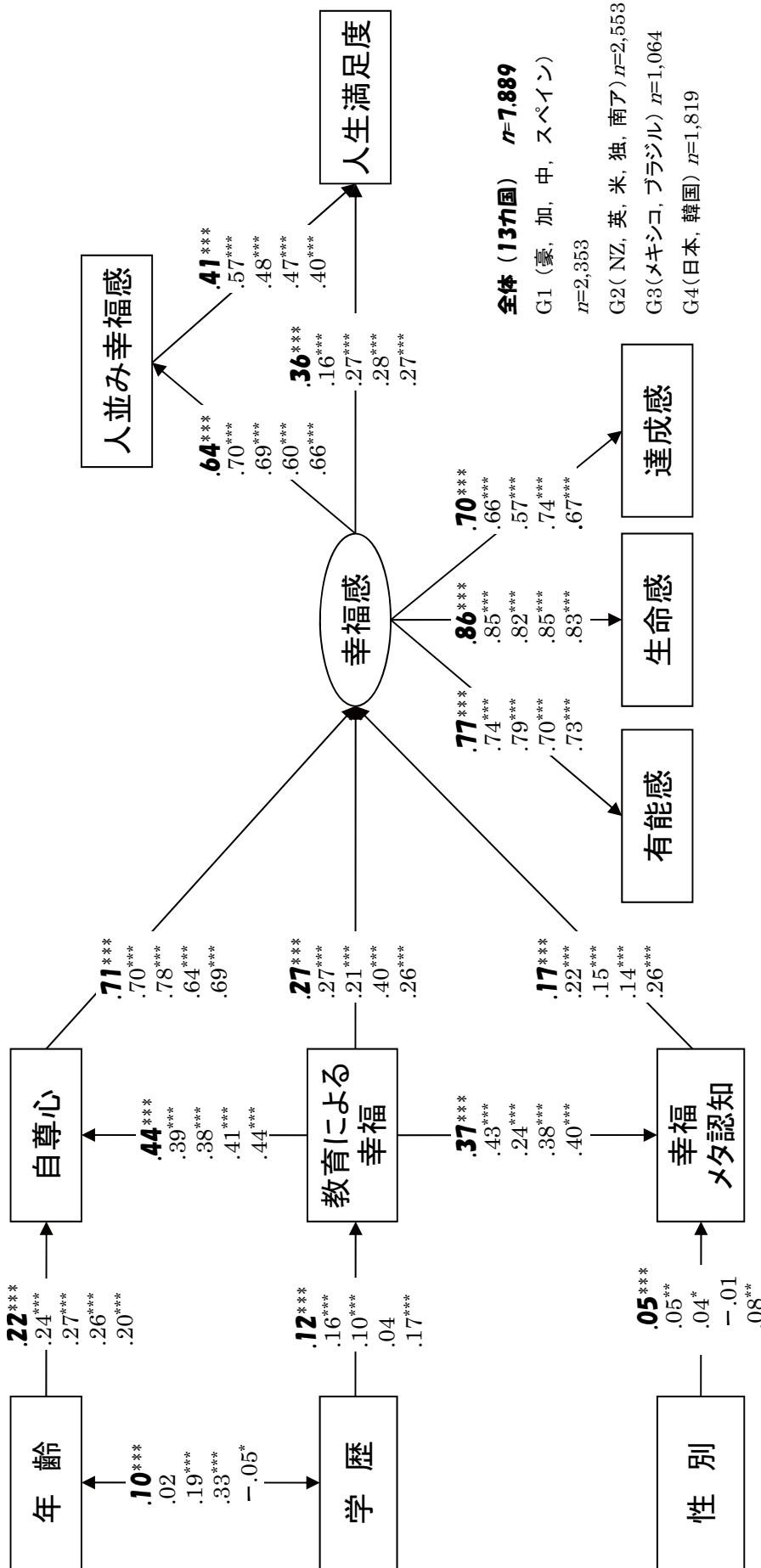


図19 共分散構造分析の結果(標準化推定値)

注1: 適合度は, 全体分析: $\chi^2(40) = 2355.934, p < .001, GFI = .951, AGFI = .918, CFI = .929, RMSEA = .086$

多母集団同時分析: $\chi^2(160) = 2950.450, p < .001, GFI = .937, AGFI = .896, CFI = .910, RMSEA = .047$

注2: 数字は上から全体(13カ国), グループ1(オーストラリア, カナダ, 中国, スペイン), グループ2(ニュージーランド, 英国, アメリカ, ドイツ, 南アフリカ,), グループ3(メキシコ, ブラジル), グループ4(日本, 韓国)

注3: $p < .001, ** p < .01$

注4: 誤差変数は省略した

人生観意識調査

この調査は、心理学的な異文化間調査研究の一環として実施されます。質問項目にはゆっくりと答えていただいて結構です。また、個々の質問項目に正しい答えはありません。この調査は試験ではありません。個々の質問項目には、できる限りよく考え、正直にお答えください。調査によって得られた個人のデータが学術研究以外の目的に使用されることは一切ありません。

この調査に関してお問い合わせがある場合は、以下にお願いします。

京都大学大学院教育学研究科
グローバルCOE拠点リーダー
教授 子安 増生
E-mail: HGB03675@nifty.com

この調査には3つのタイプの質問形式があります。
以下の例を参考にしてお答えください。

	全く そう 思わない	あまり そう 思わない	ど ち ら と も い え ない	か な り そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
例 1: 私は早起きが得意だ。	1	2	3	④	5
例 2: 私が一番好きな音楽のジャンルは: <input type="checkbox"/> ロック <input checked="" type="checkbox"/> クラシック <input type="checkbox"/> レゲエ <input type="checkbox"/> ヒップホップ <input type="checkbox"/> ジャズ					
例 3: 私は <u>友達と一緒にいる</u> ときに音楽を聴くのが好きだ。					

1. 次の文章を読んで、最もよくあてはまるものの番号に1つ○をつけてください。

	全く そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら とも いえ ない	かなり そう 思う	非常 に そう 思う
1. 教育の力がなくても豊かな人間関係を作ることができる。	1	2	3	4	5
2. 私がいてもいなくても、この世界は変わらない。	1	2	3	4	5
3. いったん決めたら振り向かない。	1	2	3	4	5
4. 私が受けてきた教育は、私を幸福にしてくれている。	1	2	3	4	5
5. 私は、何かをしようと決めると、それを始めるのが待てない。	1	2	3	4	5
6. 教育の力がなくても人は幸せになれる。	1	2	3	4	5
7. 私はたびたび、自分の今の感情について考える。	1	2	3	4	5
8. 私は自分を価値ある人間、少なくとも他人と同程度価値がある人間だと思う。	1	2	3	4	5
9. 私は自分を元気づけるにはどうすれば良いかを正確に分かっている。	1	2	3	4	5
10. まわりの人たちと同じくらい幸せだと思う。	1	2	3	4	5
11. 私は自分が多くの長所を持ち合わせていると思う。	1	2	3	4	5
12. 私は自分の人生に満足している。	1	2	3	4	5
13. 目的も持たず人生を放浪する人もいるが、私はそのような人間ではない。	1	2	3	4	5
14. 身近な人たち並みの幸せを手にはしていると思う。	1	2	3	4	5
15. 私は世の中に貢献している。	1	2	3	4	5
16. まわりの人たちと同じくらい、それなりにうまくいっている。	1	2	3	4	5
17. 私が受けてきた教育は、私の能力を高めてくれている。	1	2	3	4	5
18. 幸福と思うかどうかは自分の思い次第だ。	1	2	3	4	5
19. 私が受けてきた教育は、私の人間関係を豊かにしてくれている。	1	2	3	4	5
20. 私は他のほとんどの人たちと同じくらいのことが出来る。	1	2	3	4	5
21. 自分の人生はうまくいっているだろうかと考えるときに、見送った機会についてあれこれ考えることがある。	1	2	3	4	5
22. 家族と一緒に家で時間を過ごすのが好きだ。	1	2	3	4	5

	全く そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も い え な い	か な り そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
23. 私は自分がどうすれば幸せを感じることができるか正確に分かっている。	1	2	3	4	5
24. 家族は仲良くやっている。	1	2	3	4	5
25. 私はたびたび、自分が今思っているよりも幸せに感じるべきかどうかを考える。	1	2	3	4	5
26. 自分自身が好きだ。	1	2	3	4	5
27. 私は周りの人を幸せにすると、自分も幸せな気分になる。	1	2	3	4	5
28. 大体において、私は自分を人生の落伍者だと思いがちである。	1	2	3	4	5
29. 幸せとはリスクがない状態だとも思う。	1	2	3	4	5
30. 私にはあまり誇れるものがない気がする。	1	2	3	4	5
31. 私の生活環境は素晴らしいものである。	1	2	3	4	5
32. 私はこれまでこれといって生産的なことをしてこなかった。	1	2	3	4	5
33. 大体において、私の人生は理想に近いものである。	1	2	3	4	5
34. 幸せになるためには、リスクがあってもチャレンジをする。	1	2	3	4	5
35. 私はみんなとうまくやっている。	1	2	3	4	5
36. 不幸な気分するとき、その原因について客観的に考えるようにしている。	1	2	3	4	5
37. 家族や友達とのんびり過ごせている。	1	2	3	4	5
38. 私はこれまで自分がしてきたことに満足している。	1	2	3	4	5
39. だれか別の友達がいればいいのになあと思う。	1	2	3	4	5
40. 私がない方が世の中はうまく回る。	1	2	3	4	5
41. 大切な人を幸せにしていると思う。	1	2	3	4	5
42. 私は近所の人とのちょっとしたやりとりにも幸せを感じる。	1	2	3	4	5
43. 私は自分自身に対して肯定的な態度をとっている。	1	2	3	4	5
44. 平凡だが安定した日々を過ごしている。	1	2	3	4	5
45. 教育の力がなくても人間のできることはたくさんある。	1	2	3	4	5
46. 自分にとって、「不幸」「悲しみ」「悲嘆」などの言葉は、明らかに違う意味を持っている。	1	2	3	4	5

	全く そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も い え な い	か な り そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
47. 学校に行かなくて良ければいいのと思う。	1	2	3	4	5
48. もし、自分の周りの人々が幸せを感じているならば、それは自分も幸せに感じるべき良い兆候である。	1	2	3	4	5
49. 説明してもらえれば、どんなことでもたいてい理解できる。	1	2	3	4	5
50. 私は、今、一日一日を生きているのであって、将来のことを深く考えたりしない。	1	2	3	4	5
51. 物事を見たり観察したりするより自分で積極的にする方が好きである。	1	2	3	4	5
52. 大きな悩み事はない。	1	2	3	4	5
53. 私の暮らしている場所は、自然の中に多くの楽しいことが見いだせる。	1	2	3	4	5
54. もう一度人生をやり直すとしても、私には変えたいと思うところはほとんどない。	1	2	3	4	5
55. まわりの標準から外れて、一人不幸である。	1	2	3	4	5
56. 社会の中で自分は何か役に立っている。	1	2	3	4	5
57. 社会を変えていこうという気持ちがあれば、社会を変えることができる。	1	2	3	4	5
58. 自分の力で何かを成し遂げると、幸せな気持ちになる。	1	2	3	4	5
59. 私はこの地球のために何かすることができる。	1	2	3	4	5
60. 私は周囲の生き物と調和して生きている。	1	2	3	4	5
61. まわりの人並みの生活は手に入れている自信がある。	1	2	3	4	5
62. 私は批判的な人間だ。	1	2	3	4	5
63. 私はもっと自尊心がもてればいいのになと思う。	1	2	3	4	5
64. 私は、自分の良いところや悪いところをいろいろと考えることに、たくさん時間を使っている。	1	2	3	4	5
65. 自分の住んでいる近所・地域が好きだ。	1	2	3	4	5
66. 私は自分のことを無用の人間だと時々感じる。	1	2	3	4	5
67. 何かを選ぶときはあらゆる選択肢を考えてみる。	1	2	3	4	5
68. 私は二番目によいもので満足することはない。	1	2	3	4	5
69. 私はこれまで生き物を幸せにしてきた。	1	2	3	4	5
70. 全体的に私は自分自身に満足している。	1	2	3	4	5

	全く そう 思わ ない	あ ま り そ う 思 わ な い	ど ち ら と も い え な い	か な り そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
71. 近所に別の住人が住んでいたらいいのにと思う。	1	2	3	4	5
72. 自分が不幸を感じているときには、自分の振る舞いからそれと分かる。	1	2	3	4	5
73. 時々私は全くのろくでなしだと思うことがある。	1	2	3	4	5
74. 家計に経済的に貢献できて嬉しい。	1	2	3	4	5
75. これまで私は望んだものは手に入れてきた。	1	2	3	4	5
76. 友達に親切にされている。	1	2	3	4	5
77. 私は、ときどき、人生でなすべきことはすべてなしてきたかのように感じる。	1	2	3	4	5
78. 学校は楽しいと思う。	1	2	3	4	5

II. 困ったことが生じたとき、あなたはどのように感じますか？ 次の文章を読んで、最もあてはまる番号に1つ○をつけてください。

1. 自分の力で切り抜けられる。	1	2	3	4	5
2. 自分一人で苦しむしかない。	1	2	3	4	5
3. 自分の力が及ばない。	1	2	3	4	5
4. いつもまわりの誰かが助けてくれる。	1	2	3	4	5
5. 最後はきっと報われる時が来る。	1	2	3	4	5
6. 最後はきっと失敗に終わるという不安がある。	1	2	3	4	5

III. 人によって生活の目標もいろいろですが、リストのように分けると、あなたの生活目標に一番近いのはどれですか？最もあてはまる番号に1つ○をつけてください。

1. その日その日を、自由に楽しく過ごす。
2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。
3. 身近な人たちと、なごやかな毎を送る。
4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする。
5. その他 (_____)
6. わからない、無回答。

IV. 次の質問を読んで、最もあてはまる番号に1つ○をつけてください。

1. あなたは、自宅／下宿ではどの程度幸福と感じますか？

ほとんど感じない 1 2 3 4 5 大いに感ずる

2. あなたは、学校ではどの程度幸福と感じますか？

ほとんど感じない 1 2 3 4 5 大いに感ずる 学生ではない

3. あなたは、職場ではどの程度幸福と感じますか？

ほとんど感じない 1 2 3 4 5 大いに感ずる 就職していない

4. あなたは、自宅・学校・職場以外ではどの程度幸福と感じますか？

ほとんど感じない 1 2 3 4 5 大いに感ずる

V. 次の質問に教えてください。

1. 私は _____ ときに幸せを感じる

2. 私は _____ ときに不幸だと感じる

3. 私にとって幸福とは _____

VI. 最後に、あなた自身についてお答えください。

1. あなたは日本への留学生ですか？

いいえ (出生地は？ _____ 都・道・府・県)

はい (出身国は？ _____)

2. 性別: 男 女

3. 年齢: _____ 歳

4. 卒業した学校にすべて「レ」印をつけてください。

1. 小学校 2. 中学校 3. 高等学校 4. 専門学校等

5. 短期大学 / 大学 6. 大学院 7. その他 (_____)

5. 教育経験年数: _____ 年 _____ か月 (=卒業校年数+現在校年月)

6. 現在の居住形態: 一人住まい 家族と同居 (_____ 人) その他 (_____ 人)

7. あなた個人が信じている宗教はありますか。一つ「レ」印をつけてください。

はい いいえ わからない

8. 職業: あてはまるものに一つ「レ」印をつけてください。

1. 大学生 2. 大学院生 3. 常勤職 4. 非常勤職
 その他 (具体的に) (_____)

9. 両親の最終学歴: 上記4の学校種の番号を入れてください。

父 _____

母 _____

実父母以外の養親 _____

質問紙を提出していただく前に、再度全ての質問に答えたかどうかをご確認ください。
ご協力ありがとうございました。

Survey on Personal Views of Life

The attached questionnaire is being carried out as part of a cross-cultural psychological research. There is no time limit and there are no right or wrong answers to this questionnaire. This is not a test. You should answer each item as carefully and truthfully as possible. All your responses are anonymous and will be used only to the purpose of this study.

Any questions regarding this study should be addressed to:

Prof. Masuo Koyasu, Ph.D.
Leader of the Global COE Program
Graduate School of Education
Kyoto University
E-mail: HGB03675@nifty.com

There are three types of items in this survey.
Please answer them according to the examples below:

	Strongly Disagree	Disagree	Undecided	Agree	Strongly Agree
Example 1: I like to wake up early in the morning.	1	2	3	④	5

Example 2:

The music style that I like the most is: Rock Classical Reggae HipHop Jazz

Example 3:

I like to listen to music when I'm together with my friends.

I. Read each of the following statements and indicate the degree to which you agree or disagree on a scale from 1 (Strongly Disagree) to 5 (Strongly Agree).

	Strongly Disagree	Disagree	Undecided	Agree	Strongly Agree
1. People can establish rich personal relationships even without formal education.	1	2	3	4	5
2. It makes no difference to the world whether I am here or not.	1	2	3	4	5
3. Once I make a decision, I don't look back.	1	2	3	4	5
4. The education that I've received makes me a happy person.	1	2	3	4	5
5. When I decide to do something, I can't wait to get started.	1	2	3	4	5
6. People can be happy even without formal education.	1	2	3	4	5
7. I often think about how I am feeling at the moment.	1	2	3	4	5
8. I feel that I'm a person of worth, at least on an equal plane with others.	1	2	3	4	5
9. I know exactly what I have to do to cheer me up.	1	2	3	4	5
10. My life is just as happy as that of others around me.	1	2	3	4	5
11. I feel that I have a number of good qualities.	1	2	3	4	5
12. I am satisfied with my life.	1	2	3	4	5
13. Some people wander aimlessly through life, but I am not one of them.	1	2	3	4	5
14. I feel that I have attained the same level of happiness as those around me.	1	2	3	4	5
15. I make a contribution to society.	1	2	3	4	5
16. I generally believe that things are going as well for me as for others around me.	1	2	3	4	5
17. The education that I've received enhances my overall capabilities.	1	2	3	4	5
18. My sense of happiness depends on how I think about my given situation.	1	2	3	4	5
19. The education that I've received enriches my personal relationships.	1	2	3	4	5
20. I am able to do things as well as most other people.	1	2	3	4	5
21. When I think about how I'm doing in life, I often assess opportunities I have passed up.	1	2	3	4	5
22. I enjoy being at home with my family.	1	2	3	4	5

	Strongly Disagree	Disagree	Undecided	Agree	Strongly Agree
23. I know exactly what it takes to make me feel happy.	1	2	3	4	5
24. My family gets along well together.	1	2	3	4	5
25. I often think about whether I should be feeling more or less happy than I am.	1	2	3	4	5
26. I like myself.	1	2	3	4	5
27. I feel happy when I make other people feel happy.	1	2	3	4	5
28. All in all, I am inclined to feel that I am a failure.	1	2	3	4	5
29. Happiness is the absence of risks.	1	2	3	4	5
30. I feel I do not have much to be proud of.	1	2	3	4	5
31. The conditions of my life are excellent.	1	2	3	4	5
32. I have not done anything really productive in my life.	1	2	3	4	5
33. In most ways my life is close to my ideal.	1	2	3	4	5
34. I'm ready to take risks in order to be happy.	1	2	3	4	5
35. I get along well with everybody.	1	2	3	4	5
36. When I feel unhappy, I try to think objectively about what is making me feel that way.	1	2	3	4	5
37. I live a life of ease with family and friends.	1	2	3	4	5
38. I am satisfied with the things I have done in my life.	1	2	3	4	5
39. I wish I had different friends.	1	2	3	4	5
40. The world would be better off without me.	1	2	3	4	5
41. I make those who are most important to me happy.	1	2	3	4	5
42. I feel happiness even in the small exchanges I have with my neighbors.	1	2	3	4	5
43. I take a positive attitude toward myself.	1	2	3	4	5
44. Although it is quite average, I live a stable but average life.	1	2	3	4	5
45. People are capable of many things even without formal education.	1	2	3	4	5
46. Words such as "unhappy", "sad", "sorrowful" clearly have different meanings to me.	1	2	3	4	5

	Strongly Disagree	Disagree	Undecided	Agree	Strongly Agree
47. I wish I didn't have to go to school.	1	2	3	4	5
48. If everybody else around me is feeling happy, that's a good sign that I should be happy too.	1	2	3	4	5
49. If I receive a proper explanation, I can understand practically anything.	1	2	3	4	5
50. I live life one day at a time without really think about the future.	1	2	3	4	5
51. I enjoy actively doing things, more than just watching and observing.	1	2	3	4	5
52. I do not have any major concerns or anxieties.	1	2	3	4	5
53. I can find many pleasant things in the natural environment where I live.	1	2	3	4	5
54. If I could live my life over, I would change almost nothing.	1	2	3	4	5
55. Compared to those around me, I feel that I am the only unhappy one.	1	2	3	4	5
56. I am useful to society.	1	2	3	4	5
57. We can make society better if we have the will to do so.	1	2	3	4	5
58. I feel happy when I accomplish something on my own.	1	2	3	4	5
59. I can do something good for the Earth.	1	2	3	4	5
60. I live in harmony with the living creatures around me.	1	2	3	4	5
61. I believe I have achieved the same standard of living as those around me.	1	2	3	4	5
62. I am a critical person.	1	2	3	4	5
63. I wish I could have more respect for myself.	1	2	3	4	5
64. I spend a great deal of time thinking of my positive and negative sides.	1	2	3	4	5
65. I like where I live.	1	2	3	4	5
66. I certainly feel useless at times.	1	2	3	4	5
67. Whenever I'm faced with a choice, I try to imagine what all the other possibilities are, even ones that aren't present at the moment.	1	2	3	4	5
68. I never settle for second best.	1	2	3	4	5
69. So far in my life, I have made everything around me happy.	1	2	3	4	5
70. On the whole, I am satisfied with myself.	1	2	3	4	5

	Strongly Disagree	Disagree	Undecided	Agree	Strongly Agree
71. I wish there were different people in my neighborhood.	1	2	3	4	5
72. I can tell from my behaviors that I am feeling unhappy.	1	2	3	4	5
73. At times I think I am no good at all.	1	2	3	4	5
74. I am happy that I can contribute financially to my household.	1	2	3	4	5
75. So far I have gotten the important things I want in life.	1	2	3	4	5
76. My friends are nice to me.	1	2	3	4	5
77. I sometimes feel as if I've done all there is to do in life.	1	2	3	4	5
78. School is interesting.	1	2	3	4	5

II. How do you feel when you find yourself in a trouble? Read each of the following statements and indicate the degree to which you agree or disagree on a scale from 1 (Strongly Disagree) to 5 (Strongly Agree).

1. I am capable of overcoming any challenge on my own.	1	2	3	4	5
2. I should suffer alone.	1	2	3	4	5
3. I am not good enough.	1	2	3	4	5
4. There is always someone to help me out of trouble.	1	2	3	4	5
5. All my efforts will be rewarded eventually.	1	2	3	4	5
6. I fear that my endeavors will end up in failure.	1	2	3	4	5

III. There are various goals in life. What is your primary goal of life? Please circle one closest answer from the list below.

1. Enjoy each day freely.
2. Create a precise plan in order to enrich my life.
3. Spend time peacefully with my friends.
4. Make the world better by cooperating with others.
5. Other: Please specify. (_____)
6. I don't know / no goal.

IV. Answer the following questions by circling one number on the scale.

1. How much happiness do you feel at home?

A little happiness 1 2 3 4 5 A lot of happiness

2. How much happiness do you feel at school?

A little happiness 1 2 3 4 5 A lot of happiness Not applicable

3. How much happiness do you feel at work?

A little happiness 1 2 3 4 5 A lot of happiness Not applicable

4. How much happiness do you feel outside of home, school, or work?

A little happiness 1 2 3 4 5 A lot of happiness

V. Complete the following sentences.

1. I feel happy when _____

2. I feel unhappy when _____

3. For me, happiness means _____

VI. Next, we will ask a few questions about yourself.

1. Place of birth: _____

2. Ethnicity: _____

3. Gender: Male Female

4. Age: _____ years

5. Check all items which you finished or graduated from:

1. Elementary school 2. Junior high school 3. High school 4. Technical school

5. College/University 6. Graduate school 7. Other (_____)

6. Years of education: _____ years _____ months (including the one which you are at)

7. You currently live: Alone With family (_____ people) Other (_____ people)

8. Check the item which you think is most appropriate: Do you have any personal religious faith?

Yes No Don't know

9. Check the item which you think is most appropriate: Without reference to any of the established religions, I believe a spiritual attitude is important?

Yes No Don't know Other (please specify:_____)

10. Occupation: Check the item which you think is most appropriate:

Student Graduate student Full-time worker Part-time worker

Other (_____)

11. Parent(s)' highest education: *Please fill in using the numbers of question 5 above.*

Your father: _____

Your mother: _____

Other foster parent: _____

Before you return this questionnaire, please double check that you have answered all the items included.
Thank you very much for your cooperation!

何が人を幸福にし何が人を不幸にするか

—国際比較調査の自由記述分析—

大山 泰宏

はじめに

本稿は、京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」(平成 19 年～23 年度)でおこなわれた「幸福感の国際比較研究」における自由記述部分の質的分析の報告である。重複を避けるために、「幸福感の国際比較研究」調査全体の概要や手続きに関しては数量的分析の報告に譲り、本稿では自由記述部分に焦点を絞る。

13 カ国 7 言語、合計 8000 人以上から自由記述データが集められたが、ここでは、日本を中心として詳細な国際比較を行うために、7 カ国 5 言語、合計 714 人をサンプリングして分析した結果を報告する。

調査の目的と概要

自由記述を設ける意図

幸福感 (happiness, well-being) の比較文化的な研究は、幸福感を心理学的で主観的なものと定義するにしても、行動経済学的な観点から論じられるにしても、数量的研究としておこなわれることが多い。すなわち、幸福感を構成する諸要素として定義された行動や価値観を測る尺度への回答傾向から、幸福感の度合い、幸福感に関連する諸変数の構造が議論されてきた。今回の本拠点の「幸福感の国際比較研究」においても、同様に包括的な数量的調査がなされ分析されている。

これに加え、今回の国際比較研究では、自由記述部分を設けた調査をおこなった。それは、以下のような意図による。第一には、数量的調査の分析を補完することである。それぞれの国から得られた数量的データの分析結果を検討していく際に、自由記述データを参照することで、表れた数値の解釈をより深く行えることが期待できる。また、数量的結果だけからは見えてこない各国の特徴が、詳細で具体的に解明できることが期待できる。第二には、今回の調査における幸福感の構造的仮説である「有能感、生命感、達成感」という 3 つのキーワードのフレームワークに収まりきらない何かを拾いあげることである。これら 3 つのキーワードが提供するフレームワークでは、幸福感とは、「環境に働きかけ変えていくことができること (有能感)」、「他者や世界とつながり支えられること (生命感)」、そして「これら 2 つに支えられて何かを成し遂げることができるということ (達成感)」として定義されている。ここで捉えられ

る幸福感とは、その網の目に捉えられるものに限定されがちであろう。これに対して、質問が構造化されない自由記述では、このフレームワークに左右されないデータが得られることが期待できる。そこで得られるデータは、仮説生成的なものも含み、数量的分析の法則定立的な研究に比べて厳密性は劣るかもしれないが、幸福感の心理学的探究において重要な要素となるであろう。

自由記述の質問項目の作成

【SCTを用いる意義】

質問紙調査の自由記述では、得られる回答が十分に多様性をもちつつも、ある程度一定範囲に収斂したものであることが必要である。あまりにも回答の自由度が高い曖昧な質問では、回答の長さや精確さなどが統制されえず、無回答も多く見られてしまう。これに対して、あまりにも構造化されすぎた質問では、特定のフレームワークに従った回答が多くなり、多様性に乏しくなってしまう。自由記述を得るための質問は、このトレードオフのあいだに適切なポイントを定めることが必要である。

その要請に応える方法として、心理検査の投映法的一种として用いられている SCT (Sentence Complementation Test, 文章完成法) がある。SCT とは、「私にとって母は」とか「私の顔は」などの先行刺激文に続けて、被検査者が文章を書き加え完成させるものである。「幸福について思うことを書いてください」等の自由度の高い質問項目に比べて、回答はある程度まとまったものとなりつつ、十分に多様性があることが期待できる。また、13カ国7言語の調査であるため、分析の際に必要な日本語への翻訳の労を考えると、得られる回答は短文であることが望ましい。こうしたいくつかの条件を満たすものとして SCT 方式を採用することとした。

【先行刺激文の構成と特徴】

先行刺激文は、本調査研究チームでの討議を重ね、以下のような3つの質問とした。なお、質問文の中の「～～」および「....」の部分が、調査協力者が文章を補完し完成させる回答部分である。以下、7言語のうち日本語と英語のみを例として示しつつ説明する。

・Q1： 私は～～とき幸福を感じる。（I feel happy when）

この質問は、幸福を感じる状況や出来事、要因について尋ねるものである。状況と対応した比較的素朴で単純な、日常感覚における幸福感を尋ねる質問項目である。「幸福感」を尋ねるものであるといえよう。

・Q2： 私は～～とき不幸を感じる。（I feel unhappy when）

この質問は、不幸を感じる状況や出来事、要因について尋ねるものである。ここで幸福感と分けて「不幸感」について尋ねるのは、以下のような理由による。すなわち、幸福感を規定する要因と不幸感を規定する要因は、必ずしも同じとは限らないことが

想定しうるからである。幸福感をもたらす要因の欠如が、そのまま不幸感をもたらすわけではないであろう。あるいは、幸福感をもたらす要因が存在しつつも、不幸感をもたらす要因が加わることで、総合的には不幸を感じることもあるであろう。あるいは、不幸感をもたらす要因がないということが、幸福感の条件として重要かもしれない。このように、幸福感と不幸感を構成する要因をめぐっては、両者のあいだに様々な関連性が論理的に想定しうる。従って、幸福感の要因と不幸感の要因を、当面独立のものと仮定して分けて尋ね、両者の関係を見ることで、より緻密に幸福感の要因を捉えることを意図している。

・ **Q3**： 私にとって幸福とは～～である。（For me, happiness is）

この質問は、個人の幸福に関する定義について尋ねるものである。Q1とQ2はいずれも、比較的断片的で全体として意味組織化されていない、幸福および不幸に影響する要因を具体的に尋ねたものであった。これに対してQ3では、回答者の人生観、価値観、世界観、信念、宗教などと関連しつつ、より組織化され抽象化された、個人の意味構成に位置づけられた幸福感に関する記述を得るためのものである。すなわち「幸福観」に関する質問であるといえる。

ここで今回のSCTによって得られる回答の特性や制約について、あらかじめ述べておきたい。幸福感とはDiener(2000)が述べるように、個人の人生に対する包括的な評価であり、そこには多くの要因が介在し、それらの要因は複雑に関連している。リッカート法による定量的な調査では、そうした複数の要因を並立的・包括的に測定することが可能である。これに対して、今回用いるSCTのQ1およびQ2で得られる回答では、幸福感に影響する複数の要因の中から一つ（もしくはごく少数）を強制的に選択させることになる。したがって、その回答の全体的分布は、個人内の幸福感を規定する諸要因の分布というよりも、さまざまな要因の中から個人が第一に挙げる要因の分布と考えられることに留意したい。

調査の実施

Q1「私は～～とき幸福を感じる。（I feel happy when ...）」、Q2「私は～～とき不幸を感じる。（I feel unhappy when ...）」、Q3「私にとって幸福とは～～である。（For me, happiness is）」の3種類の質問項目（先行刺激文）は、数量的調査の項目と同じく、日本語と英語の原文から、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、中国語、韓国語に翻訳したものが作成され、13カ国を対象にインターネット上で回答が求められた。これらの自由記述項目は、数量的調査の項目の後に配置され、調査の最後の3つの質問を構成していた。質問に対する回答には、字数制限は設けられていなかった。得られた回答のうち無記入であるものはほとんどなく、いずれの国も99%以上の回答率であった。各国の回答者数、男女比、年齢層等の属性情報に関しては、

数量的報告部分を参照されたい。

結果と分析

データの事前処理（分析対象データの抽出と翻訳）

日本語以外の言語による回答は、データ事前処理として日本語に翻訳する必要があった。翻訳にかかる労力と十分に信頼性のあるデータが得られるサンプル数との兼ね合いを考慮して、各国で 100 名以上のサンプルが得られるように、各年齢群（18～25 歳，40～49 歳，60 歳以上の 3 群）の有効回答から男性 17 名，女性 17 名，合計 102 名をランダムに抽出し分析対象とした。これは各国の調査データの 5 分の 1 から 6 分の 1 にあたる。

抽出された回答は、一文ずつ日本語に翻訳された。英語，ドイツ語，スペイン語に関しては、それらの言語に習熟した日本語話者が、韓国語，中国語に関しては、日本語に習熟したそれぞれの言語を母国語とする者が翻訳をおこなった。なお，ポルトガル語（ブラジル）に関しては、翻訳可能な人材が得られなかったため、2012 年 2 月現在、翻訳はおこなっていない。また，韓国語の Q3 も未完了であるため今回の分析からは省いてある。このようにして集められた Q1～Q3 の SCT の回答の中からは、表 1-1 に日本のデータを、表 1-2 にメキシコのデータを例として示した。

分析方法の選定

得られた回答の特徴を吟味して、適切な質的分析の手法を選択した。Q 1 と Q 2 に対してはテキストマイニングを用いた分析が、Q 3 に対してはカテゴリーコーディングを用いた分析が適当であると判断された。理由は以下のとおりである。

Q 1 と Q 2 の回答は、幸福もしくは不幸と感じる状況に関する具体的な記述である。それは一つのまとまった主張や意味をもつものというより、複数の具体的要因や状況が並列されているものが多く見られた。たとえば、「私は 友人と美しい景色を見ながらおいしいものを食べる ときに幸福を感じる」という回答には、友人との共在（他者との関係）、美しい景色を見る（自然環境に触れる）、おいしいものを食べる（食事あるいは自分の好きなことをする）という 3 つの要素が含まれている。あるいは、「私は 家族が健康で自分がやりがいのある仕事をしているとき に幸福を感じる」というように、二つ以上の状況が並列されている回答も多かった。このようにそれぞれの回答は、全体として一義的に意味が決定されるというよりも、そこに含まれている複数の要因を考慮して、それらの併存（共起性）や関係性を考慮するほうが適切であった。このような理由から、テキストマイニングが分析方法として選択された。

他方、Q 3 「私にとって幸福とは～～である」に対する回答は、「人と人とのつなが

り」「心が豊かなこと」といった、幸福感をもたらす要因を記述したものの他、「不幸のないこと」「現時点では遠いもの」といった幸福の抽象的属性を記述したもののや、「日々を大切に生きること」といった態度や信念を表すものなどが見られた。これらの回答は、一義的な意味をもつと同時に、その抽象度や性質に多様性があるため、テキストマイニングの過程での単語抽出作業を経ると、回答の意味内容が損なわれる危険性があった。また、Q1 および Q2 と比較すると、ひとつの回答内に複数の要素が含まれることが少なく、要因の共起性はそれほど考慮する必要がなかった。従って、回答文の意味内容を判断したカテゴリーコーディングを、分析方法として採用した。

幸福感および不幸福感の要因の分析

【テキストマイニングによる分析の手続き】

テキストマイニングによる分析は、フリーソフトウェア KH Coderⁱを使用しておこなわれた。(以下、自由記述の回答のことをテキストもしくはテキストデータと呼ぶ。)

1. 語の抽出

テキストデータは誤字脱字を訂正した後、形態素解析を行い、抽出された単語を各品詞に分類した。単語の出現頻度の下限は設けず、1回でも出現した語であれば後の分析に含めた。

2. コーディング・ワードの生成

抽出された語は、同じ意味の異なる表現、概念的に類似したもの等をまとめて、コーディング・ワードを生成した。国どうしの比較を行うため、コーディング・ワードはできるだけ各国共通となることをめざしたが、それぞれの国の社会・文化的な事情や言語的特徴のために、各国に固有のものを設けざるをえない場合もあった。コーディング・ルール(抽出された語をコーディング・ワードにまとめていく際のルール)に関しても、各国に共通する包括的なものとなるよう工夫したが、国別に作業上適用する実際のコーディング・ルールは、言語的特徴や慣用句などを考慮して、国ごとに多少の調整をおこなう必要があった。コーディング・ルール適用の結果生成されるコーディング・ワードと、それに含まれるテキストの原文とが適切に対応しているかどうかを、筆者と KH Coder の使用に習熟した者 1 名とで協議しつつ検討を繰り返し、コーディング・ルールがより適切で包括的なものとなるようにした。以上のような手続きのもとで作成された、各国に包括的に適用されたコーディング・ワードおよびコーディング・ルールを表 2-1 と表 2-2 に示した。

なお、コーディングに際して、この調査全体の概念的枠組である「有能感」と「達成感」に関して別々のコーディングをおこなうよう試みたが、Q1「幸福に感じる時」に対する回答では、両者を区別することは困難であった。というのも、たとえば「何事もうまくいっているとき」「思うように物事がいったとき」という記述は、有

能感の表現とも達成感の表現ともとれる。このように幸福に感じている状況では、両者は明確には区別されて記述されていない。したがって、「有能感・達成感」という両者を並列するコーディング・ワードを与えた。しかしながら、Q2「不幸に感じる時」では、その原因（状況）を、「力が及ばなかった時」というように、自己の無能力さ（有能感の欠如）に帰属させているのか、「うまくいかなかった時」というように結果的に達成できなかった（達成感の欠如）としているかは、区別することが可能であった。したがって、表 2-2 に示すように、「達成感の欠如」と「無力感」という、別々のコーディング・ワードを設けることができた。なお、「生命感」に対応するコーディング・ワードは「一緒にいる」「家族」「重要な他者」「好きなことをする」など、複数のものを含んでいる。

3. 分析対象国の選定

今回の分析では、日本、韓国、米国、メキシコ、スペイン、英国、ドイツの7カ国を対象として選択し国際比較をおこなった。

韓国を選定したのは、数量的分析の結果で日本と回答傾向が似ており、日本と同じく多くの側面において他国より幸福感が低い傾向が見られたことである。このように、日本と韓国は計量的観点からは共通性が高いが、自由記述の回答から見たときにはどうであるかを確認するためである。米国を選定したのは、これまで日米の文化間比較の先行研究が多く存在し、データの解釈をおこなう際の基準となると考えられたからである。メキシコを選定したのは、数量的分析においては、この国はあらゆる側面で日本とは対極的に幸福感が高いという結果になっていたからである。スペイン、英国、ドイツの各国に関しては、数量的分析結果からは特に目をひく特徴があったわけではないが、今回の自由記述の質的分析に欧州各国のデータを加えることで、幸福/不幸を規定する社会文化的な要因を踏まえた解釈をより深めることが期待できる。さらには、数量的分析には特徴が表れなくとも、自由記述の質的分析では重要な知見が得られる可能性もあると考えられたからである。

コーディング・ワードの分析と解釈

以上のようにして選定された分析対象国のデータから得られたコーディング・ワードを、「幸福を感じる時」「不幸を感じる時」別に上位7位ⁱⁱまでを示したのが、表 3-1、表 3-2 である。

・Q1「幸福を感じる時」

表 3-1 に示すように、「幸福を感じる時」は、全般的にみて「家族」「一緒にいる」「友人」などの、つながりや関係性（本調査のフレームワークでは「生命感」にかかわるもの）を表すものが、各国とも共通して上位を占めていた。とりわけ、米国、メキシコ、スペイン、英国では、「一緒にいる」というコーディング・ワードが全回答

の4割程度に出現しており、他者と共在するということが重要な意味をもっていることがわかる。これに対して、日本と韓国では、「一緒にいる」ことは、全回答のうち15%程度の出現であり、それよりも上位に、「好きなことをする」が来るという特徴的であった。このコーディング・ワードは、「おしゃべりをする」「旅行する」「買い物をする」などの活動を伴うものである。後の共起ネットワークの分析でも記すが、自由記述のテキスト原文を確認すると、日本と韓国において「好きなことをする」というコーディング・ワードは、「家族」や「重要な他者」と共起することが多く、「友人とおしゃべりをしている」「家族と食事をしている」などの活動を共有していることが重視されていることがわかる。これに対して、「一緒にいる」ことが上位に位置する国では、「友人といっしょにいる」「家族といっしょにいる」という他者との共在そのものを重視する記述が多かった。

「達成感」に着目するならば、メキシコ(33.6%)とドイツ(32.0%)が、他国より10%以上多くなっていた。特にドイツの場合、「達成感」が幸福を感じる要因としてもっとも多く挙げられていた。韓国、米国、英国では、「達成感」は20%程度である。日本では「達成感」の出現頻度は、8位(11.4%)であった。

日本では、「抽象化された他者」(3位, 17.4%)、「良好な人間関係」(4位, 16.7%)がコーディング・ワードの出現頻度上位に挙げられているのが特徴的であり、これら2つのキーワードは共起することが多かった。すなわち、身近な重要な他者といった特定の他者ではなく、一般化された他者との関係が円滑で良好であることが重視されていることがわかる。

・ Q2 「不幸を感じる時」

表3-2に示すように不幸福感の規定要因としては、7カ国のうち日本以外の6カ国において、上位2位までに「達成感の欠如」が入っていた。他者と共在することが幸福感のために重要であった米国、メキシコ、英国においても、不幸福感の規定要因としてもっとも多く挙げられていたのは、「孤独」ではなく「達成感の欠如」であった。これに対してスペインでは、「達成感の欠如」よりも「孤独」のほうが、多く挙げられていた。日本では、「達成感の欠如」は、不幸と感じる原因の3位(12.6%)に位置するものの、その出現率は他国より少なく、メキシコの約3分の1以下、韓国の約半分であった。

日本では、不幸福感の原因としてもっとも多く頻出しているコーディング・ワードは「人間関係」(24.4%)であった。もとのテキストを確認すると「うまくいかない」「はめられる」「傷つけられる」「見放される」など実に多彩な内包があり、人間関係のトラブルに関して多くの表現語彙が用いられ、それを敏感に感じていることがわかる。「人間関係」は、韓国で16.1%、米国で12.1%、英国で13.8%出現しているが、こ

れらは「家族」や「重要な他者」と共起することが多かった。これに対して日本では、「幸福感」のときと同じく「抽象化された他者」(5位, 10.2%)と共起することが多かった。すなわち、家族や大切な他者とではなく、「人」や「他人」といった一般化された他者との関係において出現するという特徴が見られた。

「不幸な感情」は、「～～して辛い気持ちになったとき」「～～して悲しくなったとき」という回答のように、何らかの出来事や対象に対して、気がふさいだり、恐れや怒りを感じたり、悲しみを感じたりするという、自分の感情状態を自覚し、それを介した不幸感の認識である。韓国(2位, 16.1%), 米国(3位, 11.9%), 英国(2位, 14.7%), ドイツ(2位, 18.6%)において、それは比較的目立った「不幸感」の要因とされている。これに対して、日本では8位(7.9%), スペインでは7位(6.6%)と、低いのが特徴的であった。

・コーディング・ワードの頻出をもとにした解釈

幸福感と不幸感とを併せて解釈すると次のようなことが浮かび上がってくる。まず、幸福を感じるのと、不幸を感じるのとでは、そこに寄与している諸領域の重み付けが、両者のあいだで異なっているということである。幸福感を与えるものとして「生命感」に該当する他者とのつながりが多く挙げられるのに対して、不幸感を与えるものとしては「達成感」の欠如が第一に挙げられる場合が多いということである。このように、幸福感の形成にもっとも重要と感じられる要因と、不幸感の形成にもっとも重要であると感じられる要因とは、異なっていることが見て取れる。

国際比較という観点からみるならば、日本の幸福感、不幸感の規定要因として挙げられるものは、他国に比べ特徴的な様相を示している。第一の特徴は、他者とのつながりに関連する語が、幸福感でも不幸感でも、とりわけ多く挙げられていたことである。他者とのつながりといっても、幸福感の場合は他者と単に共在するだけでなく、他者と活動を共有していることが重要であった。これは、韓国の場合も同様であった。日本と韓国では、個別の人間同士がお互いの個を守りつつ共にいるというより、両者が同じ活動や対象を共有することが、幸福をもたらす「つながり」を感じるために重要であるようである。日本の第二の特徴は、他者といえども、幸福感、不幸感のいずれにおいても、特定の他者ばかりでなく、「人」という一般化された他者との関係が重視されているという点である。これは韓国には見られない特徴であった。

幸福感の文化間比較に関するこれまでの研究では、北米・西欧文化圏での個人の達成や自尊感情との関連が重要であるのに対して、相互依存的自己感の優位な東アジア文化圏では、社会関係との調和が幸福感の規定要因として重要であるという安定した結果がある(例えば Uchida et al., 2004 のレビューを参照)。今回の調査の結果を、それらの知見と比較するとどうであろうか。まず、「幸福感」の要因よりも「不幸感」

の要因のほうが、それらの知見とうまく適合していることがわかる。「幸福感」の要因は、北米-西欧文化圏、東アジア文化圏にかかわらず、いずれの国においても、他者とのつながり、すなわち「社会関係との調和」がもっとも重視されているが、「不幸感」の要因のほうは、日本では、「人間関係」が上位に位置し、北米-西欧文化圏の国々では「達成感の欠如」が上位に挙げられているという、これまでの比較文化的な研究知見と一致する結果が出ているからである。しかしながら、日本と同じ東アジア文化圏に位置していても、韓国では「達成感の欠如」が不幸感の最重要要因である。また、「不幸な感情」というカテゴリー・ワードは、自分のネガティブな感情状態の認知や自覚であり、自分が「個」であることを意識させると考えられるが、これも北米-西欧文化圏ばかりでなく韓国においても頻出していた。従って、北米-西欧文化圏と東アジア文化圏とを対比させるのみでは、幸福感の文化間比較のフレームワークとしては不十分であることが窺える。さらにここに、北米-西欧文化圏と類似していたメキシコ(中米)、他者とのつながりが幸福感でも不幸感でも最重視されていたスペイン(南欧)の結果をも含めて包括的に説明しようとするならば、詳細な文化比較のパーспекティヴが必要となるであろう。

共起ネットワークによる分析

7カ国すべてについて、「幸福を感じる時」と「不幸を感じる時」それぞれについて、コーディング・ワードの共起ネットワーク図を作成した。このことにより、どのコーディング・ワードどうしが共起する確率が高いか、すなわち、相互のコーディング・ワードの結びつきについて分析することが可能となる。なお分析対象としたサンプル数の少なさを考慮して、共起ネットワーク図は、1回でも共起が見られたコーディング・ワードを含めて作成した。

本論では、日本を中心とした国際比較をおこなう際に意味深いと思われる結果、または特徴的な結果を中心に、各国の結果を提示していきたい。なお、共起ネットワーク図において、コーディング・ワードは丸で示されている。丸が大きいほど出現頻度が高いことを意味している。また、赤色のものが最も中心性が高く、ピンク、白、水色、の順に低くなり、最も中心性が低いのが青色である。中心性が高いほど、そのコーディング・ワードが他の多くのコーディング・ワードと共起しながら出現することが多いことを示している。また、共起ネットワーク図でコーディング・ワードどうしを結ぶ直線は、それらの語の共起性を表し、この線が太いほど共起性が高いことを意味する。コーディング・ワードどうしの距離は、MDSと異なり特に意味をもたない。

日本の特徴として、図 1-1 に示すように幸福感においては、「好きなことをする、自由」がもっとも中心性が高く、かつ頻出していた。既に先の分析で示したのと同じく、「重要な他者」(友人、恋人)あるいは「抽象化された他者」(人、誰か)と活動

を共にするという結びつきが強い(共起している)ことがわかる。また、「抽象化された他者」も次に中心性が高く、「良好な人間関係を保つ」ということとの共起が強く、これも先に分析した日本の特徴がはっきりと出ている。すなわち、幸福感の中心的領域には、重要な他者や一般化された他者と良好な関係をもち、何かをおこなう、ということが存在していることがわかる。不幸福感に関しては、図 1-2 に示すように、「人間関係」が頻出し、かつ中心性が高かったが、これも先述した日本の特徴をはっきりと示している。「人間関係」は特に「抽象化された他者」との結びつきが強く「人からひどい扱いをうける」「人とうまくいかない」といった例のように、特定の誰ということではなく、世間一般の人との人間関係において不幸福感をもつことが多いということがわかる。また、「人間関係」と「無力感」が共起しているのも特徴的であり、これも他の国には見られないものであった。また、頻出コーディング・ワードでは、目立たなかった「不幸な感情」が中心性の強い語として出てきているのが特徴的であり、そのような「個」の感情への自覚的な捉え方をする人々も存在していることを示している。

韓国では、「幸福を感じる時」においては、「家族」の中心性が高く、「一緒にいる」「好きなことをする」「幸福な感情」などと強く結びついていた(図 2-1)。「好きなことを」を他者とおこなうことが重要なのは日本と同様であるが、韓国は「家族」と特に結びつきが強いのが特徴的であった。なお、日本において重要であった「良好な人間関係」のコーディング・ワードは抽出されていない。また「達成感」も頻出し中心性も高い。日本で「達成感」は中心性が弱く出現頻度も低かったことと大きく異なっている。「不幸を感じる時」は、図 2-2 に示すように「達成感の欠如」が頻出し中心性も高かった。これも、日本において「達成感の欠如」が周辺的な位置にあったことと大きく異なっている。「人間関係」が比較的中心性が強いのは日本と同様の傾向であるが、日本のように一般化された他者とは結びついていなかった。

米国において「幸福を感じる時」は図 3-1 に示すように、「重要な他者」(友人・恋人)と「一緒にいる」ということが、もっとも中心的な領域に位置しており、「達成感」はそれほど目立たなかった。それに対して、「不幸を感じる時」では、図 3-2 に示すように、「達成感の欠如」がもっとも中心性が高く頻出していた。しかも、「達成感の欠如」は、「自己嫌悪」という「自己評価」と比較的強く関連しており、これは他の国には見られない特徴であった。Diener & Diener (1995) などの先行研究においても、米国では「達成感」と「自己評価」とが関連していることが示されている。しかしながら、本研究では、「達成感があると自己評価が上がる」というよりも、「達成感が欠如すると自己評価が下がる」というつながりであることが強いことが示唆される。

メキシコにおいて「幸福を感じる時」は図 4-1 に示すように、家族や重要な他者

と「一緒にいる」という他者とのつながりと、「有能感・達成感」という2つのカテゴリー・ワードの中心性が高かった。「不幸と感じるとき」は図4-2に示すように、必ずしも自分の日常生活世界で接する他者ではなく、世界や抽象化された他者の不幸ということの中心性が高いのが特徴である。「達成感の欠如」は頻出するが、他の語との共起性は高くなかった。

スペインでは、「幸福を感じる時」は図5-1に示すように、家族や恋人・友人・大切な人などの重要な他者と一緒にいるということが、もっとも中心的な位置にあった。いっぽう「不幸を感じる時」は、図5-2に示すように、「重要な他者」や「抽象化された他者」に「不幸な出来事」が生じることが、もっとも中心的な位置にあった。幸福感の形成においても、不幸感の形成においても、他者とのつながりや調和、すなわち「生命感」が重視されていることがわかる。英国においては、「幸福を感じる時」の中心的な要因は、家族や友人等とのつながりと、有能感・達成感という2つの中心性がみられるという、メキシコとほぼ同じ傾向が見られると同時に、「好きなことをする」というカテゴリー・ワードの中心性が高いのも特徴的である(図6-1)。日本でも「好きなことをする」は頻出し中心性が高い言葉であったが、日本の場合はその語が、他者とのつながりにもっぱら関係していたのに対して、英国の場合は、「有能感・達成感」とも共起していた。「不幸を感じる時」は「達成感の欠如」が頻出しとりわけ中心性もかった(図6-2)。これは、米国、韓国と同じ傾向であり、他者との関係が重視されていた日本とは異なる結果である。

ドイツにおいて「幸福を感じる時」は、図7-1に示すように「有能感・達成感」と「家族」が2つの中心となっていた。これはメキシコと同様の傾向であるが、メキシコでは家族以外の友人等との関係も重要であったのに対して、ドイツではとりわけ「家族」とのつながりが重視されているという特徴が見られた。「不幸を感じる時」は、図7-2に示すように「不幸な感情」がもっとも中心性が高く、他のほとんどのキーワードと結びついているという特徴があった。さまざまな要因や状況はあるにしても、それらの中で否定的な感情を感じている自分自身をリフレクティブに捉え、その自分自身のあり方を不幸の原因として捉えているということがわかる。

カテゴリーコーディングによる分析

【分類カテゴリーとコーディングの方法】

Q3「私にとって幸福とは～～である」に対する回答、すなわち個人にとっての幸福の定義もしくは「幸福観」に関しては、カテゴリーコーディングにより分析した。まず日本のデータを対象に、Ryff(1989)のwell-beingの理論的定義等を参考にしながら分類カテゴリーを生成した。カテゴリーの数は、十分にカテゴリー間の差異がありつつ煩雑となりすぎない7個前後になるようにした。こうして日本のデータをもと

に仮に生成された分類カテゴリールールを、他の国にも試行的に当てはめて、確認をおこない、必要があれば修正を加えた。その結果、最終的に表4に示すような、各国共通の分類カテゴリーとコーディング・ルールを作成した（表4）。

この分類カテゴリーに則して、筆者と今回の分析に携わった補助者一名が、データを独立に20個ずつコーディングし、不一致であったものに関しては協議しコーディング・ルールの理解を深め、また同時に、コーディング・ルールの見直しや明細化をおこなっていった。この過程を5回繰り返した後、一致率が90%を超えるまで安定したことが確認されたので、残りは別個にコーディングをおこなった。コーディングに迷ったものは、協議して決定した。なお、今回のカテゴリーコーディングによる分析では、韓国のQ3の翻訳が未完了であるため欠損している。

【結果と解釈】

「幸福観」のコーディングされた結果を、各国の回答数全体に占める百分率で示したものが図8である。7カ国それぞれに9つの変数をもつデータであるので、この結果をもとに国際比較をおこなうためには、全体を俯瞰しつつ印象的な差異に着目して解釈をおこなうという方法をとらざるを得ない。この手法では、解釈に主観性や恣意性を伴うおそれもあり、また、説明のために外挿的に他の研究・調査の結果や文化論などを参照することもある。したがって、十分な根拠をもって主張される結果というより、今後の文化比較調査のための新たな観点の可能性を提示する仮説生成的なものであることを、あらかじめ断っておきたい。

さて図8をみると、他者との共存や調和を優先する指向である「共存」は、いずれの国においても「幸福観」のもっとも支配的な要因であることがわかる。これは先述したQ1「幸福感」の分析結果の傾向と一致している。しかし国別の特徴に着目すると、スペインと日本が他国に比べて、「共存」の割合が少なくなっているのがわかる。これら2国はいずれも、これまでのQ1「幸福感」およびQ2「不幸感」では、他者との関係が重要視されていた国であり、一見相反する結果が出ている。この2つの国の回答者の属性情報によると、他国よりも同居率が多い(独居率が少ない)という特徴がある。このように、具体的な現実においては、「共存」が重要になってくるはずの国である。しかし、自分にとっての「幸福観」や「幸福の定義」では、それにあまり言及されていないのである。おそらく「幸福観」では、自分の現況に関わることというより、希望や意図と関わるやや抽象的な回答が得られるのであろう。スペインと日本において他者との共存は、すでに現実的に存在している、様々な具体的出来事や配慮に満ちたものであり、「幸福観」のような抽象的理想には、むしろ反映されないのではないかと考えられる。このように、具体的な幸福感や不幸感の要因/状況と、幸福「観」や意見を構成する要素とが異なると考えられる例は、後述するように他のカテゴリーにも見られた。

金銭的な獲得や充足を自分にとっての幸福だと定義する「経済」は、図 8 によると、日本とドイツそして英国において多く見られ、メキシコでは少なくなっているのがわかる。経済的に成長を遂げた国で、経済的獲得が幸福の定義として挙げられ、経済的に成長の途上にある国では、経済的獲得は幸福感の定義には出てこないという結果のようにも思えるが、そう単純ではないようである。OECD の提供する 2010 年の調査によれば、国民 1 人あたりの GDP は、日本、ドイツ、英国はそれぞれメキシコの約 2.5 倍であり、米国は約 3 倍である。上記の仮説では、米国を含めて説明することができない。また、GDP の成長率は、2008 年から 2010 年の 3 年間では、日本と英国はマイナス成長、ドイツとメキシコはほぼ横ばいである(OECD, 2011)というように、成長率との一貫した関連も存在しない。このように、経済的な裕福さや成長率の指標と、今回の結果との関連は見だしにくい。ひとつの可能性としては、社会的・経済的階層差の大きいメキシコでは、インターネットを使用する人々は比較的裕福な層であり、経済的な獲得や充足が「幸福感」として表立って出てこないということも考えられるが、今後、他の国の結果も含め、さらなる解釈が必要である。

目標を達成したり、やりがいのあることを行うといった「達成」を「幸福の定義」とする比率は、日本とドイツにおいて他国より低かった。この結果は、日本の場合は、「Q1 幸福感」「Q2 不幸感」での結果の傾向と一致していた。しかしドイツでは「達成」は、「Q1 幸福感」においては他国よりも出現率が高く、「Q2 不幸感」においても最も重要な領域であったので、逆の結果が出たこととなる。このことは、「幸福感」「不幸感」の具体的な要因と「幸福」に対する意見や態度との関連性は、決して一様ではなく、両者を単純に同一視することはできないということを示している。すなわち、両者のあいだにどのような要因がどのように作用するのかは、国別に異なっている可能性があり、幸福感の国際比較においては、すべての国を同じ構造モデルで説明するばかりでなく、それぞれの国において異なるモデルが必要になってくることも示唆されるであろう。

生活が脅かされることがなく平穏無事に過ぎていくことを幸福の定義とする「平安」は、日本において他国より比率が高く、メキシコと英国において低くなっていた。OECD の調査 (OECD, 2009) によると、犯罪被害者の対人口比は、日本では 2005 年では 10%に満たず (そのうち半分は自転車盗難被害である)、日本はもっとも社会的な安全度が高い国のひとつである。逆に、メキシコと英国は、今回の分析対象国の中ではもっとも犯罪被害者の対人口比が多い(メキシコ 18.7%) (英国 21.0%)。この矛盾した結果に対する一つの仮説は、日本では、「平安」は望めば得られるものであり、メキシコと英国では望んでも得にくいゆえ、幸福観は別の領域が意味をもってくるのではないかというものである。あるいは、「平安」はリスクを冒さないということも含意するので、日本の場合は他国よりリスクを冒さず平安であることが重視され、メ

キシコや英国においては、そうではないということを示しているとも考えられる。いずれにしても、「幸福観」の形成には、複雑な要因がかかわっていることを窺わせる。

幸福は、自分の態度や行動、考え方に依るところが大きいとする「態度」は、米国において他国よりも比率が高くなっている。これは、「幸福」に対する主体の認識の能動性（たとえ状況自体は変わらなくても）を強調するものである。前向きに肯定的意味を見いだして生きるというポジティブな指向性は、米国に特徴的であることが、Ehrenreich (2008) などで指摘されているが、この特徴と無縁ではあるまい。しかし、事象に対して肯定的意味を見いだせず「不幸」だと感じてしまうとき、それが自己の認識や態度に帰属させられるならば、自尊感情の低下と結びつくと推測される。幸福の自分なりの主観的な色付けをしない「観念」（たとえば「幸福は毎日の生活」「あらゆるもの」などの回答）、は、米国において他国よりも出現率が低いが、これは、幸福の抽象的定義は「態度」が多く占めているということと対応しているものである。

以上のように、Q3 のカテゴリーコーディングによる分析の結果の解釈は、まだまだ暫定的なものである。しかしながら「幸福感」と「幸福観」とは必ずしも一致せず、それらのあいだの関係を細やかに考察していく必要があることが示された。また、「幸福感」と「幸福観」の両者を含んだ、幸福に関する心理学的なモデルは、必ずしも異文化間で同じものが適用できるわけではないということも示唆され、幸福感研究における方法論に関する知見が得られたと言える。

まとめ

本論では、幸福感の国際比較調査の SCT の質的分析を通して、幸福と感じる時、不幸と感じる時、幸福の定義に関する文化比較をおこなった。幸福感と不幸福感そして幸福に対する定義とでは、それらを構成する領域が必ずしも一致しないこと、西欧—東アジアといった文化比較の対比軸以外にも多くのバリエーションがありうるということが分かった。また個別的な文化比較に関する結果として、日本における他者との関わりには一般化された他者の意識がきわめて重要であること、日本や韓国では他者と共に存在することそのものよりも、共に活動を共有することが幸福を感じるために重視される等の、興味深い結果が得られた。

今後は、さらに分析対象国を増やし、また、分析対象とするデータ数も増やすことで、本論で提示した仮説はさらに精緻化されていくことと考えられる。また、性差、年齢群などの回答者の属性、あるいは数量的データによる指標等を外的変数として考慮した分析をおこなうことで、数量的分析との関連は、よりはっきりしたものとなることが期待できるであろう。

引用文献

- Diener, E. & Diener, M. (1995). Cross cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 653-663.
- Diener, E. (2000). Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, **55**, 34-43.
- Ehrenreich, B. (2008). *Bright-sided: How the relentless promotion of positive thinking has undermined america*. Metropolitan Books.
- OECD (2009). Factbook 2009.
http://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-factbook-2009_factbook-2009-en (2012年3月5日現在).
- OECD (2011). Factbook 2011-2012.
http://www.oecd-ilibrary.org/economics/oecd-factbook_18147364 (2012年3月5日現在).
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality & Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- Uchida, Y., Norasakkunkit, V. & Kitayama, S. (2004). Cultural constructions of happiness: Theory and empirical evidence. *Journal of Happiness Studies*, **5**, 223-239.

ⁱ 立命館大学産業社会学部・樋口耕一氏製作によるフリーソフトウェア (<http://khc.sourceforge.net/>上で配布されている)。

ⁱⁱ 頻出コーディング・ワードの8位以下は、出現頻度がきわめて少なく、また国によっては7位までで収束するところもあったため、7位までを記した。

表1-1: SCTに対する回答例（日本）

Q1: 幸福を感じる時	Q2: 不幸を感じる時	Q3: 幸福の定義
<p>自由に行動できる。束縛されず好きなことができる 美味しいものを食べ、美しい景色を親しい友人と見た 家族の顔が揃った食事 何かに夢中になっている 家族で仲良くおしゃべり 友達とおしゃべりしている 楽しかったり、嬉しかった 相手が喜んでくれた 思った通り出来た やりたいことがやれてる 気のあった友人達と同じ趣味に関わっている 平凡な日常を送れる 家族や友人、職場の人間関係がうまく行ってる お酒を飲んでいる 一日が無事に終わった 仕事が成功で終わったとき すべきことができた</p>	<p>何もすることが無い 自分の思いと結果が違った 人となじめていない 辛い気持ちになったとき 身近な人を失ったとき 自分が頑張れない 理不尽な扱いを受けたと感じる 病院に行ったとき 恋人という自由な時間がない 自分の力不足を感じた 諍いの中にいる 人に悪意を向けたり、向けられたりした 仕事があまくいかず自分の能力の低さを感じる 不幸だと思わない 状況によって他人との大きな違いを感じた 失敗が続く</p>	<p>人と人とのつながり 思い通りに生きられること 共に生きるパートナーと暮らす 心が豊かなことである 気持ちが満たされること 自分自身でいられる 心にゆとりがあること。 気ままに生きられることである 愛する人とある程度裕福な生活を送っている時である。 かかわる全ての人が幸福と認めていただけるならば 人間として当たり前動作が苦もなく出来ることである。 少しでもいいから、自分の時間が持てたとき おいしいものを食べている時である 身近にあるもの 現時点では遠いもの 雲のように自由な気分のときに生じる</p>

表1-2: SCTに対する回答例（メキシコ）

Q1: 幸福を感じる時	Q2: 不幸を感じる時	Q3: 幸福の定義
<p>家族、友人と一緒にいる 物事が計画通りうまくいく 欲しいものが全部手に入る 物事が皆にとってうまくいくのを見る 家族、友人、好きな人と一緒にいる 褒められる 旅行に行く 勉強、仕事、同窓会に出る 全てうまくいく 一人でいる 好きな事をする 家族と一緒にいる 創造的なことをする 達成して抱きしめてもらう 何かを達成する 目標を達成する 両親と婚約者とうまくいく 周りの人がみんなうまくいっている</p>	<p>物事が計画通りに行かない。 失敗 何もすることが無い 物事が望んだようにいかない 自分に関心を向けてもらえない 問題があって解決できない 誰か人が悪事を働いて自分たちに損失を与える。 恐れや感情でいっぱいになっている。 問題がある。 物事がうまく行かないとき。 家庭内でけんかがあるとき。 学校の成績が悪い。誰かとけんかする。 目標が達成できない。 大切な人に会えなくなる。 孤独 意思決定が出来ない</p>	<p>目標を達成する。 自分や他人と良い状態である。 全て。 一番好きな事が出来る。 自分も他人も元気であること。 自分を認めてくれる人がいる 心配がないこと。 価値のある方法で共存できるよう協働する どんなに小さくても、全ての瞬間にあるもの 愛する人と一緒にいる。 物事がうまく行ったときに、幸福になり、幸福を伝え、それを共有できる人がいる。 自由、調和、好きな事を決められる。 自分の決断を他人に左右されなくていいこと 人生のあらゆる瞬間、あらゆる細部を楽しむ。</p>

表2-1：「幸福を感じる時」コーディング・ルール

コーディング・ワード	コーディング・ルールの説明	含まれる単語例
家族	同居している人、動物。別居している血縁者	家族、団欒、妻、夫、ペット、両親、母親、孫、家庭、子ども、実家、家、主人、娘、こども
重要な他者	親密な関係にある他者、特別な意味をもつ他者	友達、友人、恋人、大切な人、好きな人、身近な人、彼女
抽象化された他者	特定の関係性や特定の人物が示されない他者	人、みんな、誰か、周囲の人、周り、誰も、皆
一緒にいる	特定の活動は明示されず、共にいることが重視されているもの	一緒に、関わる、交流、囲む
一人でいる	一人でいることが重視されているもの	一人で、自分だけで
良好な人間関係	他者との良好な人間関係、他者からの肯定的評価	ワイワイ、盛り上がる、良好、円満、談笑、優しい、感謝、愛す、もらう、認められる、必要とされる、楽しい、
好きなこと、自由	特定の活動が明示され、その活動が回答者にとって好ましいもの。	遊ぶ、おしゃべり、会話、話す、時間、好きなこと、自由、したいように、休み、趣味、遊ぶ、ゲーム、寝る、ぶらぶら、何もせず、ほっこり、のんびり、ゆったり、食べる、酒
幸福な感情	幸福感に関連する感情状態	笑顔、笑う、嬉しい、感動、すっきり、満足、心が豊か、楽しい、幸せ、高揚、満たす、気分
有能感・達成感	何かを成し遂げたり、そのために努力をしたりすること	やり遂げる、達成、成果、解決、成功、充実、すべきこと、実現、一生懸命、創造、思うように、努力、狙い、結果、思う通り、叶う、成長、頑張れる、発見
不幸が無い	不幸や心配事、悩みなどが無いこと	悩み、心配、問題、後悔、ストレス（以上、否定語を伴う）、無事、平穩、元気、健康、平凡、普通、穏やか、安定、平和、熟睡
経済的充足	経済に関する事	大金、収入、経済、お金、給料
自然	自然に関する事	自然、空、陽だまり、庭、植物、空、虹

表2-2：「不幸を感じる時」コーディング・ルール

コーディング・ワード	コーディング・ワードの説明	含まれる単語の例
家族	同居している人、動物。別居している血縁者	家族、団欒、妻、夫、ペット、両親、母親、孫、家庭、子ども、実家、家、主人、娘、こども
重要な他者	親密な関係にある他者、特別な意味をもつ他者	友達、友人、恋人、大切な人、好きな人、身近な人、彼女
抽象化された他者	特定の関係性や特定の人物が示されない他者	人、みんな、誰か、周囲の人、周り、誰も、皆
仕事	仕事や勉強。義務的におこなうもの	仕事、職場、やりたくないこと、課題、上司、アルバイト、会社、レポート、学校、通勤、実験、勉強、実習、しなければならない
人間関係	悪い人間関係、他者からの否定的評価	うまくいかない、仲たがひ、ののしる、裏切る、はめる、理不尽、ないがしろ、悪意、軽蔑、嫌う、無視、誤解、身勝手、傷つける、なじめない、諍い、最低、喧嘩、見放す、差別、否定、拒否、いがみあい
達成感の欠如	自分が行うことが、達成できない、結果が出ない（アウトカムの重視）	意味、成果、やる気、目標、報う、結果、やりがい、実行、頑張れる、達成、することが、欲しい（以上、否定表現を伴う）、失敗、裏目、失敗、挫折、しくじり
不幸な感情	否定的な感情を感じている状態	気がふさぐ、悲しい、苦痛、退屈、怒り、恐れ
不幸な出来事	自分や他者に、不幸な出来事が起きること	病気になる、怪我をする、苦しむ、ひどいめにあう
無力感	自分の有能性が不足するために、うまくいかない（能力の重視）	思うように、思ったように、考え通り、自分の力（以上、否定表現を伴う）、何もできない、力不足、無力、非力、うまくいかない、困難、八方塞
自由の欠如	自由、自律的に成れない、あるいはその時間がない	自由、自分の時間、したいように（以上、否定表現を伴う）、選べない、制約、時間がない、束縛、強制、不自由、嫌なこと、ねばならない
孤独	他者との関係性が存在しない、あるいは剥奪されている	誰も、誰にも、友達、仲間、付き合える人（以上、否定表現を伴う）、孤独、一人ぼっち、愛されない、解ってもらえない、寂しい
喪失、老い	健康や若さ体力を失う、あるいは他者を失う	別れる、亡くす、死、訃報、失う、年、老い、鏡
経済的問題	経済的な困窮、圧迫など	お金、金欠、貧しい、貯金、余裕、ローン、家計、年収

表3-1: 「幸福を感じる時」頻出コーディング・ワード(上位7位)

順位	国						
	日本	韓国	米国	メキシコ	スペイン	英国	ドイツ
1	家族 25.0%	家族 24.4%	一緒にいる 38.9%	一緒にいる 37.4%	一緒にいる 45.3%	重要な他者 48.7%	有能感・達成感 32.0%
2	好きなことをする、 自由 18.2%	有能感・達成感 23.6%	重要な他者 31.5%	家族 35.5%	好きなことをする、 自由 34.9%	家族 26.1%	家族 26.8%
3	抽象化された他者 17.4%	好きなことをする、 自由 21.1%	好きなことをする、 自由 25.9%	有能感・達成感 33.6%	重要な他者 26.4%	好きなことをする 21.7%	一緒にいる 10.3%
4	良好な人間関係 16.7%	幸福な感情 14.6%	有能感・達成感 22.2%	重要な他者 17.8%	家族 16.0%	達成感、 19.1%	幸福な感情 9.3%
5	重要な他者 13.6%	一緒にいる 14.6%	家族 14.8%	幸福な感情 13.1%	有能感・達成感 14.2%	幸福な感情 14.8%	不幸がない 9.3%
6	一緒にいる 12.9%	仕事 7.3%	幸福な感情 5.6%	好きなことをする 9.4%	良好な人間関係 5.7%	良好な人間関係 6.1%	健康 8.3%
7	不幸が無い 12.1%	健康 7.3%	幸せな出来事 2.8%	一人にいる 2.8%	調和 2.8%	抽象化された他者 5.2%	抽象化された他者 7.2%

注) 各コーディング・ワードの百分率は、各国の全回答数の中での出現率を示す

表3-2: 「不幸を感じる時」頻出コーディング・ワード(上位7位)

順位	国						
	日本	韓国	米国	メキシコ	スペイン	英国	ドイツ
1	人間関係 24.4%	達成感の欠如 21.0%	達成感の欠如 32.1%	達成感の欠如 40.7%	孤独 27.4%	達成感の欠如 38.5%	達成感の欠如 32.0%
2	仕事 13.4%	不幸な感情 16.1%	人間関係 12.8%	世界、他者の不幸 20.4%	達成感の欠如 21.7%	不幸な感情 14.7%	不幸な感情 18.6%
3	達成感の欠如 12.6%	人間関係 16.1%	不幸な感情、不快 11.9%	家族 13.0%	重要な他者 17.9%	人間関係 13.8%	家族 17.5%
4	無力感 11.0%	家族 13.7%	孤独 11.0%	孤独 9.3%	不幸な出来事 15.1%	孤独 13.8%	不幸な出来事 12.4%
5	抽象化された他者 10.2%	経済的問題 12.9%	不幸な出来事 11.0%	不幸な感情 9.3%	人間関係 13.2%	ストレス 12.8%	健康 11.3%
6	孤独 8.7%	健康 10.5%	自己嫌悪 10.1%	不幸な出来事 8.3%	抽象化された他者 7.6%	不幸な出来事 11.9%	人間関係 8.3%
7	健康 8.7%	孤独 8.9%	仕事 9.2%	社会の不正義 6.5%	不幸な感情 6.6%	仕事 9.2%	抽象化された他者 7.2%

注) 各コーディング・ワードの百分率は、各国の全回答数の中での出現率を示す

表4:「幸福の定義」分類 カテゴリーと分類基準

カテゴリー	分類基準と含まれる語
達成	自分が意図したことを成し遂げること, 世界に対する能動性 例) 夢見た生活を送る, 人生の成功, 好奇心を満たせる行動がとれた
自由	自分の好むこと, 思うことが自律的・自由にできる。生きることを楽しむ 例) 人生を楽しむ, 好きなことをする, 自由に生きる
共存	他者や世界との調和, 交流, 他者や世界の幸福, 他者から愛されることや評価されること, 他者への献身など 例) 家族, 愛, 他人によいことをする, 調和して生きる, 周囲が幸福である
感情	嬉しい, 楽しい, 満足, 充実している, といった感情やその表出 例) 微笑むこと, 笑顔でいられる, 気分がよい, 幸せな心, 充実していること
平安	不幸や苦痛, 心配, 病といったネガティブなものがない状態 例) 心配ごとがないこと, ゆっくりすごせる, リラックス, 平和, おだやかな毎日, 普通なこと
態度	幸福の捉え方に対して自分の考え, 態度, 認識を重視したり, 幸福に対して一定の信念などが表明されているもの 例) 全てを受け入れる, 最大限に生きる, 自分の人生を愛する, 気持ちしだい, 毎日の積み重ね, 感謝をすると得られる
観念	「幸福」の同義語への言い換え, 抽象的定義となり, 回答者の主観的関わりや意見表明がないもの 例) 不幸ではない, 思考状態, 幸福, 定義できない, 人生, 全て, 夢, そのうち手に入る, 遠い
経済	経済的安定, 財産や富の獲得。ただし「生活の心配をしないでいいこと」など, 最低限の条件は, 「平安」に分類する 例) 金, 資産, 経済的に裕福
不明	「なし」「わからない」など

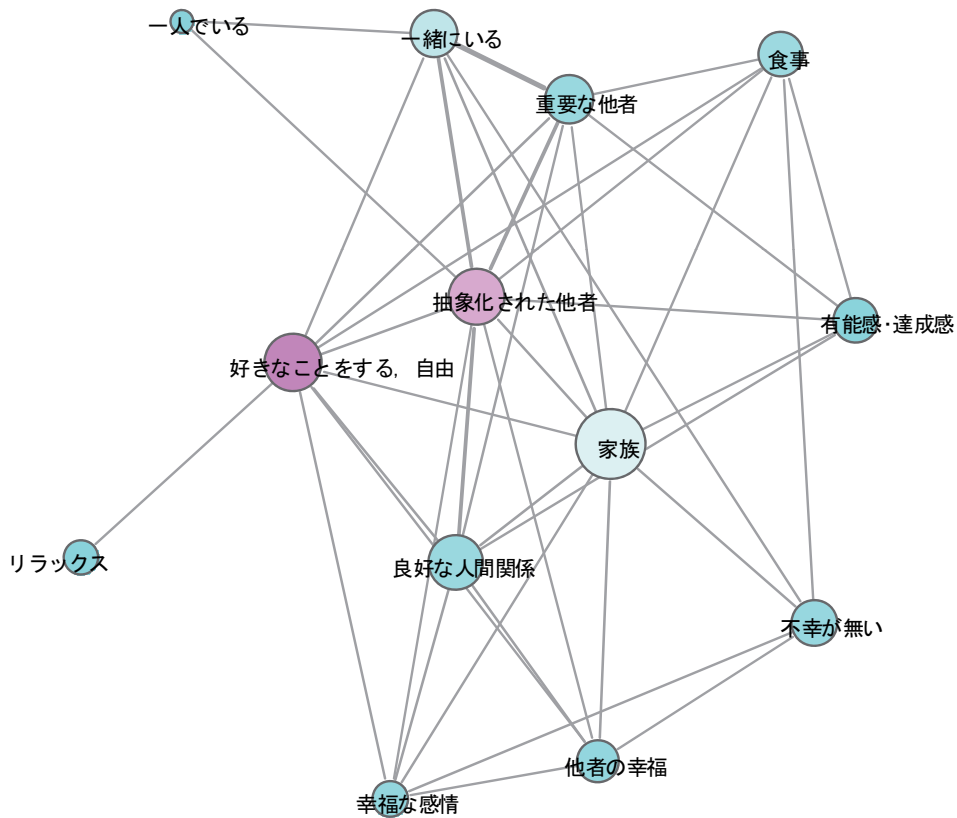


図1-1：日本「幸福を感じる時」

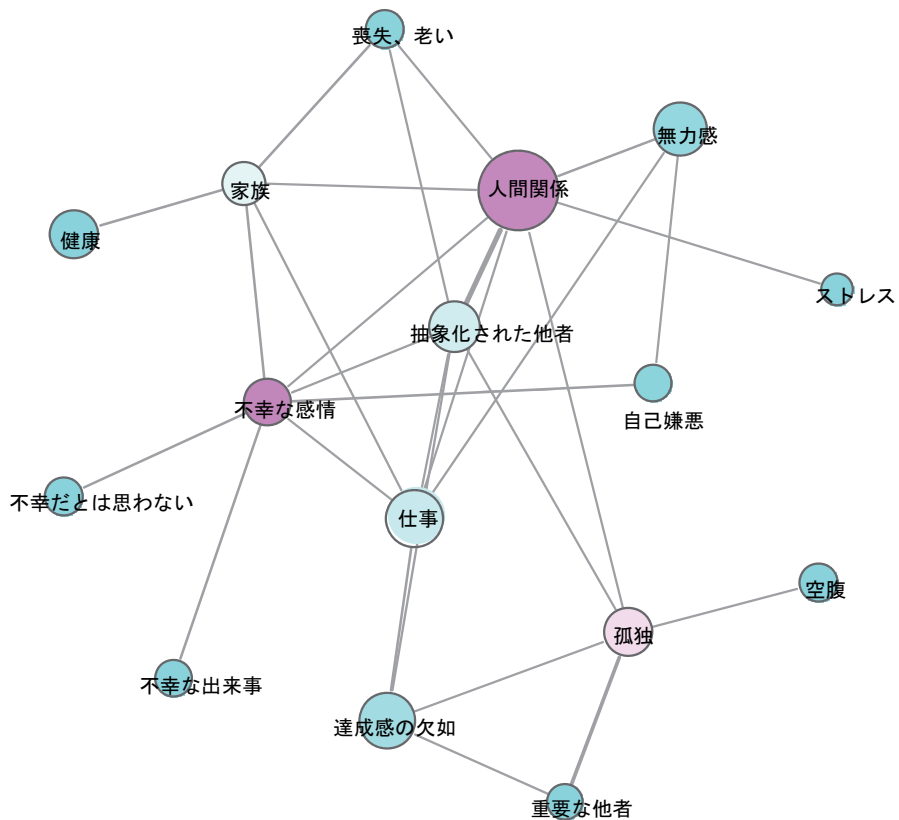


図1-2：日本「不幸を感じる時」

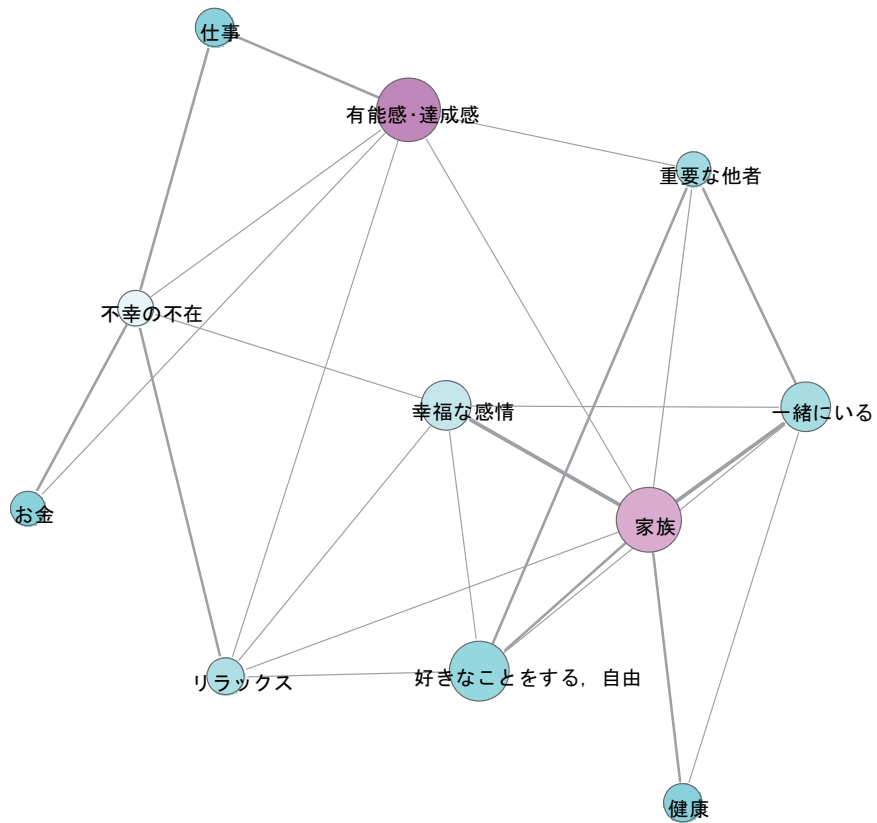


図2-1：韓国「幸福を感じる時」

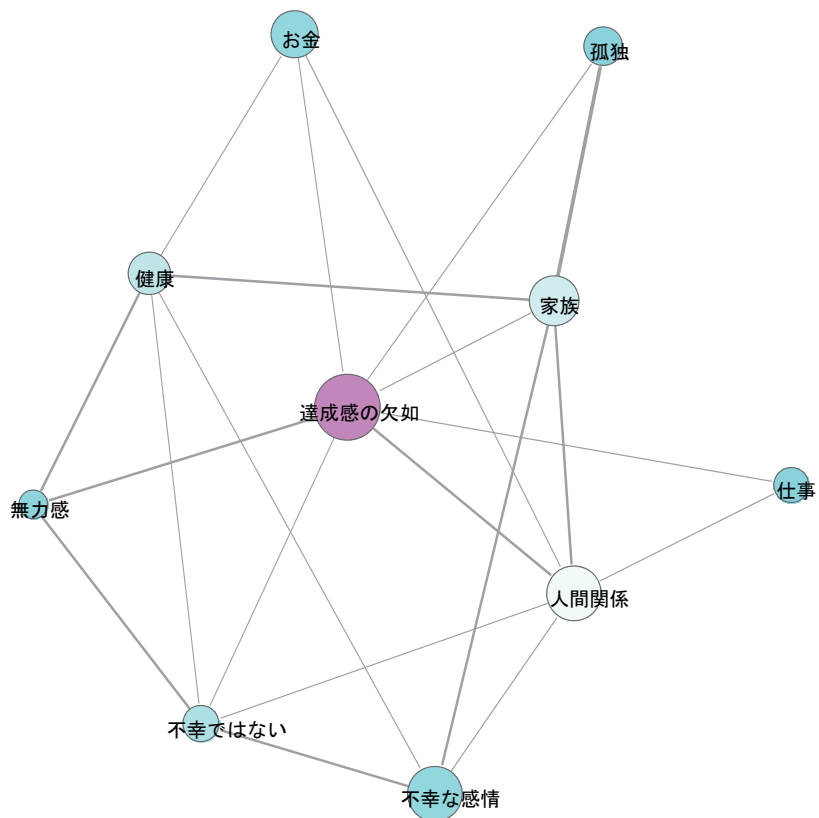


図2-2：韓国「不幸を感じる時」

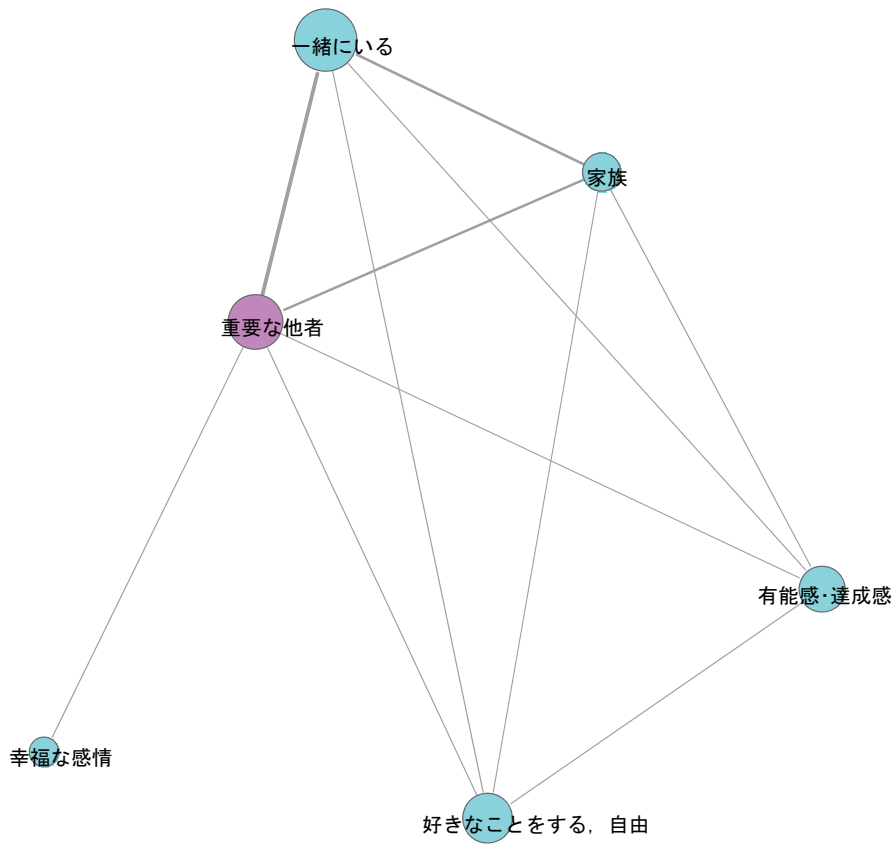


図3-1：米国「幸福を感じる時」

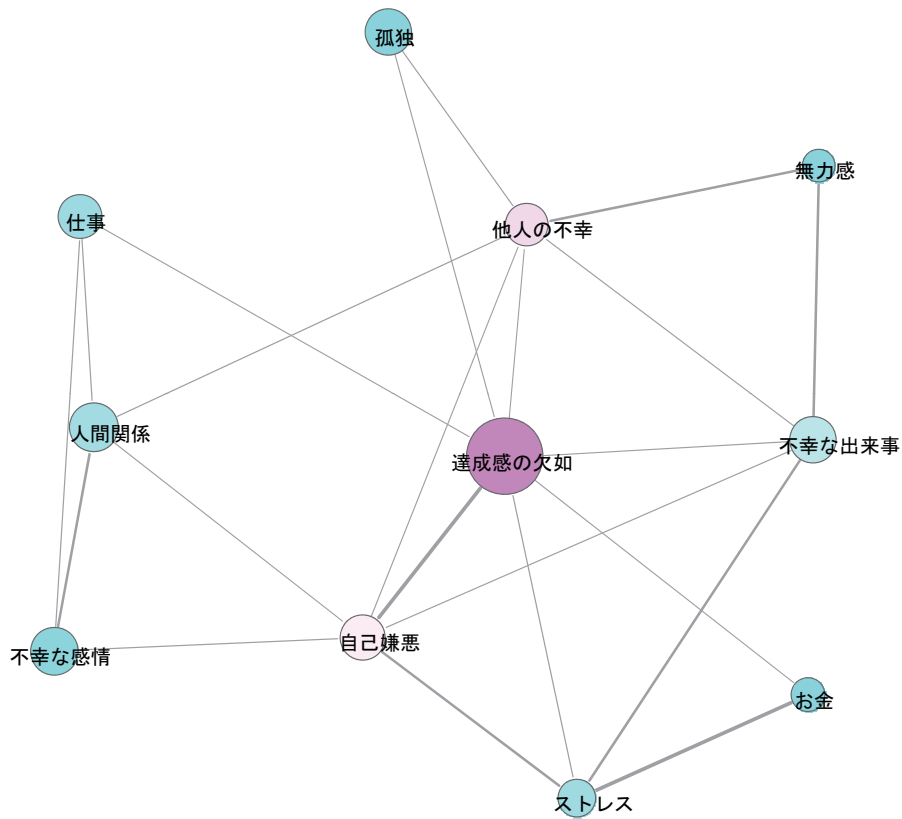


図3-2：米国「不幸を感じる時」

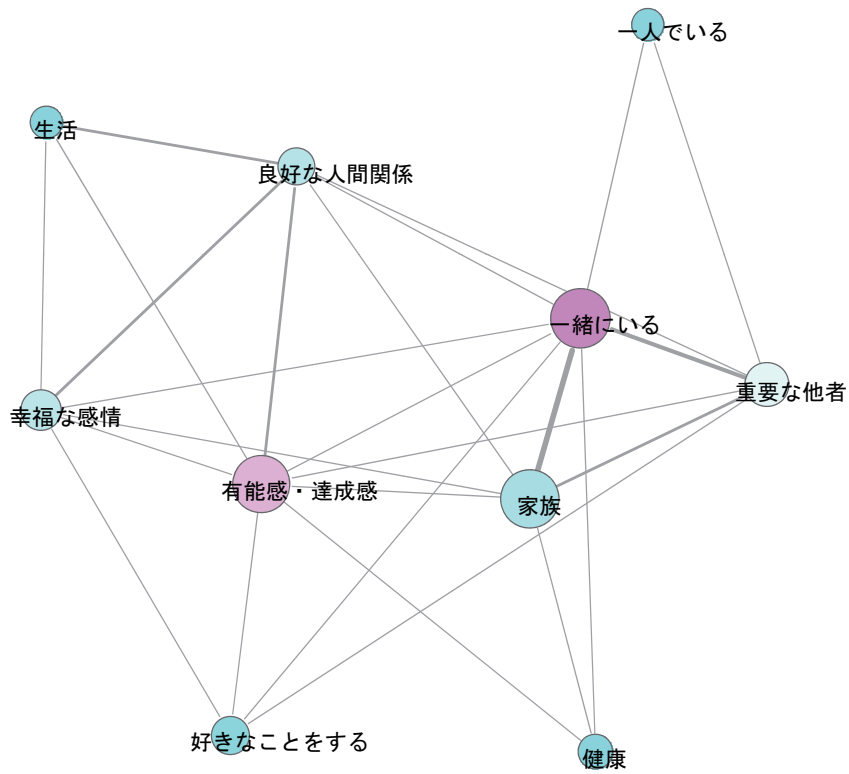


図4-1：メキシコ「幸福を感じる時」

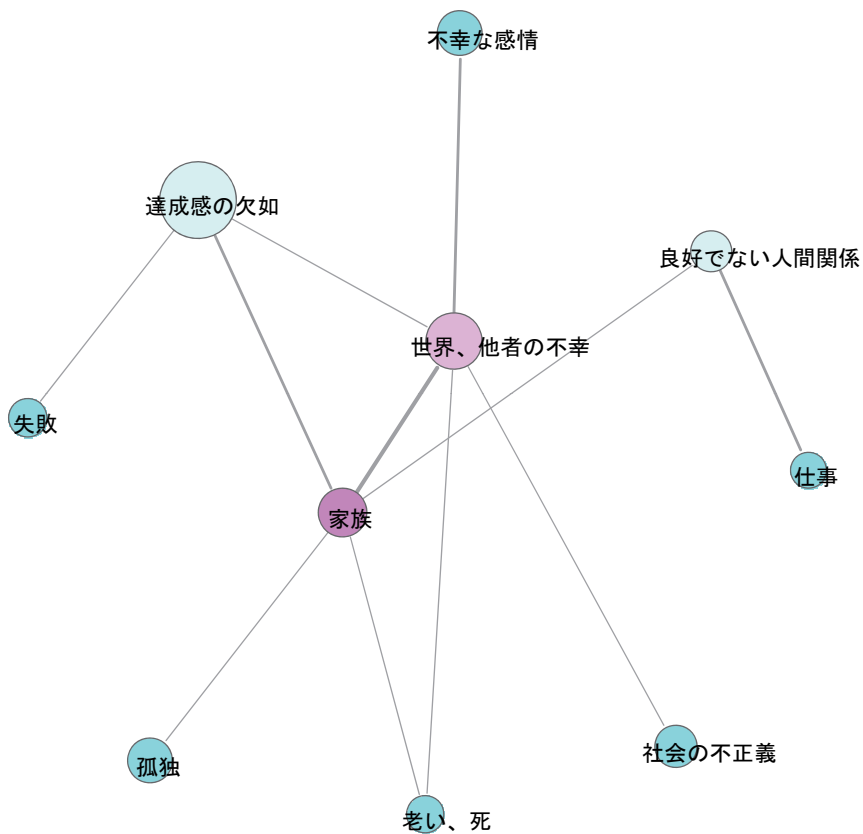


図4-2：メキシコ「不幸を感じる時」

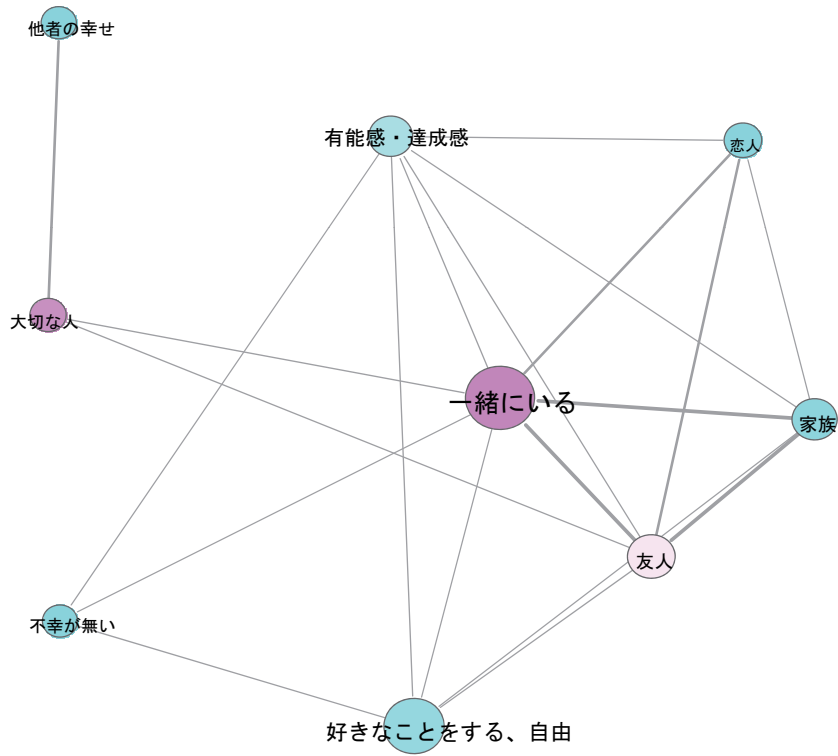


図5-1：スペイン「幸福を感じる時」

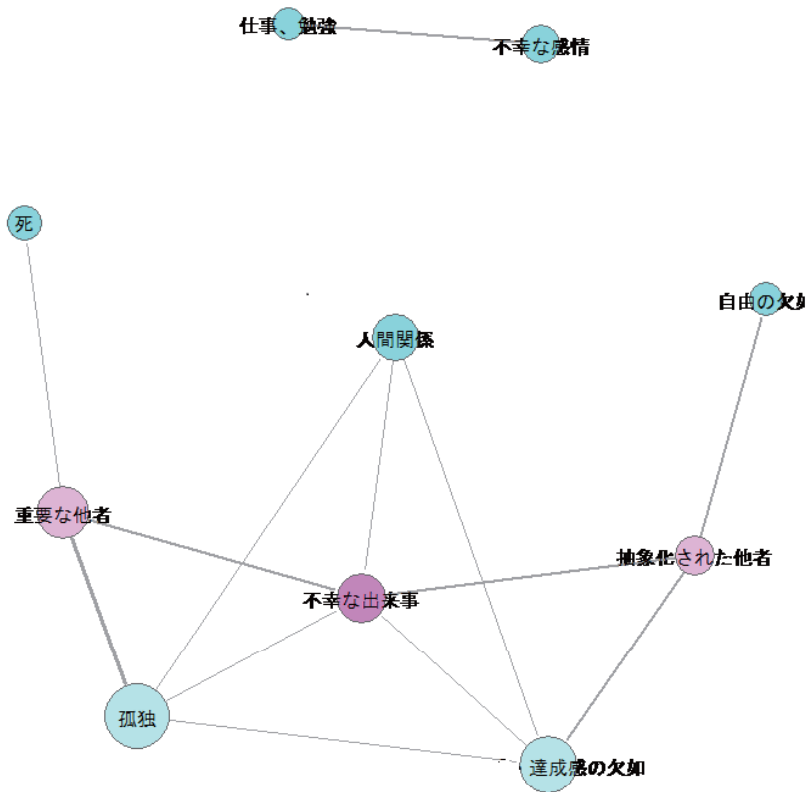


図5-2：スペイン「不幸を感じる時」

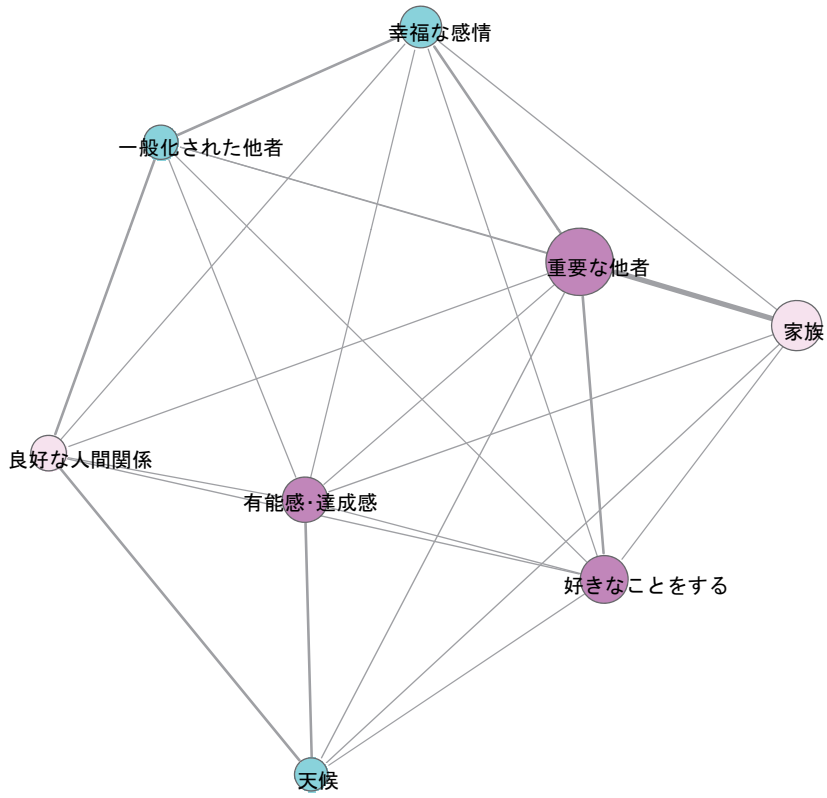


図6-1：英国「幸福を感じる時」

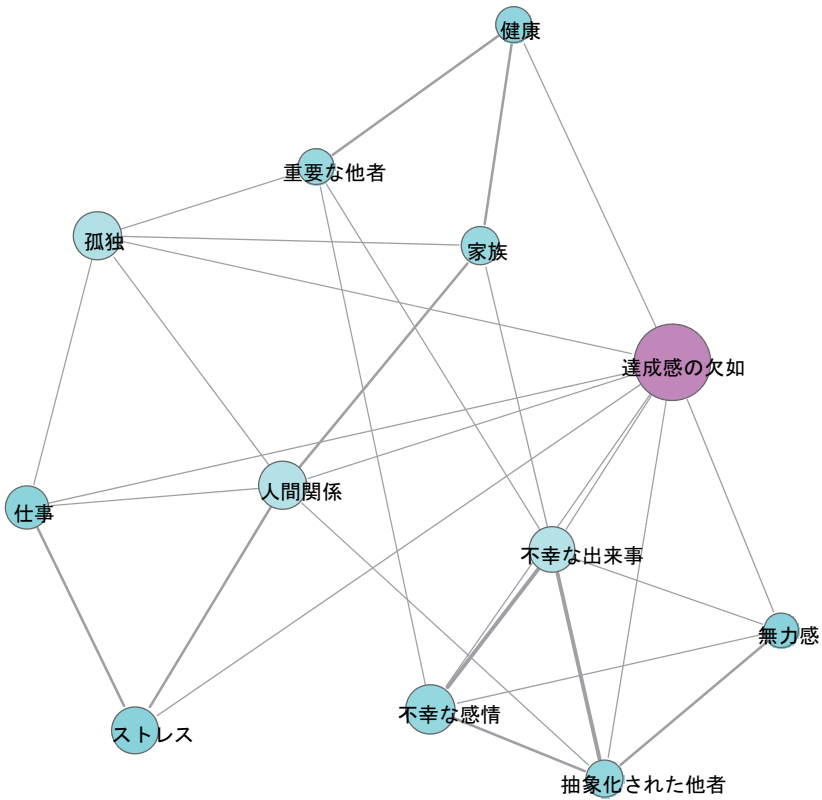


図6-2：英国「不幸を感じる時」

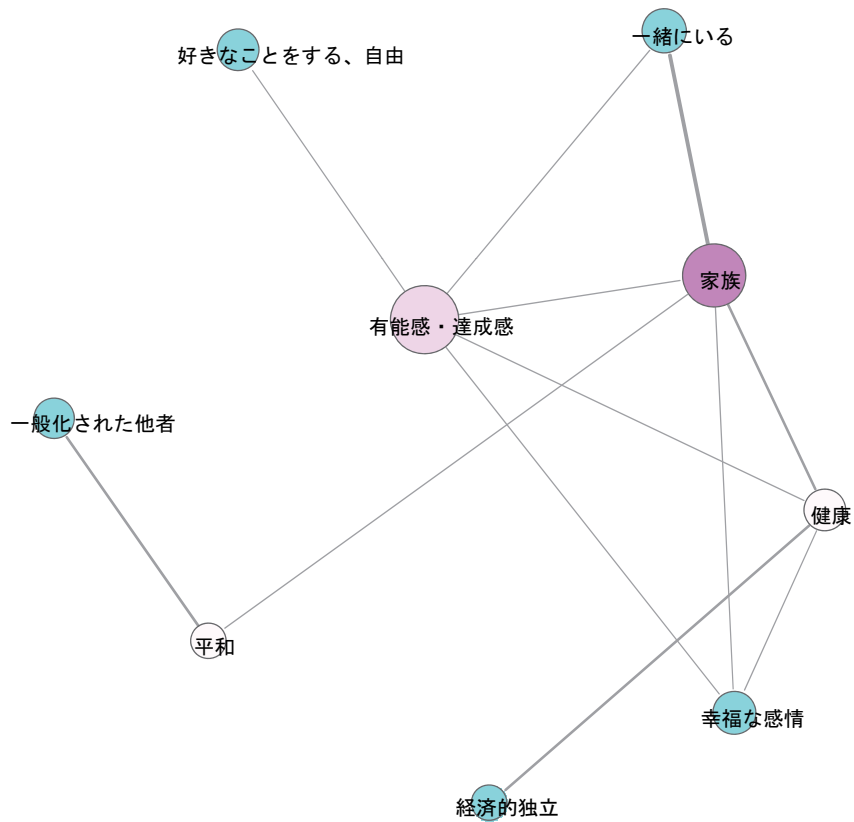


図7-1：ドイツ「幸福を感じる時」

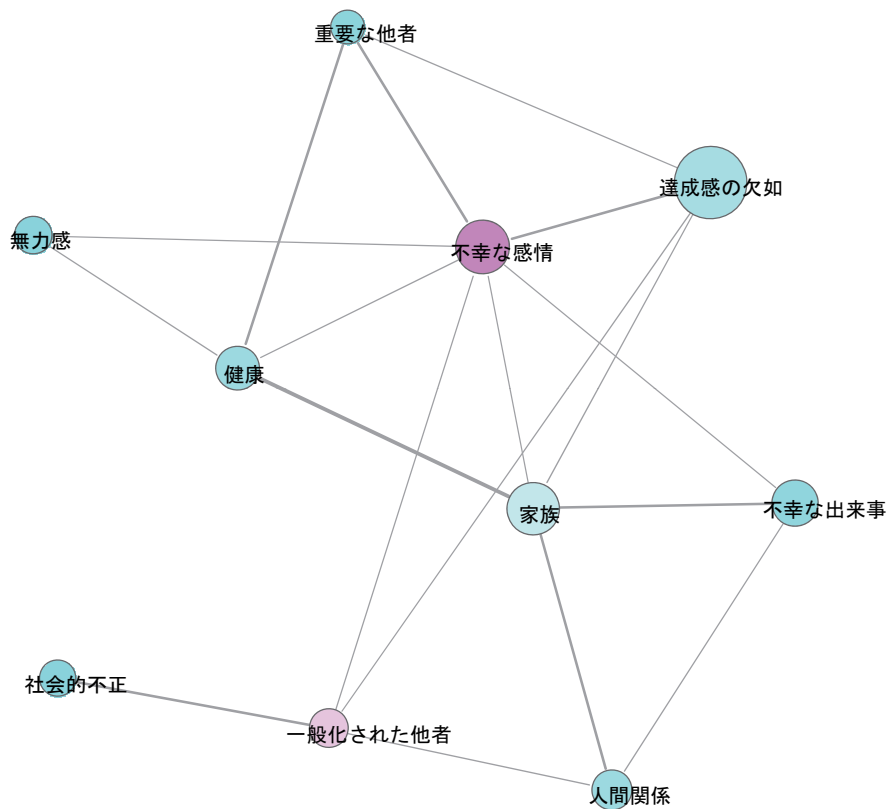


図7-2：ドイツ「不幸を感じる時」

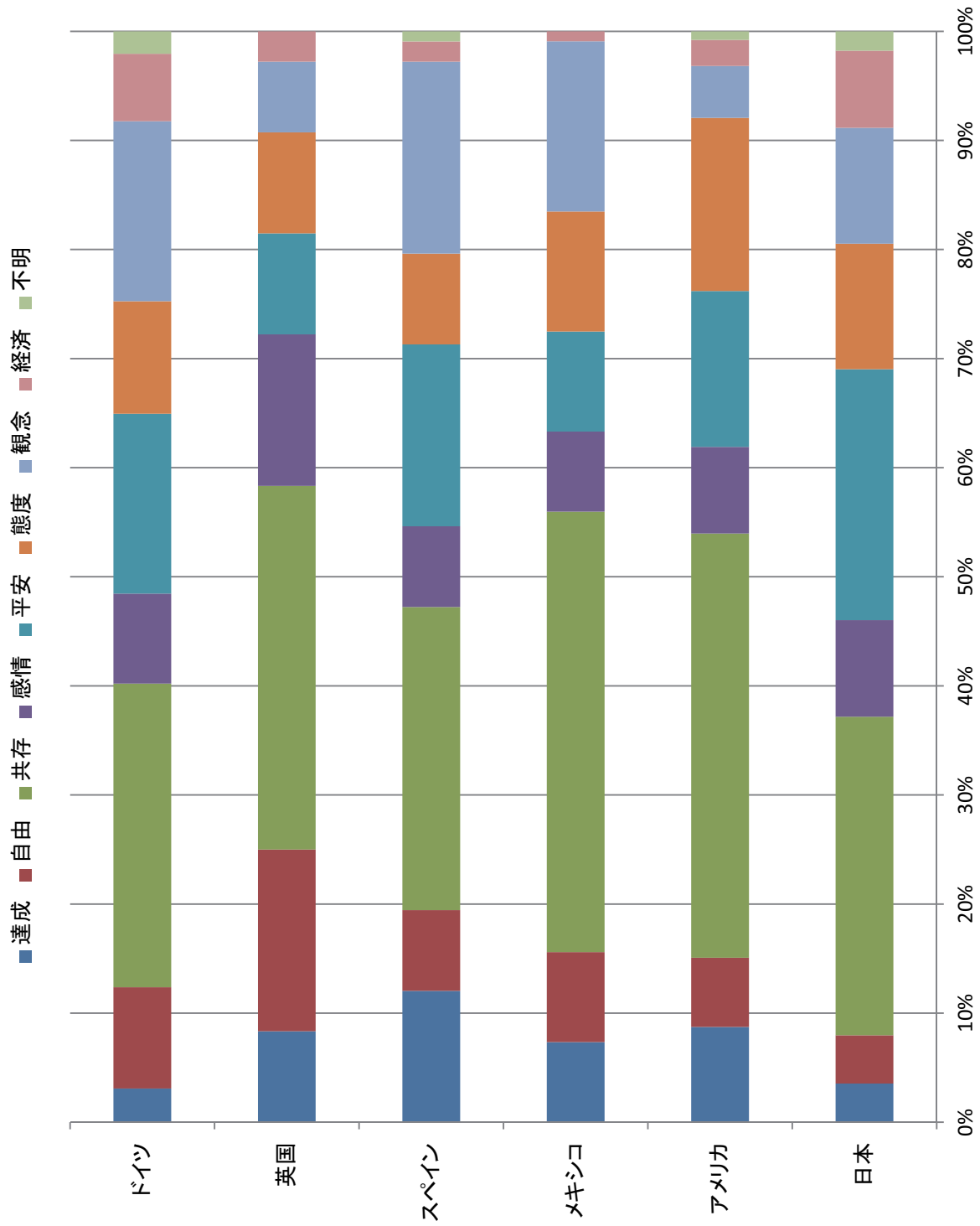


図8：Q3「私にとって幸福とは～～」に対する回答の 카테고리コーディング結果 (全回答数に対する百分率, 各国別)

Economics, psychology, and happiness

KOYASU Masuo

1. Purpose

What are the ways to happiness? Being well (healthy) and well-to-do (wealthy) are two commonly known factors for well-being. “Well fed, well bred” by Kuan Chung (c. 720-645 BC), a famous Chinese legalist and statesman, has also been a famous saying in Japan. This suggests that economics may be one of the key factors for happiness. However, everyone knows that wealth is not always sufficient to bring about happiness. Another important factor is the possession of a healthy state of mind. In this paper I will discuss the relationships between economics, psychology, and happiness using some data from the Global COE (Center of Excellence) Program “*Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds.*” The hypotheses of this Program are as follows.

2. The hypotheses

In the 20th century, despite the rapid progress that was achieved in science, technology and industry, conflicts relating to poverty, crime, international disputes and wars, and environmental disruption became firmly entrenched as the major problems facing humanity. Unresolved tasks have been carried over to the societies of the 21st century at various levels, involving individuals, societies and the international community as a whole. In school settings, those who are involved in education, including parents and teachers, have been suffering from such adverse phenomena as school vandalism and violence, bullying, and children’s refusal to attend schools. They raise a serious question concerning the state of the human mind. Ideally speaking, the human mind should be revitalized through educational institutions and organizations. However, the same institutions often inadvertently torment human beings and enfeeble the mind.

Problems of mind should be investigated in various fields, especially in the field of education. In the contemporary society of advanced information, education cannot be limited to the narrow field of schooling. Rather it should be reconsidered from the perspective of life-long learning and development in a broader context of human life and in the extended horizon of time and space.

It is the function of education that human beings obtain *a sense of capability* through the acquisition of knowledge and skill, and *a vital sense of life* through connection with nature and society. Furthermore, by making full use of these senses in attaining a certain goal, they can obtain *a sense of achievement*. Simultaneously they can enjoy *a sense of happiness*. Conversely, if a part of, or the whole of, these interconnections does not function well, various problems arise. The power of education is

also applicable to solve these problems (Figure 1). In order to demonstrate this, I will focus in particular on people's sense of achievement, especially on the roles of future time perspective on people's sense of happiness adopting the concept of *net present value* from economics.

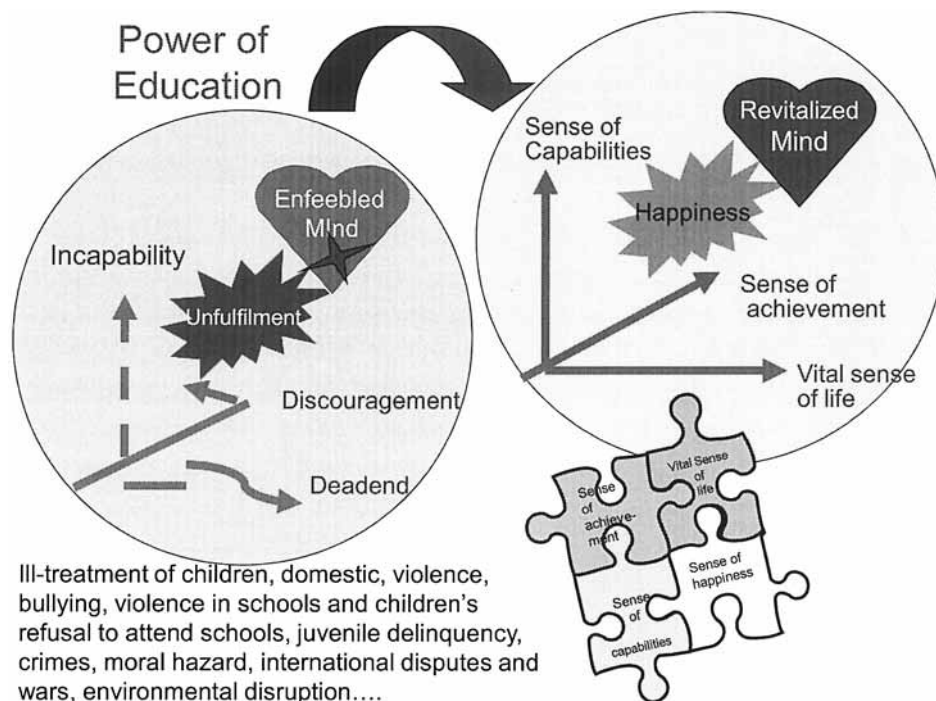


Figure 1 A schematic representation of components of happiness

3. Economics and ethics

This paper was originally presented at the 10th East-West Philosophers' Conference held at the University of Hawaii, Manoa, on the 21st of May, 2011. Its main theme was to "bring together philosophers from different cultures and with different perspectives to reflect upon a productive and sustainable relationship between economics and ethics." What are the relationships between economics and ethics? What are the factors which connect these two different academic areas? Historically, economics was considered as a *moral science*. It is well known that Adam Smith (1723-1790) was a developer of economics as a moral science. Smith entered the University of Glasgow when he was fourteen and studied moral philosophy under Francis Hutcheson (1694-1746). In 1759, Smith published his first book, *The theory of moral sentiments*, in which Smith suggested that conscience arises from social relationships and that the act of observing others makes people aware of themselves and the morality of their own behavior. Therefore, Smith was also a psychologist, though there was no such research area as psychology before Wilhelm Wundt (1832-1920) founded the first formal laboratory for psychological research at the University of Leipzig, Germany, in 1879.

Alfred Marshall (1842-1924) was famous for the words of his inaugural address as the first Professor of Economics at the University of Cambridge in 1885: “It will be my cherished ambition, my highest endeavor, ... to increase the number of those ... with *cool heads but warm hearts*, willing to give some at least of their best powers to grappling with the social suffering around them.” At first, Marshall became a lecturer in the moral sciences at the University of Cambridge in 1868. In 1885 he became professor of political economy at Cambridge where he remained until his retirement in 1908. Marshall created a new course for economics in 1903, which means he changed teaching economics under the historical and moral sciences to that of a more specialized scientific area. After Marshall, a number of leading economic theorists envisioned economics as a strict science, not a moral science. The decline of economics as a moral science lasted for a long time.

One of the most influential disciples of Alfred Marshall at the University of Cambridge was John Maynard Keynes (1883-1946). However, Keynes did not regard economics solely as a strict science. Rather, he learned moral philosophy from George Edward Moore (1873-1958), a Cambridge philosopher who is famous for the book *Principia Ethica* (Moore, 1903). For example, Keynes (1936) wrote about an imaginary beauty contest in order to explain the way people behave in the stock markets. According to Keynes, people do not vote for a contestant whom they themselves think is most beautiful, but tend to vote for a contestant whom they think other people would find most beautiful in order to increase the chance of winning the voter’s prize. The latter strategy needs “theory of mind” using psychological terminology (Perner, 1991). Keynes mentioned second-, third-, and even higher-order beliefs. I think that one of the most important enterprises by Keynes as a practical moral philosopher was undertaken when he was the financial representative for the British Treasury to the 1919 Paris Peace Conference after World War I. In the Conference, Keynes tried in vain to prevent Germany’s compensation payments being set so high. The consequences were that Germany’s economy was hurt by the heavy burden, German people suffered from hyperinflation in 1923, and that became one of the main causes of the rise of Adolf Hitler and Nazism.

Some modern economists have tried to reinstate economics as a moral science. The 1998 Nobel Prize in Economic Sciences (the Sveriges Riksbank Prize in Economic Sciences in Memory of Alfred Nobel) was awarded to Amartya Sen (1933-), an Indian economist at the University of Cambridge at that time, for his contribution to welfare economics. Welfare economics aims at studying economic well-being including equality as a dimension of welfare. Sen is well known for his work on the causes of famine. Sen (1982) wrote a book, *Poverty and famine*, showing famines were not simply caused by a shortage of food. It is known that a famine occurs when there is 15% less food available in a region than there was the year before. However, many human beings could survive on 15% less food. Therefore, the real mechanism that has led to large-scale starvation was not the distribution of food but that those who were starving did not have the means to get it and the government did not care about them. Japanese high-school students used to learn a famous saying by Mencius (372-289 BC), a Chinese philosopher who was the most famous and important disciple of Confucius: “An oppressive government is more feared than a tiger.”

One famous measurement is the Human Development Index (HDI) by the United Nations Development Program (UNDP). It was Sen's work on capabilities and functioning that provided the underlying conceptual framework of HDI, though Sen himself described this as a vulgar measure (cited from *Webster's Online Dictionary*). The 2010 HDI report combines three dimensions: 1) a decent standard of living; gross national income (GNI) per capita, 2) a long and healthy life; life expectancy at birth, and 3) access to knowledge; mean years of schooling. The 2010 HDI rankings are shown in Table 1. Japan is the eleventh.

Table 1 The United Nations Human Development Index (HDI) rankings for 2010

1. Norway	0.938	21. Hong Kong	0.862
2. Australia	0.937	22. Greece	0.855
3. New Zealand	0.907	23. Italy	0.854
4. United States	0.902	24. Luxembourg	0.852
5. Ireland	0.895	25. Austria	0.851
6. Liechtenstein	0.891	26. United Kingdom	0.849
7. Netherlands	0.890	27. Singapore	0.846
8. Canada	0.888	28. Czech Republic	0.841
9. Sweden	0.885	29. Slovenia	0.828
10. Germany	0.885	30. Andorra	0.824
11. Japan	0.884	31. Slovakia	0.818
12. South Korea	0.877	32. United Arab Emirates	0.815
13. Switzerland	0.874	33. Malta	0.815
14. France	0.872	34. Estonia	0.812
15. Israel	0.872	35. Cyprus	0.810
16. Finland	0.871	36. Hungary	0.805
18. Belgium	0.867	37. Brunei	0.805
19. Denmark	0.866	38. Qatar	0.803
20. Spain	0.863	39. Bahrain	0.801
		40. Portugal	0.795

A decent standard of living or GNI per capita is an important underlining factor that justifies the magnitude of ethics in the society. Japanese high-school students used to learn the saying “well fed, well bred” by Kuan Chung (?-645 BC) who was a Prime Minister of a small state during the Spring and Autumn Period of Chinese history. People with higher incomes are more likely to report being happy. However, in international comparisons, happiness is not a linear function of GNI per capita. This is called the *Easterlin paradox*, after Richard A. Easterlin (1926-), an American professor of economics (Graham, 2009).

Longevity or long life expectancy means that the water and food supply is enough, the health care system provides sufficient services, and disasters, wars and conflicts are scarce. If longevity is good, “longevity risk” seems to be an oxymoron combining two contradictory terms. Longevity can be a risk for pensioners who need to seek enough money to support their future life and health. I will discuss this matter later.

Education, access to knowledge, or the mean years of schooling is basically important. The quality of education is more important than the quantity of education (years of schooling, amount of knowledge, etc). Fostering critical thinking is one of the important goals for quality of education.

4. Economics and psychology

What are the relationships between economics and psychology? There is a research area called “economic psychology.” The International Association for Research in Economic Psychology (IAREP) was founded in 1982 in order to make a meeting point for researchers who are interested in the areas where psychology and economics intersect. Economic psychology is concerned both with the psychological mechanisms through which economic behavior comes about, and with the psychological effects of economic events (<http://www.iarep.org/whatisiarep.htm>).

There are two psychologists who have been awarded the Nobel Prize in Economics. One is Herbert Alexander Simon (1916-2001), an American psychologist who was awarded the 1978 Prize for his pioneering research into the decision-making process within economic organizations. The other Nobel Laureate is Daniel Kahneman (1934-), an Israeli-American psychologist who was awarded the 2002 Prize for having integrated insights from psychological research into economic science, especially concerning human judgment and decision-making under uncertainty. Why are their works so important? The key concept is human rationality.

Homo economicus has been the central dogma for the mainstream economists since the late 19th century, including Léon Walras (1834-1910), William Jevons (1835-1882), Francis Edgeworth (1845-1926), and Vilfredo Pareto (1848-1923), to mention but a few. The *Homo economicus* model assumes that human beings are rational self-interested actors who have the ability to make judgments on complete knowledge toward their subjectively defined goals, and that they know what is best for their well-being. The rational individuals seek to attain their goals to the greatest extent with the least cost, though it is not always the case that the goals themselves are rational in ethical, social, or human sense.

In contrast, Herbert Simon discussed the concept of organizational decision-making in terms of *uncertainty*, in other words, it is impossible to have complete information at any given time to make a decision. Though this notion was not entirely new, Simon was the first to discuss it extensively. Daniel Kahneman, especially in collaboration with Amos Tversky (1937-1966), demonstrated the tendency of people (including professional investors) to make risk-averse choices in gains, and risk-seeking choices in losses. People tend to be very risk-averse for small losses but indifferent for a small chance of a very large loss. Both Simon and Kahneman were skeptical about the rationality assumptions underlying economics: they stressed the importance of evidence in documenting violations of rational behavior, and they tried to provide underlying psychological mechanisms of people’s economic behaviors in connection with consumption, investment, inflation and deflation, taxation, unemployment, and so forth.

5. Future time perspective

One of the important research areas in psychology is *future time perspective* and its relationship to other psychological processes such as motivation, self-control, and intellectual and social development.

One famous method of studying development of future time perspective is to test a child's ability to delay gratification, which is known to the North American people as the Marshmallow Experiment conducted by American psychologist Walter Mischel (Mischel, Ebbesen, & Zeiss, 1972). In the experiment, a child was given one marshmallow, but promised two on condition that he or she could wait several minutes before eating the first marshmallow. Children who could wait for the delayed but bigger reward showed higher IQ score than those who could not. Two decades later, Shoda, Mischel, & Peake (1990) studied the development of each child into adolescence, and showed that young children (preschoolers) who had been able to delay gratification were psychologically better adjusted and scored significantly higher grades in the Scholastic Aptitude Test. Delay of gratification denotes a person's ability to wait in order to obtain a bigger reward. This intellectual attribute is called impulse control, and good impulse control is considered a positive personality trait, which Goleman (1996) indicated as an important component of emotional intelligence (EQ). People who lack the ability to delay gratification cannot calculate the net present value of future rewards and defer to near-term rewards of lesser value using the terms of economics.

Net present value is a central concept in discounted cash flow analysis in economics and a standard method for using the time value of money to appraise long-term projects. It is a measure of discounted cash inflow to present cash outflow to determine whether a prospective investment will be profitable. The measure net present value is used for capital budgeting, finance, accounting and so forth.

6. Why Japanese people do not feel happy

We have conducted a cross-cultural research on the sense of happiness, collecting data from six countries (Japan, Germany, England, New Zealand, U.S.A., Spain, and Mexico) using an online survey method with the help of an online research company. The participants for each country were 600 people, nearly the same number of males and females, ranging from adolescence to old age. Ninety-two items were included in the questionnaire. I will describe here only the results of the Satisfaction with Life Scale created by American psychologist Edward Diener (1946-), which is a basic and widely used tool to assess people's well-being (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985; Diener, & Biswas-Diener, 2008). This scale contains only five items noted below, but is known and used as a very reliable and useful measure of well-being:

1. I am satisfied with my life.
2. The conditions of my life are excellent.
3. In most ways my life is close to my ideal.
4. If I could live my life over, I would change almost nothing.
5. So far I have gotten the important things I want in life.

Participants answered each item using a 5-point scale (5. strongly agree - 1. strongly disagree). The mean score on the five items was calculated for each country. The results have shown that Japanese people are most pessimistic and Mexican people are most optimistic with the other four countries (Germany, England, New Zealand, U.S.A., and Spain) located in-between (2). The same pattern of results, pessimistic Japanese and optimistic Mexican, is consistently found in other items or scales of our research.

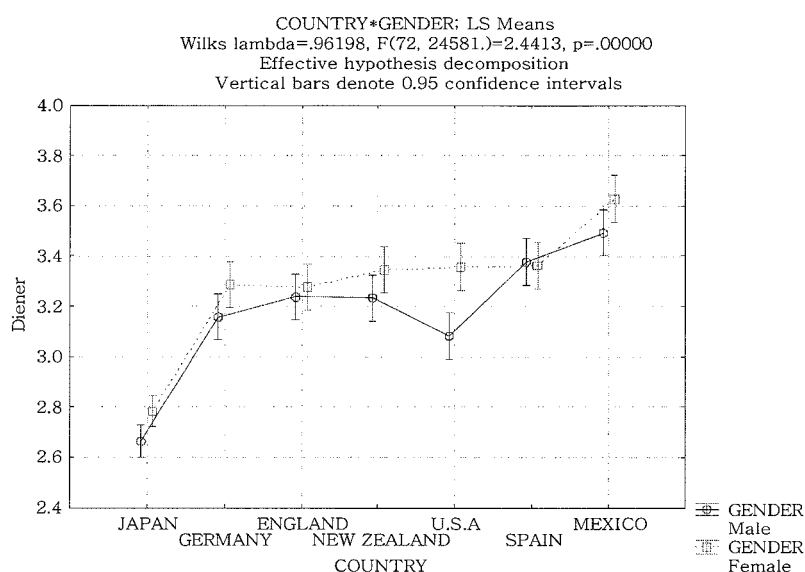


Figure 2 The results of the Satisfaction with Life Scale (Diener)

Why do Japanese people, both young and old, not feel very happy? It has been said that Japanese people have a tendency to report about themselves in a restrained manner. For Japanese, it is embarrassing to announce to people, other than within a very intimate group, that he or she is very clever, nice-looking, strong, healthy, rich, happy, and so forth. “Think of the weak” is a key concept in the Japanese way of life, because people always have chances to belong to the weak. *Mujo* in Japanese (*anitya* in Sanskrit) means that everything is changing and there is no eternal thing.

The retirement pension problem has been one of the most serious political issues in Japan. One of its sub-problems is that the Social Insurance Agency made several mistakes when they integrated three different databases together in 1997 and the errors were found in 2007. The problem of the bungled public pension-premium payment records was one of the reasons why the Liberal Democratic Party suffered a loss and a regime change occurred in the 2009 national election in Japan. However, it is very difficult for the ruling Democratic Party of Japan to solve the pension problem, because this is basically a structural problem generated from population aging.

Public Pension Schemes in Japan are composed of two state pension schemes (National Pension and Employees’ Pension Insurance) and three mutual aid pension plans (the National Public Service

Personnel, the Local Government Officials, and the Private School Personnel). The Japanese pension system is called *pay-as-you-go scheme*, in which no assets are built up in advance and revenues are directly used to finance current pension payments. In the year 1950, the population pyramid (two back-to-back bar graphs with the population plotted on the X-axis and age on the Y-axis showing the number of males on the left and females on the right) was a stable triangle figure. This population distribution by age is quite suitable for the pay-as-you-go scheme. In contrast, the population pyramid in 2010 looks like a barrel, which means that supporting young generations are shrinking and supported old generations are expanding year by year (Figure 3a-3d). The pay-as-you-go pension scheme would transfer income from the younger to the older generation. In 2009 the Japanese Ministry of Health, Labor and Welfare admitted that inequality between generations will expand in the future if we continue the on-going pay-as-you-go scheme, but claimed that the spirit of public pension system lies in mutual assistance between generations.

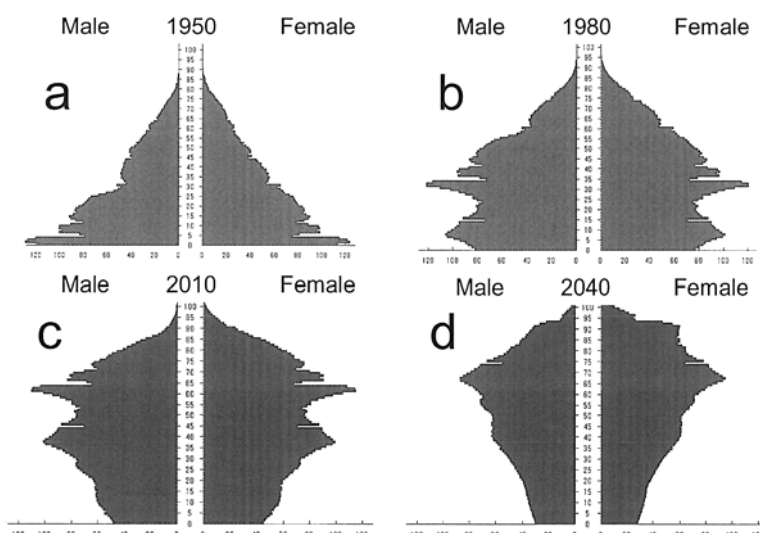


Figure 3 Population pyramid from 1950 to 2040
Source: National Institute of Population and Social Security Research

Inequality between generations caused by the pay-as-you-go pension scheme does *not* mean that senior citizens are very happy or happier than the younger generations, as our data have shown. Modern Japanese senior citizens face the *risk of longevity*: “How many more years will I live with or without disease and pain?” Or: “Will the amount of money I have saved for my retirement be enough to sustain the rest of my life?” It is difficult for them to calculate a net present value of their asset due to prolonged life expectancy. The propensity to save in the rich old generation is very high and this is one of the causes of weak domestic demand in Japan on the demand side. Some economists make the point that this high propensity to save is the true cause of Japanese recent deflation (Motani, 2010). Though this is an arguable hypothesis, it is true that deflation, a general decline in prices with a reduction in the supply of money or credit, is convenient for senior citizens who live on pension and savings only.

How about the younger generation? Why is it that young people do not feel happy, though they live in an affluent society? Canadian-American economist John Kenneth Galbraith (1908-2006) described American society in the 1950's as an affluent society, wealthy in the private sector but remaining poor in the public sector, and lacking strong social infrastructure (Galbraith, 1958). Compared to the American society in the 1950's, Japanese society today is richer and more mature, though there is much room for improvement concerning its infrastructures. One answer to the question above is that young people feel that their own net present value is low because of the seniority rule in the work place. *Nikkei Business* of March 14, 2011 had a special issue entitled "Middle and elderly people should give their seat." The front cover of the Japanese magazine is a cartoon in which a bus full of middle and elderly people have just started while many young people are waiting in rows at the bus stop (Figure 4).



Actually a lot of young people are waiting for a full-time job in excellent or good companies, but can only find a part-time job with short period term. The number of part-time workers has increased in the past 20 years. It is difficult for them to calculate net present values because of their restricted time perspective.

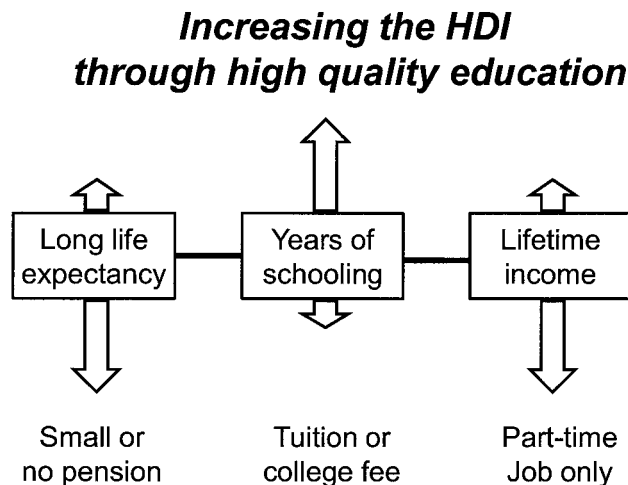
As is shown in Figure 5, 1) Long life expectancy with small or no pension, 2) many years of schooling with the payment for tuition or college fees, and 3) low lifetime income are factors which would lower Japanese people's HDI (the Human Development Index by UNDP). There are two opposite vectors in each factor.

"Long life expectancy" itself is the results of good water, food, clothing, housing, medical care, and so on. However, long life expectancy asks people for assets to support their long and even unhealthy lives. The point is that no one can estimate the total assets needed in the future because it is

difficult to anticipate how many years a person is likely to live in the future.

“Lifetime income” is one of the important factors for happiness. It is essential for ordinary people to get a full time job in order to acquire enough lifetime income. However, recently it has become much more difficult to obtain full time employment especially among young people.

Tony Blair (1953-), the Prime Minister of the United Kingdom from 1997 to 2007, gave a very famous speech at the 1996 Labor Party conference, “Ask me my three main priorities for government and I tell you education, education, and education.” We believe that the keys to open the deadlock in Figure 5 are exactly the same: education, education, and education.



**Figure 5 Balance of powers in HDI
(Human Development Index)**

7. Conclusions

In this paper I discussed the relationships between economics, psychology, and happiness. Economics was originally a moral philosophy which focused on some psychological processes of economic events. Nineteenth century economists tried to change the nature of economics from that of being a moral philosophy to that of a more specialized scientific area. Some of the twentieth century psychologists, such as Herbert Simon, Daniel Kahneman, Amos Tversky and so on, have tried to reinstate economics as a moral science with the help of psychological considerations. Considering these, happiness is a very important topic in both economics and psychology. Though Japanese people’s HDI (the Human Development Index by the United Nations Development Program) score is relatively high, they do not always feel happy. The 2010 HDI index includes a decent standard of living (GNI per capita), long life expectancy, and relatively high mean years of schooling. Long life expectancy causes the longevity risk. The seniority rule in the workplace changes the meaning of high GNP per capita. Young people find it difficult to get permanent jobs. Years of schooling depends on considerable amounts of tuition and

college fees. This paper has tried to show that the key to opening this deadlock is therefore to raise the quality of education which in turn will increase a person's possibility of getting a permanent job, raise the GNI per capita of Japan, and make Japanese people happier.

[Acknowledgments]

This paper was presented at the 10th East-West Philosophers' Conference, University of Hawaii, Manoa, on the 21st of May, 2011. I am grateful to Dr. Masato Ishida for inviting me to the Conference. I would also like to express my gratitude to Prof. Emmanuel Manalo for reading and providing comments to an earlier draft of this paper.

References

- Diener, E., & Biswas-Diener, R. (2008). *Happiness: Unlocking the mysteries of psychological wealth*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71- 75.
- Galbraith, J. K. (1958). *The affluent society*. Cambridge, MA: Riverside Press.
- Goleman, D. (1996). *Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ*. New York: Bantam Books.
- Graham, C. (2009). *Happiness around the world: The paradox of happy peasants and miserable millionaires*. Oxford: Oxford University Press.
- Keynes, J. M. (1936). *The General Theory of Employment, Interest and Money*. New York: Harcourt Brace and Company.
- Mischel, W., Ebbesen, E. B., & Zeiss, A. R. (1972). Cognitive and attentional mechanisms in delay of gratification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 204-218.
- Moore, G. E. (1903). *Principia Ethica*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Motani, K. (2010). *The true cause of deflation*. Tokyo: Kadokawa Publishing. [in Japanese]
- Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: The MIT Press,
- Sen, A. (1982). *Poverty and famine: An essay on entitlements and deprivation*. Oxford: Clarendon Press.
- Shoda, Y., Mischel, W., & Peake, P. K. (1990). Predicting adolescent cognitive and self-regulatory competencies from preschool delay of gratification: Identifying diagnostic conditions. *Developmental Psychology*, **26**, 978-986.

(教育認知心理学講座 教授 子安増生)

Economics, Psychology, and Happiness

KOYASU Masuo

This paper aims to discuss the relationships between economics, psychology, and happiness. Economics was originally a moral philosophy which focused on some psychological processes of economic events. However, nineteenth century economists tried to change the nature of economics from that of being a moral philosophy to that of a more specialized scientific area. Some of the twentieth century psychologists have tried to reinstate economics as a moral science with the help of psychological considerations. One of the important results is the HDI (Human Development Index). Though Japanese people's HDI is relatively high, they do not always feel happy. The 2010 HDI includes a decent standard of living (GNI per capita), long life expectancy, and relatively high mean years of schooling. However, long life expectancy causes the longevity risk. The seniority rule in the workplace changes the meaning of high GNP per capita. Young people find it difficult to get permanent jobs. Years of schooling depends on considerable amounts of tuition and college fees. The key to opening this deadlock is therefore to raise the quality of education which in turn will increase a person's possibility of getting a permanent job, raise the GNI per capita of Japan, and make Japanese people happier.

幸福感国際比較研究報告書 : A cross-national study on happiness

発行者: 子安 増生 (グローバル COE 拠点リーダー)

刊行年月: 平成 24 年 3 月

印刷会社: 中西印刷株式会社

連絡先: 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科・子安 増生

電話・ファックス 075-753-3063

電子メール HGB03675@nifty.com
